

二次元

MISS BLACK特製抱き枕カバーの情報も載ってるよ!

cover illustration by 無望菜志

# 2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

今号の特集

## TS 性転換

2D DREAM MAGAZINE

無望菜志

カラーピンナップポスター  
スッキーニ  
いるまがかり

カラーイラストギャラリー  
ROGA / 左藤空気

表紙&ピンナップ  
テレホンカード  
応募者全員  
サービス

大人気えっちマンガ  
&4コママンガ

ぼふえ / おおたけし  
助三郎 / 綾瀬ちよこ  
嘉納あいら

巻中カラーイラスト小説

新連載小説

陵辱者に追われるヒロインたち!

獵辱島  
スレイバハンティング

大熊理喜×池田靖宏

毎号好評!分岐小説

TS騎士シャーリー  
北悦楽の翼

狩野景×SAKULA

大好評連載&読み切り小説

注目の新作美少女ゲームを小説化!



もののけ淫妖譚

斐芝嘉和×アライノブ  
キャラクター原案:ひくちいさみ  
原作:XXX

上田直がの×雑森瑞羽

愛枝直×A.S.ヘルメス

酒井仁×牡丹

火村龍×アサノシモン

DIGITAL EDITION  
デジタル版

vol.67

2012

12

立ち読み版

雷の戦士ライディ

筆祭競介×和馬村政 原作:ZyX

投薬被検体Rの記録

小説 空輝

イラスト Roiga

「くそがあつ！」

「勝手の違う肉体を、懸命に駆使して群がる敵をなぎ倒す。けれど、多勢に無勢。」

「いつしか袋小路に追い詰められ、とうとう手足を押しさえられてしまった。」

「元とはいえば、こんな身体にされたのがケチのつき始め。」

「恨めしい目で見下ろした己の胸元には、あるはずのないふたつのふくらみがこんもりと。男物のスーツを盛り上げ、過剰な自己主張をし続けている。」

「レン。あなた、特務捜査官だったんですね。」

「俺の手帳つ、勝手に見るな！ つか、どさくさにまぎれて乳触つたら、てめえ！」

「元が男だろうが見境なく発情する、家畜以下の連中。そんなヤツらの好奇と欲情の目に晒される状況は、恐怖や不安よりも先に吐き気を催すほどの嫌悪感を湧き立たせる。」

「おつと失礼。あんまり見事なものだったので」

「群がるタニどもは運悪く全員が男で——身体検査と称し、人の身体をベタバタと触りまくる。」

「元は男と思えぬ卑猥さだねえ。……っ！」

「胸にうずまろうとしたカス野郎の鼻っ柱に、唾を吐きかけ。一瞬間まったそいつの表情を見て、ほんのわずかだが溜飲を下げる。」

「てめえらの組織が打ったヤクのせいだろうが！」

「以前捕まった際に、拷問代わりにと無理矢理投与された薬。媚薬と麻薬のブレンドだったらしいそれのおかげで、こんな身体にされてしまったのだ。」

「ひとり残らずぶつ殺してやる」

「……状況を理解できていないようだね」

「相当汚い手を使ってまでこいつらの組織を潰そうとした結果。最後っ屁みたいな反撃にあつて、麻薬製造施設の袋小路に追い詰められている。」

「（理解してるさ。臭い口で言われるまでもねえ）」

「この場にいる残党をぶち殺せれば、それですべて終わるんだ。その後この身がどうなるかが知ったこつちやない。復讐さえ、果たせるならば。」

「また、身体で思い知らせる必要があるかな？」

「ぶにっ。」

「……っ。ほんつと、毎度毎度……」

「前度も、目の前のヤツは執拗にそこを——股間を指先で弄くり続けてくれた。」

「（あの時は二時間くらい……潮噴いて失神するまで弄られたっけ）」

「道具も使われた。乳首とクリトリスにローター、股間とケツにパイウを装着させられ、三日間放置されたこともあつた。」

「（……女になりたての俺のバージン奪つたのも、紫色したでつかいパイウだったな）」

「イボのたくさんついた、長さも太さも規格外の、凶悪なヤツだった。小汚い野郎のツラを「ロストバージンの相手」として一生記憶するよりは、ずいぶんましな仕打ちだったと今は思っている。」

「（わめきたいのをこらえる俺の反応を楽しむみたいにグリグリ押し込んでくれた糞も、もう死んだ）」

「今度は前のような丁寧な扱いは期待せぬことだ」

「なんせお前には仲間の大半を殺されてんだからな。いわば、これは正当な復讐というわけだ」

「それはこつちの台詞だ。必ず全員、あの世の仲間のところへ送り届けてやる。」

「ぶちっ、ぶちぶちっ。」

「ほ、ほっ。この乳！ 初めて味わってから、夢に

見ぬ日はなかったぞオ

「ジャケットのボタンを引きちぎるやいなや、ナマ乳の谷間に顔うずめた変態すだれハゲが鼻息荒くまくし立てる。」

「二張羅の代金も後で請求すつからな！」

「ぶつふう……んん、ぢゅ……！ ちゅばあつ！」

「つ、くあつ！ こ、のっ……すだれハゲ！ 伸ばすな引つ張るなつ、かつ、ア、嘔むなアア！」

「むず痒さと嫌悪感。認めたくはないが、弄られっぱなしの股間の奥からにじみ出る肉悦の感情を自覚しつつ、「手足が自由になったら真つ先に、コイツの残り少ない髪をむしってやろう」と心に決めた。」

「ツラも性根も最悪な上に笑い方が癩に障る。その分、泣き叫ぶ様がさぞ爽快に感じられることだろう。」

「やはり、まずうるさい口を塞ぐべきだな」

「ひ、ひ。またクスリで感度上げて泣かせたげるよオ。こないだあれ打つた売女は、乳首ピンピンにおつ勃たせて……死んだんだア」

「くりっ……」

「ふあ……っ、ち、くしょうつ、クソツ、たれが」

「指でそろつとつまんだり。爪先で掻いたり。わざと弱めの刺激で焦らしているつもりか。お生憎様。」

「いつまでも前回と同じ状態だと思つたら、大間違いだ。やつとピナス用に空けられた両乳首の穴も塞がったんだ。もう、快楽に負けたりしない。」

「おうおう。お漏らししたみたいにお股を濡らして。相変わらず、はしたないオ」

「ホラ吹くんじゃっ……んっひああうっ!!」

「ぶちゅうっ……！」

「股から愛液がにじみ出る。男が指で押せば押すほど、止め処なく。まるで、身体に刻まれた肉の悦びをまた与えて欲しいとねだるように。」

「ぜ、絶対に全員殺してやるからなあつ……」

「宣言に、隠し切れぬ艶がにじんでしまつていた。」



友情は、破瓜の血に濡れ穢れゆく

小説 空蟬

イラスト 左藤空気

「せえいっ！」

——ドゴォッ！

「ぐあつ……」

渾身の膝蹴りがみぞおちに決まり、相手の男が床に手をついた。

「……竜——」

道場破りだ——。そう言って半刻前に上がり込んできた相手を、どんな顔で見ればいいかわからない。片倉竜一。一年前まで道場で共に汗を流した仲間であり、小学校から同じ学び舎に通う幼馴染みだった。「へ……一年前もこうやって、てめえに見下ろされてたっけなア」

髪を金に染め、肌も浅黒に焼いた幼馴染みが、吐き捨てる。一家で消息を絶っていた彼が目の前に現れた時、瞬時には判別できなかったほど、姿のみならず雰囲気も変わり果てた竜一が今、目の前にいる。「なんで……道場破りなんか」「……へっ。想い出の道場が潰れそうだってんで、懐かしくなっちゃってなア」

負けを認めたのか、床の上であぐらを掻いた竜一が、天井を見上げながらうそぶく。

「本当に、ひとりもいなくなっちゃったんだな」

一瞬、昔を懐かしむように竜一は目を細めた。高名な格闘家だった父が亡くなって、三ヶ月。

支柱を失った道場は見る間に傾き、師範代を始め門下生全員が去っていった。

「こんなもんだ凍太郎。誰だって、利用価値がなくなりゃ、波が引くみてえに離れてく」

「……っ、なにが……」

あった——視線を交わした竜一の能面めいた無表情を前にし、言葉の続きを紡ぐことはできなかった。「こまけえこたあいいじゃねえか。そら、手、貸せよ。まだ膝がガクガクで立てそうにねえんだわ」

結局、道場破りに来た理由は聞けずじまいだったが、彼の昔の顔が垣間見えたことで、警戒心は解けつつあった。

（また、昔みたいに戻れるかもしれない）

父を亡くし天涯孤独の身、道場も手放すことになるだろう。でも竜一が、一番の親友が戻ってきてくれるなら。取り戻せるものがあるのなら。

差し出した手を握る彼の拳に、練習でできたタコが残っていた。懐かしい触れ心地に目を細め、握る腕に力を込めて彼を引き上げようとした、その瞬間。

予想以上に重たい抵抗に、踏ん張りも利かずに、逆に竜一の肩口へと倒れこんでしまう。

（足に、きてる……。ハハ……竜一の蹴りも錆びついてなかったから……）

「おっと」

抱き留めてくれた親友に謝意を示そうと振り向けた、その唇を。不意に竜一の指が割れ裂いた。

「ん、ぐ……っ!!」

ぐりゅっ！ 嘔むわけにもゆかず目を白黒させている間に、強引に押し入った指から、なにかが喉奥へと放たれる。唾と共に胃袋へと滑り落ちていく物体。それが錠剤のようなものであると判別し、反射的にえすいたけれど、もう遅い。

指を引き抜き離れていく竜一の表情は、こらえきれない愉悦を噛み締めているようだった。

「な、に……飲ませたっ？」

胸が急激に熱を孕んで、不可解な、むず痒さにも似たもどかしさが腰の芯に生じる。胴着の胸元が妙に締めつけられて、息苦しさも覚えていた。

「クスリだよ。俺と、お前のためになる、な」ニヤニヤと笑う竜一。裏切られたのだ、という想いに浸る暇さえ、彼は与えてくれない。

——ぐっ！

奥襟を取られて力任せに引き立てられた。

「く……そっ」

脇を締めて、襟を掴む竜一の手を目線を移す。その際、わが目を疑うものがふたつ、己の胸元にあるのを見つけてしまった。

「な……!! これっ……」

「なんだ。お前、女の乳も見たことねえのか」

おかしように笑って竜一が襟から手を離す。その千載一遇の好機を見過ごすほど、狼狽と驚愕とで心身は乱されていた。

（ど、どうしてっ……こんな……う、疼くうう）

しげしげと見つめると、胸の先端——桜色になった部分がむず痒さを訴える。

「案外乳首でけえのな、お前」

「……っ!!」

指摘されて羞恥に潮れた乳頭が尖り立つ。胴着の前を閉じようとした際に擦れた乳頭が、震えながら歓喜の産声をあげた。

「ふあっ！ あっ、つく、う~~~~っ！」

膝が笑う。心なしか寂しくなった股間の奥から、なにかジュワリ染み出してくる気がする。

——ガラッ！

「ふ、あ……。え……っ!!」

「ちーす竜一さん」「おほっ、イイ乳い〜」

新たな来訪者——チンピラ風の連中に手を上げて応じる竜一。おそろくどの顔も彼の手下なのだろう。

（く、そ……オッ！ 構えなきや、構、え……）

頭数の増えた敵を前にして必死に、甘美に悶える心身を鼓舞する。その足掻きすら嘲笑うように。男どもは一樣に下卑た笑みと視線を寄越す——。



脱出できれば生還、捕まれば強制陵辱——

クソーと天才格闘少女が  
極限の逃走ゲームに挑む!

# 獵辱亭

スレイブ  
ハンティング

第一話 捕らわれた女格闘家たち

小説 / おおくまたぬき **大熊狸喜** 挿絵 / いけだやすひろ **池田靖宏**  
NOVEL ILLUSTRATION

夏の終わりの日曜日。

秋を思わせる空はどこまでも高く、青く、晴れ渡っている。

気持ちの良い晴天の下、武道館の席という席は、多くの格闘ファンで埋め尽くされていた。

第一回、全国無差別格闘選手権。

男女を問わず、あらゆるジャンルの格闘家が、一定のルールで闘う格闘大会である。

声援が轟く二つの舞台では今、それぞれ準決勝の決着がつかうとしていた。

第一舞台の試合は、三節棍の使い手対女忍者。

筋肉質で引き締まった背の高い男性選手が、得意の武器を身構え、くノ一を油断なく威嚇している。

中国服の眼光鋭い強者に対し、一步も引かずに、ジリリと詰め寄る女忍者だ。

試合は既に終盤戦。

幾つかの技の応酬の果て、男は息が乱れ、対戦者の女は一度だけ深呼吸をする。

「ふうう……」

朱いくノ一衣装に身を包む乙女、久遠寺火憐。

涼しいツリ目に細い鼻筋、引き締まった口元は、和風美人という言葉が相応しい。

長い黒髪を纏めた艶めくポニーテールが、サラリと揺れて、細い首に巻かれた赤いマフラーと一緒に靡く。

大胆にはだけた袖無しの忍者服に包まれた肢体は、大きなバストが衣装を中から押し出している。

極細な鎖帷子からは深い谷間を覗かせていて、二つの巨乳が動くに合わせて、タプツと揺れていた。

細い帯を巻いた、折れそうなほど引き締まったウエスト。

そして滑らかに広がる大きな女腰。

スパッツは美脚の付け根まで剥き出しで、たつぷりヒップをキツキツに包み、丸く形を見せている。

巨尻の谷間や処女の割れ目にまで、ごく薄い生地が食い込んでいた。

ムッチリと脂の乗った腿は艶々で、二十歳前の若くて白い肌を惜しみなく露出。

腿からヒザ、脹ら脛を通って足首に続くラインはキユツと細く絞られていて、年頃の女性らしい柔らかい曲線美を見せつけていた。

黒いロンググロブとブーツには、赤いアーマーを装着。腰の後ろに携えた忍者刀は真剣だけど、試合だから使用しない。

くノ一乙女の油断ない足先が、対戦者のレンジに触れた。

と同時に、三節棍の男が攻撃。

「ホオオアアア！」

素早く突撃をかけると同時に、左手の棍での突きを見せながら、瞬時に右手の棍を鋭く振り抜く。

「むっ！」

一手二手を屈んで避けると、火憐の巨乳が上下に大きく弾む。

屈んだヒップが大きく突き出し、柔らかいポトムは更に深く、お尻の谷間に食い込む。

薄い衣装の胸の膨らみでは、緊張で硬化する先端の媚突が、ポツンと浮き出ている。

身を伏せたくノ一の美顔を、強烈なヒザが襲う。対戦者は、火憐の避けを完全に読んでいたのだ。

——ツツピュンツ！

黒髪美女の顔面裂傷。

会場の誰もがそんな悲劇を予感したものの、勝利を確信する男のヒザは、空を切る。

「何っ!？」

ヒザが蹴り当てたのは、乙女の残像。

同時に、男の頭上から透き通るような、しかし必殺の気合が籠もった美声が轟いた。

「久遠寺忍術、炎の鷹っ！」

高々と飛翔したくノ一は、アーマー裏などに仕込んでいた特殊な薬剤を、一瞬で炸裂。

蹴りの動作で素早く両脚を擦りあわせると、その瞬間、乙女の全身がゴウツと眩く発火した。

跳び蹴りの姿勢で希薄なポトムが引かれ、更に深く食い込みを見せる、処女の割れスジ。

忍術の炎を全身に纏い、対戦者に向かって高速のキックを繰り出す。

武闘家の男は振り仰ぐものの、強引なヒザ蹴りでバランスを崩してしまっている。

炎の一撃を、まともに左頬へと受けてしまった。

——ツドゴオツ！

「つぐああっ！」

数メートルと飛ばされたマツチョな対戦者は、そのまま場外へと転落。

立ち上がるのも困難なほどのダメージを受けて、試合は火憐の勝利となった。

「勝者、久遠寺火憐選手！」

城内アナウンスに、観客たちは大声援を上げる。そして勝者の乙女は、対戦者の手を取って舞台上げると、握手を交わした。

「ありがとうございます。ああ……とても充実した試合でしたわ」

どこか高飛車ながら愛らしくニコリと微笑むくノ一の乙女に、敗者の男の頬が仄かに染まる。

「い、いいえ、その、こちらこそ……」

頭一つ背の高い男性に、美しい所作で頭を下げる黒髪の女忍者。

火憐は、代々続く忍者覚「久遠寺流忍術」の、亡き父の後を受け継いだ、第十七代頭目。

類似希な忍の才と、隠しきれないカリスマ性で、若くして一族を率いている。

しかし里に籠もっている事を良しとせず、現在は都内のマンションを臨時の本拠地として、一人暮ら

しを満喫。

そんな乙女は、格闘ファンの人々に「女王カレン様」と呼ばれて愛され、会場中の男たちから熱烈なラブコールまで受けていた。

「女王カレン様あああつ、ルビーよりもバラよりもおつ、お美しいいいいっ!!」

「まあ、皆様つたら……正直なんですから」

そんな高慢な微笑みすら、輝くような愛嬌に満ち溢れていた。

そして隣の第二舞台でも、準決勝の終盤戦。

細身で素早い爪使いが、両腕に装着した鉄の爪を鋭く突き出す。

「ハイイッ!」

目にも留まらぬ早業を紙一重でかわすのは、火憐よりも更にうら若き、格闘女学生だった。

小柄な身体で、最小限のバックステップを見せる少女の名は、轟霧華。

やや赤い髪を、ボーイッシュなショートカットに纏めていて、頭には水色の鉢巻きを巻いていた。

優しい瞳が、戦いの緊張感で厳しく引き締まっている。小さな鼻とブルブルのリップは、まるで小型犬のように愛らしい。

平均よりも小さな肢体は、標準よりもやや恵まれたラインを見せている。

通っている学園の夏服ブレザーに身を包み、首元には大きな赤いリボンがフワフワ。

構えの上下動に合わせて、身体に比して大きめなバストがブルブルと揺れていた。

濃紺色の制服の上からでも細く見えるウエストと、パツと広がる少女腰。

赤いチェック柄のミニスカートはギリギリサイズで、今にも下着が覗けそうだ。

艶々の腿は、白いオーバーニーで絶対領域を確保しながらも、足首までの締まったラインを見せつけ

ている。

足下は学園指定のシューズだけど、手首は格闘用の指ぬきグローブで固められていた。

対戦者の爪をかわした少女は、ニコリと微笑んで一手を打つ。

「あたしの番だね。いっくゾーっ!」

言うが早いか、驚くほどの俊足で相手の懐に入り込むと、素早く上段蹴りを見舞う。

高速の接近と頭部への蹴撃で、制服の胸部が左右別々に、大きく弾んだ。

大胆な開脚でスカートが捲れると、純白の下着がチラリと公開。処女の柔らかい割れ目の影までも、クッキリと浮き立させていた。

しかし爪の格闘家は、鍛えた柔軟な肉体を横にしならせ、鋭い蹴りを素早くかわす。

上段蹴りを外すという致命的なミスで、対戦者の男が見逃すはずはない。

「隙ありっ!」

全身のバネを使った鋭い爪が、少女の脇腹を、ヘビの如く襲う。

しかし霧華は、蹴り上げた足を捻るように、片足立ちで身体ごと高速反転する。

横の開脚から一転、後ろに向かって縦開脚した媚尻。ムッチリと盛り上がる左右のヒップは、その間でキュッと締まるショートツ越しの処女肉を晒す。

背中を向けて、素早くつま先を落とすという変形の蹴りで、男の爪を叩き落とした。

「何っ!?!」

「えへ、引つかかったね!」

なんと、大振りな上段蹴りがフェイク。

利き腕を蹴られてダメージを受けた男に一瞬の隙が生まれると、少女は素早く意識を集中。

両脚を肩幅で踏ん張って身体を引いて、両掌の間で「気」を練った。

霧華の掌が虹色に強く輝いて、刹那で強烈な爆發力が溜められる。

「ハアアッ——気功撃っ!」

相手に向かつて両手を掲げると、掌からは七色の光と共に、衝撃波となった気が襲い掛かった。

「つばしゅうううううっ!」

「つがふううっ!」

利き腕を蹴られて隙だらけとなっていた男は、がら空きの腹部に気合弾の一撃。

まるで牛にでもはね飛ばされたかのように、はるか後方へと、ゴロゴロ転倒させられていた。

強烈なダメージを受けた対戦者は、そのまま戦闘不能。自ら、審判に敗北を宣言する結果となった。

場内アナウンスが、勝者を告げる。

「勝者、轟霧華選手!」

そして再び、会場が歓声に包まれた。

しかし勝利した霧華は、別な事で喜びの笑顔だ。「えっへへ。今日は気が乗ってて、すっごい気持ち良かったっ!」

頬を染めて、満面の笑顔で舞台狭しとピョンピョン跳ね回る、決勝進出の格闘少女。

ジャンプに合わせてミニスカが捲れ、純白のショートが見え隠れしていた。

霧華は、ごく普通の家庭に生まれた少女。父はサラリーマンで、母は専業主婦だ。

そんな霧華は、子供の頃にテレビで見た格闘技に感動し、全てを独学で習得。

秘められていた才能は見る見る開花をして、小学生の頃には、道場に通う男子にも負けないほどの格闘センスを見せていた。

中等科になると、まるで昭和の格闘マンガの主人公の如く、道場破りみたいに、近所の道場に試合を申し込んで廻っていた。

そして高等科に通う現在まで、公式や非公式を問

わず、一試合も負けた事がない。

まさしく不敗の少女。

霧華の評判は、次第に口コミで広がってゆく。

やがて格闘ファンのみならず、あらゆるジャンルの専門家からも「百年に一人の超逸材」と、太鼓判を押されていた。

実は霧華は、兄弟も多く、弟が四人と妹が三人もいる。

両親に負担をかけたくない少女は現在、実家を出て近所の叔父さんが経営しているアパートで、一人暮らしをしていた。

炊事洗濯を自分でこなしながらの、学校通い。

一見すると超優等生だけど、本人は意外と天然少女だ。思い立ったが吉日の如く、突然学校を二〜三週間も休んで、武者修行に出かけたりする。

だから、格闘の才能に反して学業の成績は、下の下の更に最底辺。しかし霧華自身は至って能天気だから、全く気にしている様子もなかった。

試合に勝利した少女が、お客さんたちに向かって元気に手を振る。

「みんなっつ、今日も勝ったよっつ！」

小柄で明るくて愛らしい格闘少女に、ファンの男性たちは盛大な拍手を送っていた。

そして十五分の休憩。その後、今大会、最大のイベントが待っているのだ。

天才くノ一・火憐VS不敗の格闘少女・霧華。

世紀のベストバウト確実な決勝カードに、観客たちは胸を躍らせ、試合開始を待っている。

舞台から降りて控え室に向かう格闘少女を、くノ一の乙女は優しい笑顔で迎えた。

「あ、火憐さん♡」

「流石ね霧華。半年前の大会よりも、確実に強くなっているわ」

これから決勝で戦う二人なのに、そんな空気を一

切感させないほど、笑顔でハイタッチ。

数分後、火憐と霧華はそれぞれの休憩室で、静かに瞑想していた。

「霧華との試合……いよいよですわ」

二人が正式に試合をするのは今回が初めてだけど、実はプライベートではとても仲が良い。

火憐は明るくて屈託のない霧華を妹のように感じていて、霧華も美しく落ちていた火憐を姉のように慕っている。

お互いに組み手などの練習もするし、一緒にお風呂だつて入る間柄だ。

今回の大会も、霧華が出場するから参加した。

里の爺やからは「もう少し、おしとやかになさりなされ」とか「少しはご自分の身の安全もお考え下され」とか言われている。

お互いに色々な格闘大会に参加はしているものの、体格の差で、試合をした事はなかった。

だから、霧華が参加を決意した今回の無差別大会は、火憐としても絶対に出たかったのだ。

ただし、爺やたちには黙って参加。

（だって、普通の格闘大会だつてうるさい爺やですもの……無差別大会なんて知ったら、絶対に参加させてくれませんか）

後で大目玉を食らう事は解っている。

だけど今は、親友であり妹であり、そしてライバルでもある霧華との試合が、楽しみで仕方がない火憐だった。

「……あと六分」

ふうっと思を吐いて立ち上がる。

気分をほぐす為にストレッチをした時、乱暴にドアが開けられた。

一瞬で身構えたくノ一の控え室に、黒いスーツに身を包んだ三人の男が乱入してくる。

背後には更に三人ほどの、同じ姿の男たちも見え

て、ただならぬ雰囲気を感じられた。

「……どちら様ですか？」

「我々と一緒に来て頂こうか」

丁寧だけど高圧的に答えながら、乙女を部屋の隅に追い詰めつつ、男たちが手を伸ばしてくる。

「あらあら、女性の誘い方も知らないのですね。大人の男性でしように、なんと哀れな」

クスッと笑った途端、火憐は鋭い戦闘の面持ちへ。一瞬で集中すると、強烈な忍術を発動させた。

「久遠寺忍術、曉の波っ！」

胸の前で印を結ぶと、足下から周囲に向かって強烈な炎が発生。男たちを巻き込みながら、控え室の全体が炎で包まれる。

「っぐわああっ！」

炎の波と壁への激突で、三人の乱入者はダウン。部屋の外で残った男たちを見据えると、彼らは何かを確かめたように、笑った。

「OK。十分だ」

謎の納得と同時に、閉じられたドアの鍵がカチリと施錠される。

「……今度は何ですか？——っ霧華!」

一瞬で、不安な想像をして緊張。自分が襲われたという事は、霧華だつて危険な目に遭っているのでは。

「くっ……!」

しかし急いでドアノブを捻ったと同時に、室内に白いガスが充満してきた。

「……シユウウウウウウウウウウ……」

「なっ——こ、これは……?」

不測の事態に、慌てて口元を押さえる。室内を見回すと、怪しいガスは換気口から勢いよく噴霧されていた。

火憐に倒された男たちをも、巻き込んで。

（いったい何事ですか?! 誰がこんな事をつ?!）

吸い込んではいけない。

しかし謎のガスは皮膚からも浸透してきて、くノ一少女の意識が急速に遠退いてゆく。

「これは、催眠ガス……なぜ……?」

扉の向こう、向かいの控え室からは、激しく扉を叩く音と、くぐもつた霧華の声が聞こえた。

「火憐さんつ、火憐さ……あうう」

「き、霧華あ……うう……」

少女にも、きつと同じ事が起こったのだろう。

妹の身を案じながら、くノ一乙女の意識が闇の中へと、墮とされていった――。

「う……ん……」

(……ここ、は……?)

意識を取り戻した火憐たちは、見知らぬ空間に横たわっていた。

広くて薄暗い、密室とおぼしき周囲。

倉庫みたいな室内は、鉄の壁に備えられた間接照明だけが光源であり、天井は見えないほど高い。

重たい頭と気怠い身体を起こそうとしても、肉体は痺れたように力が入らなかつた。

少しずつ頭が冴えてくると、自分たちに起こった事が思い出される。

(……そうですわ、私たち……突然、部屋に催眠ガスが充満して……)

ハツとなつて、ユルユルと辺りを見回したら、すぐ隣では霧華が目覚ましたところだつた。

背中が妙に痛いのは、結構長い時間、堅い床に転がされていたからだろう。

「霧華……大丈夫?」

「か、火憐さん……ここは……?」

格闘少女も身体を起こそうとするものの、やはり力が入らず、寝返りくらいが限界らしい。

霧華の格好は試合会場の控え室にいた時のまま。

火憐も霧華の表情で、自分が忍衣装のままだと理解できた。

妹少女の無事にホッとしながら、くノ一の乙女はなんとか俯せ状態になって、周囲を注視。

「窓もないけれど天井も見えない……はあ……何か、倉庫みたいな場所のようね」

未だ痺れる肢体は重たくて、立ち上がるどころかヒジをつけて上体を支えるのもキツイ。

(とにかく、出口は……)

俯せ姿勢の、足の方向。丸く突き出された自分のヒップの向こう側に、鉄の扉が見えた。

二人は空間の中央に寝かされていて、扉までは二十メートルほどか。

自分たちの置かれている状況は、全く解らない。しかし誘拐された事は事実だろうし、誘拐者の意図はともかく、ここに居るのは危険だ。

「と、とにかく……早くここから出ましよう……!」

「はい……!」

動けないまでも意志を決めた時、背後の扉が重たい音を立てて開かれた。明るい光が差し込むと、二人は警戒しながら、視線を向ける。

「……誰ですか?」

ドスン、と扉が閉じられると、室内には九人ほどの、黒いスーツに身を包んだ男たちがいた。

みなサングラスで顔を隠して、素顔は見えず、背も高くて体格もガッシリしている。

さつき控え室で襲ってきた輩と、同じ連中だ。中央に立ち一歩前にいる男は、この集団のリーダーだろう。不気味に笑った黒いマスクで、一人だけ顔を覆っていた。

「お目覚めのようにですね。ミス火憐。ミス霧華」

落ち着いて余裕を感じさせる、男の若い声。微笑みを思わせる声色なのに、しかし感情は感じられなかつた。

「お、オジサン……いったい誰なのさつ?」

わざと挑発気味に問う、強気な霧華。対する黒仮面の男は、オジサン呼ばわりを「くくつ」と笑い、恭しい礼をしながら返答した。

「初めまして。わたくしに名乗るほどの名はございません……とりあえず、そう……『黒の十一号』とでもお呼び下さい」

ふざけた言いようだ。しかし火憐は冷静に、相手を探るように対応する。

「随分な招待ですわね……それで、黒の十一号さん。いったい私たちに、何のご用かしら?」

不自由な身体をそのままに、媚尻の向こうに立つ男の集団を観察。

男たちはみな不動の姿勢で、二人の女のヒップに特別な視線を向ける事もない。

随分と統率の取れた集団なのか。

そんな火憐の思考と関わりなく、仮面の男が説明を始める。

腕時計らしきスイッチを操作すると、男の足下の床が一メートル四方に仕切られて、更に五十センチほど上昇した。

説明の為の舞台が完成、という事らしい。

舞台の上から二人を見下ろし、丁寧な口調で静かに話す、黒い仮面。

「まずは、お二方の不安を解消いたしました。あなた方が現在いらつしやるこの場所は、とある海上の孤島……地下に建造された秘密の施設です」

島の名前は「フリー・アイランド」といい、男たちは、島を所有する組織の構成員らしい。

組織の名前は「ブラック・メーカー」だという。(ブラック・メーカー……知らない名ですわ)

諜報活動も務める久遠寺流の頭目、火憐でも知らない、謎の組織。

「あなた方を、あのくだらない格闘大会より招待

をして、現在どれほどの日数が過ぎたのか。更に現在が何月何日何曜日なのか、などは……残念ながらお答え申し上げる事ありません」

丁寧と言いながら、仮面から漏れる言葉には、優越感にも似た笑いも感じられる。

「ただし、現在の時刻は午前九時。本日は一日中ずっと、爽やかな晴天が続く様子でございます」

にこやかに告げる仮面の男に、霧華はイライラを隠さずハッキリ言う。

「天気のお知らせなんていらないうつ！ オジサンがあたしたちを解放してくれたら、好きなだけ見れるんだからっ！」

「まあ、そう焦らずとも……青い空は、後でたつぷりとお楽しみ頂きますので」

ククつと笑った男は、更に説明を続けた。  
「島の直径は、ほぼ五キロほど。島どころか周囲の海二十キロには、あなた方と我々、そして関係者以外の、誰もおりません」

（つまり、私たちは完全な監禁状態：組織は周囲の海も含めて所有している。という事……！）

身体が痺れる中でも、くノ一である火憐は意識しなくても、できるだけの情報を集める。

これは忍としての習慣だ。

焦燥を隠しながら、仮面の男を見据える二人。一方的に招致した格闘女性たちに向かって、黒の十一号が、ひときわ抑揚する声で告げた。

「さて、天才くノ一の久遠寺火憐様。百年に一人の超逸材と謳われる轟霧華様。本日お二人をご招待いたしましたのは、ぜひ我らのゲームにご参加をお願いしたいからです！」

まるでオペラ歌手のように、両腕を拡げて優雅にクルリと一回転した。

「……ゲーム……ですって？」  
「はい。そのゲームとは、『The Fox Hunt』！」

言い終えると同時に、スポットライトが火憐たちを照らす。どこからか、オーケストラの演奏までが盛大に響き渡り、無数の拍手が湧き起こる。

眩しい天井を見上げたら、大小無数のモニターが降りてきた。二人を遠巻きにするように下ろされたモニター群は、頭上三メートルほどの高さで停止。

「何なのさ……あつ！」

全てのモニターには、うつすらと顔の見えない人影が映されていた。

一人だつたり複数人だつたり。しかし僅かに見える服装から、みな裕福な男性や女性だと解る。

拍手の主は、モニターの人物たちだつた。暗くて顔は見えないものの、口元は楽しそうに微笑んでいる。

驚く二人に男は説明を続けた。

「ゲームのルールは簡単至極。これから二日間、七十二時間にわたつて、いわゆる鬼ごっこをして頂きます」

「鬼ごっこお？ いい年した大人のクセにっ！」

怒りの感情で、ちよつと笑つて告げる格闘少女。だけど火憐と同じく、こんな連中の言う鬼ごっこが普通でない事は、容易に想像できる。

「はい。仰る通り……フォックス・ハントは大人の鬼ごっこでございます。フォックスとは、すなわちお二方。そして鬼、つまりハンターとは……」

言葉を溜められると、不安で心臓がドキドキと高鳴つた。

二人の感情を読み取るように、数秒と焦らした黒の十一号が、大々的に明かす。

「麗しきお二方の肉体を狙う、レイパー。すなわち強姦魔の、しかも大集団でございます」

「なっ——っ!？」  
男の言葉に、耳を疑う。同時に、モニターの観客たちから再び、盛大な拍手が送られた。

仮面の男は、モニターに向かって頭を垂れて、感極まつている芝居を見せる。

「おおお……本日のお客様方も、極上のフォックスにご満足のご様子。わたくしもセッティングのしがいがあります。ゲームマスター冥利に尽きるというもの。クッククック……」

冷笑的な男の言葉に、二人の女の本能が、ゾッと怖けた。

現在の状況を、火憐は冷静に努めて整理する。

（……っ、つまり私たちはこの島で、卑劣な男たちから逃げ回るゲームをさせられる。という事……!）

新たに大きなモニターが降りてくると、上空から見たような島のシルエットが映し出される。

鬼ごっこをさせられる、バトルフィールドだ。円形に近い島の中央部分では、赤い光点が二つ点滅している。これは火憐と霧華だという。

「ゲーム開始と同時に、お二人には脱出口へと向かつて頂きます。ゴールである脱出口は、島の周囲を取り囲む高い壁に、六カ所ございます」

説明に従つて、島の海岸線を取り囲むように白い光のラインが走り、そして白線内に、六つの緑色の光点が出現。

白いラインが壁であり、緑の光が脱出口だ。

脱出口は、島を囲むサークルに対し、ほぼ均等に六カ所存在している。

スタート地点からゴールの壁までは、大体みな同じくらいの距離だ。

「勝利条件は、ただ一つ。七十二時間以内にこれら脱出口の一つに到着し、見事に脱出される事。のみでございます」

逃走の過程で出会つたハンターは、好きなだけ倒しても良いらしい。

「じゃあ逆に、脱出より先に全員やつつけちゃつてもいいって事でしょ。あたしと火憐さん相手に」

随分簡単な鬼ごっこじゃないっ！」

不埒なゲームに焦りながらも、霧華は余裕の笑みを忘れない。

「はい。お二人にとつては、実にイージーなゲームでございます。しかも、見事ゲームの勝者となられたあかつきには……日本円にして賞金十億が授与される次第でございます」

「じゅじゅつ、十億……っ!」

実家の経済状況を思い出したのだろう。驚きながらも、格闘少女の頬がパツと華やいだ。

「お二人が共に勝者となれば、賞金総額は二十億。更にハンターを一人撃退につき、百万の賞金が加算されます」

それら全てを格闘の技でノックアウトする事も許される。という事。しかし追いかけてくるハンターは、全部で二百四十人。

その人数に、火憐はゾツとする。

(……二百四十人……っ!)

対してコレまでの格闘人生で一切の負けを知らない霧華は「二人合せて賞金は二十二億四千万円」とか、震える指で計算していた。

続く男の言葉に、火憐も霧華も注目する。

「ただし、例えば全てのハンターを倒しても時間内の脱出がかなわなかった……などの場合、その時点で、フィールドに残されていたフォックスは敗者となります」

つまり、何人ハンターを倒しても七十二時間以内で脱出ができなければ敗者という事だ。

そして男は、更におぞましい事を告げてきた。

「敗者となられたフォックスのお身体、その他全ては……我ら組織の所有物、とさせて頂きます」

「……っ!」

「な、何言ってるのっ!」

強姦魔たちに女を追わせるゲームなんて、まるで

狂気とは思えない。万が一にも捕まってしまったら、きつと酷い陵辱に晒されてしまうだろう。

そのうえ、敗北したら一方的に組織の所有物にされてしまうという。

「……っ!」

(この男たちは何なの、正気なの……っ!)

考えただけで、ゾツとさせられた。

そんな二人をフツと笑い、仮面の男は、フォックスたちを焦燥させる言葉を続ける。

「二百四十人のハンターたちも……その辺にいるような、在り来りな輩ではございません」

彼らにも、壮絶なペナルティーがあるらしい。

「七十二時間以内にフォックスと接触できなかったハンター……その代償は、彼ら自身の命!」

「命……まさか……っ!」

一瞬、我が耳を疑った。

「キツネ狩りの役に立たない猟犬など、いったい何の役に立ちましょうか。それはそれは、必死になってエモノを追いかける事でしょう」

仮面の男は楽しそうに、オペラを歌うように、残酷な話を続けている。

「もとより彼らは、社会の底辺から更に転落してきた人生の敗北者。ここですら役に立たないのであれば、生きていたって、何の得にもなりません。ここで排除して差し上げる事が、まさに社会へのご奉仕というもの」

男の言葉に、色々と把握しきれないらしい年若い霧華は、唾然としている。

(……この男たちは……本気で……!)

火憐も驚愕する。

「それだけではございません。フォックスを捕らえ犯したハンターは、全ての社会的負債からの解放と同時に、陵辱一回につき百万円の賞金も用意されております」

つまり強姦魔たちは、火憐たちを捕らえられなければ死刑。

捕らえて強姦したら、全ての借金などの免除。更に一回の強姦中出しにつき、賞金百万円だという。

富豪たちが、面白げに拍手を送っていた。

あまりに異常な事態に、格闘少女は怒りを爆発させる。

「なっ——オジサンたち何言ってるのっ、頭がヘンなんじゃないのっ! 第一、ダメだったら死刑とか……っ! そんな事できるわけっ!」

反抗する霧華は、しかし言葉を失った。

モニターの人々の優雅な笑いと拍手に、常軌を逸した、言葉にならない実感を、得てしまったのだ。

そんな人々を、注意深く観察する火憐。

穏やかだけど冷徹さを隠さない雰囲気。それなりに上品な衣装。チラと見える装飾品。

更に、背後に僅かだけ見える、豪華な絵画や造りの立派な室内。

手にしているグラスも執事の注ぐワインも、どれも銘柄としては世界に指折りの逸品。

(顔は見えないけれど……かなりの富豪たち……)

それらによって、くノ一の乙女は僅かだけど、確信の持てる情報が得られた。

組織の名前はブラック・メーカーで、モニターの富豪たちを相手に、こんな狂ったゲームを開催して利益を得ているのだろう。

ハンターと呼ばれる人間たちは、社会的な敗者とおぼしき人々だから、組織の背後には巨大な金融企業も関わっていると考えられる。

(とはいえ、私たちも知らない組織……)

自慢ではないが、久遠寺流は諜報機関としては、世界でもトップスリーに入るほど優秀だ。

現代社会で、たとえ超大国がバックにいたとしても、その存在を完全に隠すなんて不可能。

（活動自体は異常でも、組織の規模そのものは、それほど大きくない……）

反面、現時点で解った事はそれだけでも言えた。

この島全体が組織の所有だったり、こんな広い地下空間を建造している事実から考えると、できたばかりの組織だとは考えられない。

しかし古くからの組織であれば、里の情報網に何かの形で引っかかっているはずだ。

（何にしても、まだ情報が少ないっ——）

そんな考察が、男たちの掌で唐突に遮断された。

「っ——っな、何ですのっ——」

屈強な黒服の男たちに左右から挟まれて、両腕を取られる。ガスによって全身に力の入らない火憐と霧華は、足が浮くほどの高さにまで持ち上げられた。二人の抵抗を全く無視して、黒仮面が富豪たちに何やら説明を始める。

「さて、これから皆様にはエモノであるフォックスの状態を確かめて頂きます。一切の不審もありませんよう、皆様の目の前でチェックを始めさせて頂きます」

恭しい礼が捧げられると、火憐たちに対する恥辱の身体検査が始められた。

大の字姿で拘束された二人のエモノに、アームで操られた数台の小型カメラが接近。

焦燥する美顔や極端なローアングルから接写されながら、男たちの手で装飾品を奪われ始めた。

「なっ、何するのさっ——」

霧華の格闘用グローブがスリッと脱がされ、火憐のブーツがアーマーごと脱衣させられる。

「ふ、服がっ——」

更に、くノ一衣装の帯が解かれ、ブレザーのオーバニーやリボンも、強制的に剥がされてしまう。

（このまま、裸にっ——）  
そんな焦燥に頬が上気し、セクシーに曇る美顔。

小型カメラが、まるで欲情する生物の如く、ズームアップでレンズを蠢かす。

汗浮かせる二人の顔は、富豪たちにだけでなく、目の前のモニターにも大写しにされていた。

「おっ、おやめなさいっ——」

忍衣装のボトムを奪われると、下着が露出。

くノ一の下着は、赤くて細い、小さなふんどし型の布だった。

細い紐が骨盤の上にムッチリと食い込み、指三本分ほどの幅しかない生地が、ヒップから恥丘までの柔肉を包んでいる。

後ろは紐Tで前はTフロントという、下着としても大胆な形だった。

ごく薄い生地だからか、処女の割れ目もクッキリと浮き立させている。

「これはこれは……ミス火憐は、積極的な女性ですね。クッククック」

「うう……！」

女性の下半身の、白い肌の大半を隠していない、大胆なふんどしショーツ。

珍しいのか、黒の十一号だけでなく、脱衣させる男たちもニヤニヤと舐め回して視姦してきた。

見知らぬ男たちにジロジロ見られると、いつも身に着けている正式な忍衣装なのに、恥ずかしさで全身が熱くなってゆく。

アーム操作のカメラが真下から接近してくると、大の字開脚のショーツヒップを股下で前後に往復されて、接写される。

仮面の男たちだけでなく、モニターの富豪たちからも、嘲笑に似た笑いが聞こえた。

男の掌が、更に上着へと伸びてくる。

「なっ——ああっ——」

帯を解かれた衣装と鎖帷子が奪われると、大きな乳房が、タップンと露出させられた。

九十六センチの双乳が、ライトに照らされて艶を見せる。羞恥に逸らされる美顔に比べても、タップンと大きな火憐の乳房。

柔らかく弾みを見せる柔脂肪は、重力に負けない若さで丸く形を保っている。

白い球体の先端では、小さくて桃色の媚突が、ツンと斜め前に突き出されていた。

「皆様ご覧下さい。天下のくノ一、火憐嬢のバストが、皆様だけに初披露されました」

紹介の言葉で、急速に視線が集まってくる。人々の目を意識してしようと、キュ……と硬化を見せる桃色の乳首。

周りの乳輪部分も微細な粒を浮かせて、望まぬ女体の高揚をアピールしてしまう。

富豪たちからは、見事な巨乳に感心する、上から目線の拍手が湧いた。

首を隠すマフラーまで奪われると、小顔から細い首、タップリの双乳と引き締まったウエストまでの扇情的なレディースラインが、露わにされる。

乳房を支えるには不安を覚えそうなほど細い背中や、引き締まったウエスト、柔らかく広がるヒップの曲線が、特に男たちの視線を集めてしまう。

「さて、いよいよ誰も見た事のない、火憐嬢の秘処中の秘処を、ご覧下さい」

そう告げられると同時に、ショーツの細紐が男の指で掴まれる。

「やっ——」

言葉になる前に、強い力でスリッと解かれてしまった。

「——めてえええっ——」

下半身の拘束感を失う、頼りなき。

女の無意識は、反射的に腰を引いていた。

赤い薄布が、フワリと足下に落とされる。

同時にこの瞬間、くノ一の乙女は一糸纏わぬ全裸



フン!!

人気連載第2回!  
美少女戦士へ  
妖魔の魔手が迫る!!

様になってます  
カッコイイですよ茜

ハッ!!

美少女魔法戦士  
**ピュアメイツ**  
PURE MATES

すけさぶろう  
助三郎

episode  
2

漫画  
COMIC

へへまあ小学校に  
上がる前から  
やってるからね

男子にだって  
負けないぜ

空は僕がずーっと  
守ってやるよ

じゃあ私は  
茜が困った時には  
絶対助けてあげます

どんな  
事でも



へへ僕が空に  
助けられる事なんか  
あるかな？

何言ってるんです

私の方が得意な事  
いくらでもありますよ

夢…ですか…

ふふ…  
なんて懐かしい…

忘れもしない  
小四の春…

新しいクラスに  
馴染めなかった私を  
毎日茜は励まして  
くれましたっけ…でも…

あああ  
あんな  
可愛い  
人  
が  
あ  
る  
の  
か



ヒヒ…  
一週間前まで  
処女だったとは  
思えない腰振りだな

最近の茜は  
何か変です…  
何かを隠している  
よっな…







私は早急に  
親友である空さんが  
二人きりで会って話し合うのが  
ベストだと思いますわ

でも見たでしょう？  
私も避けられています…

セッティングは  
私のほうで  
なんとかしますわ



空さんも  
ご存知だと  
思いますが  
私裏工作は  
得意ですので…



茜さんが  
行くように  
仕向けますわ



今日午後八時に  
中央公園時計前に  
行ってくださいまし

空ちゃーん!!

翠ちゃんから聞いたよ  
でも茜ちゃんと空ちゃんは  
今会っちゃだめだよ!!

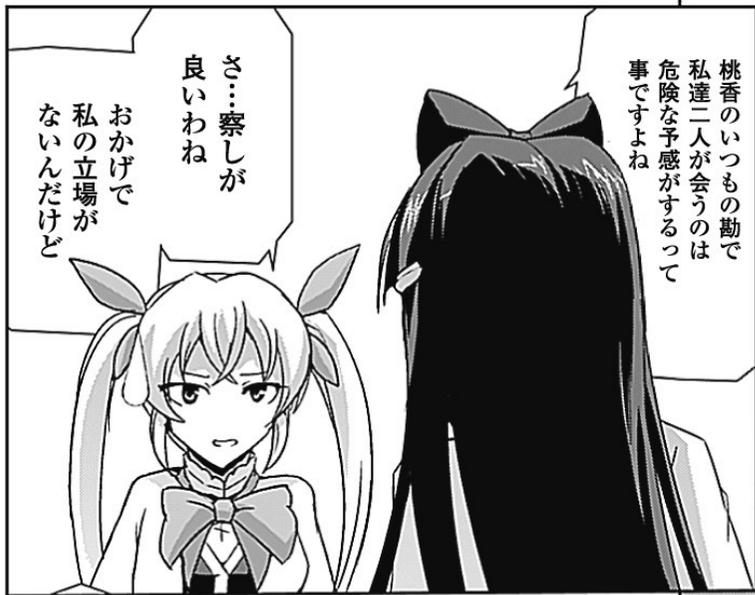
桃香ちゃんと  
説明しないと  
空も困惑してわ



桃香のいつもの勘で  
私達二人が会うのは  
危険な予感がするって  
事ですよ

さ…察しが  
良いわね

おかげで  
私の立場が  
ないんだけど



空ちゃんが凄  
危ない感じなの  
絶対止めた方が…

いいえそれでも  
私行きます

勘のいい桃香なら  
気付いている  
でしょうが

茜…明らかに  
何か苦しんでもいます



黙って見ている  
事はできません



ヒヒ：  
今日は指令を  
果たすまで  
イカせるなんて  
命令なんてな  
中出しは  
おあすけだ

し…指令…？

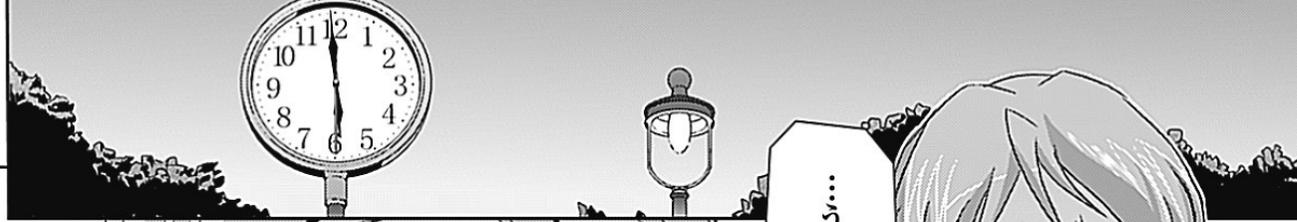
午後六時に  
中央公園 時計前に行き  
そこにいる女を  
『ラセント』で  
犯せとよ

…そんな事  
出来るわけ…!!

くくく…  
母親が人質なのに  
逆らえるのか？

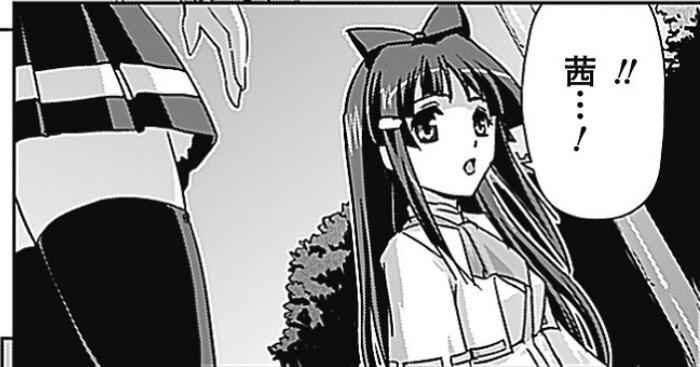
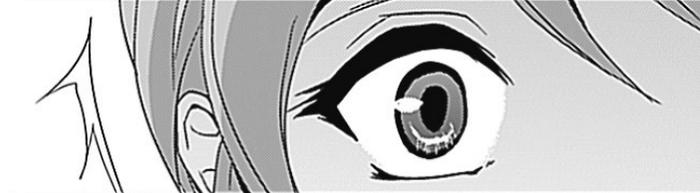
それに  
俺達の子 ボ無しで  
生きていけるのか？

自分の立場を  
たっぷり味わせて  
やるよ



……う……ん……

女の子を犯すなんて……  
でも……やらないと……



!!  
茜……!



なんでよりによって  
空がここに……!?  
でも……  
ママの為には  
たとえ空でも……



私貴女あなたに話が……

近づくな!  
空!!



僕は空や皆を裏切った!  
もうピユアメイッじゃない!!



今や  
バッド・フェアリーの手先…  
いや…奴隷だ

バッド・フェアリー様からの  
命令だ…

こいつで空を  
犯す…!!

しかし買たと  
しても…!!

貴女を止めます  
茜!!

絶対  
負けられない!!

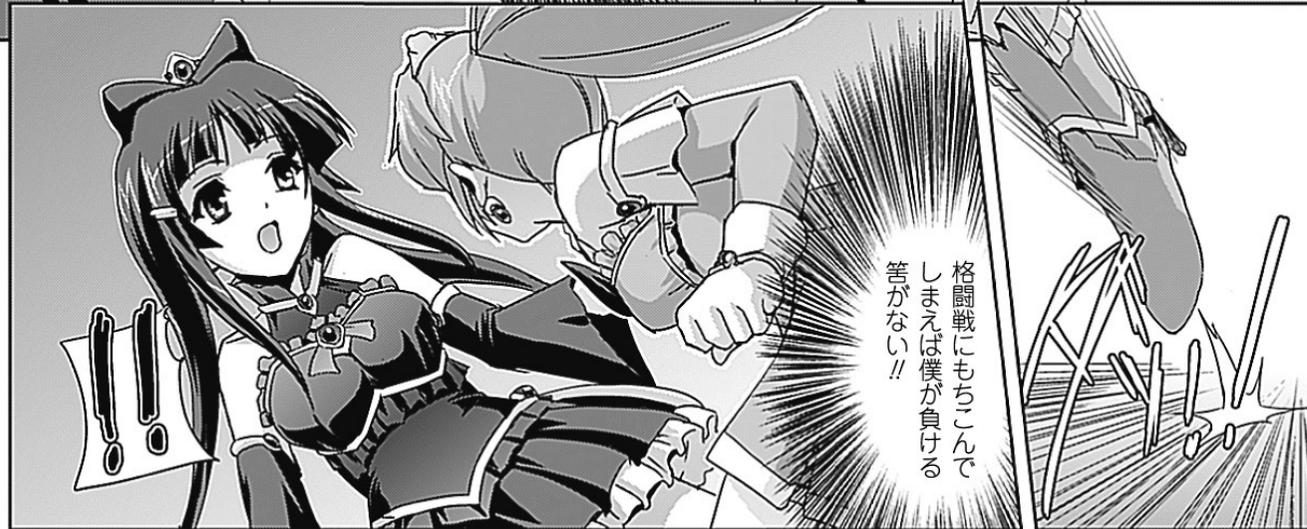
あ…茜…  
何て事…!!

どうやっての？  
まさか私が…  
来させられたのは…震!



空が  
持っているのは  
弓の弦…!?

何か狙いが…?  
…いや…!!



格闘戦にもちこんで  
しまえば僕が負ける  
筈がない!!



空は  
僕がすつと…

守って  
あげるから



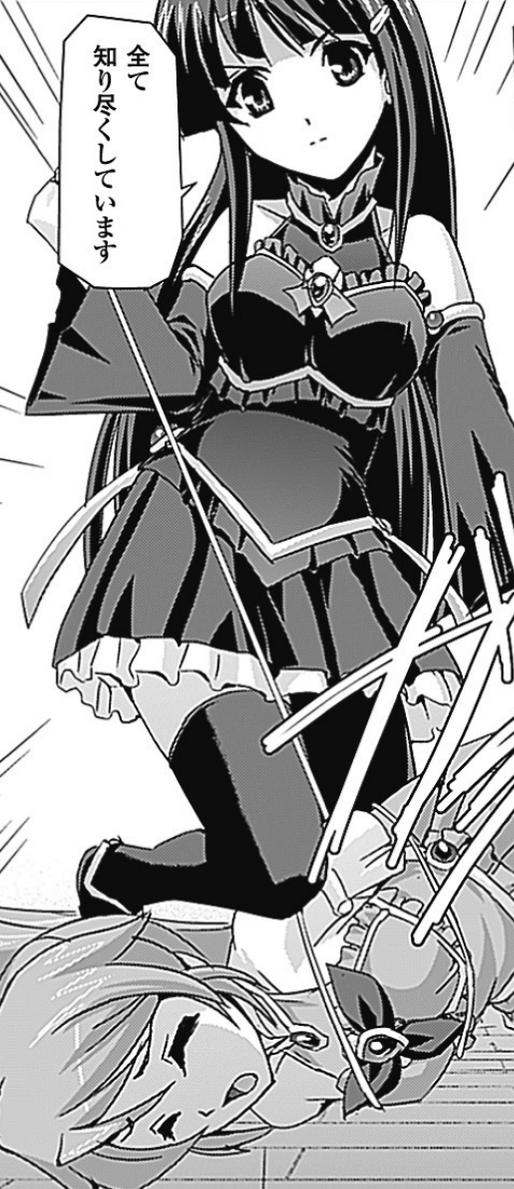
ミラーージュ・パンチ  
**百烈拳!!**



茜…私は  
ずっと貴女を  
見てきたのですよ



スピード負け…!?  
いや完全に  
動きを読まれた!!



全て  
知り尽くしています



そして弱点…



茜の攻撃の  
スピード・タイミング…

茜憶えていますか  
小学生のときの約束

憶えているよ…  
僕はずっと空を  
守ってやる…って…

約束破った僕に  
罰が当たったのかな

いいえ茜は  
ずっと私を守って  
くれました

だから今度は  
私が約束を果たす時…

私が茜を  
助けてあげます

な…空…!!

茜の顔を見れば  
わかります自分の事  
以外で苦しんでますね





ククク：  
麗しの友情って奴か？

負けて犯されると  
親友が悪者にな  
っちゃうから  
必死こいて  
勝ったって  
ワケかい？





さあ何の事かな？

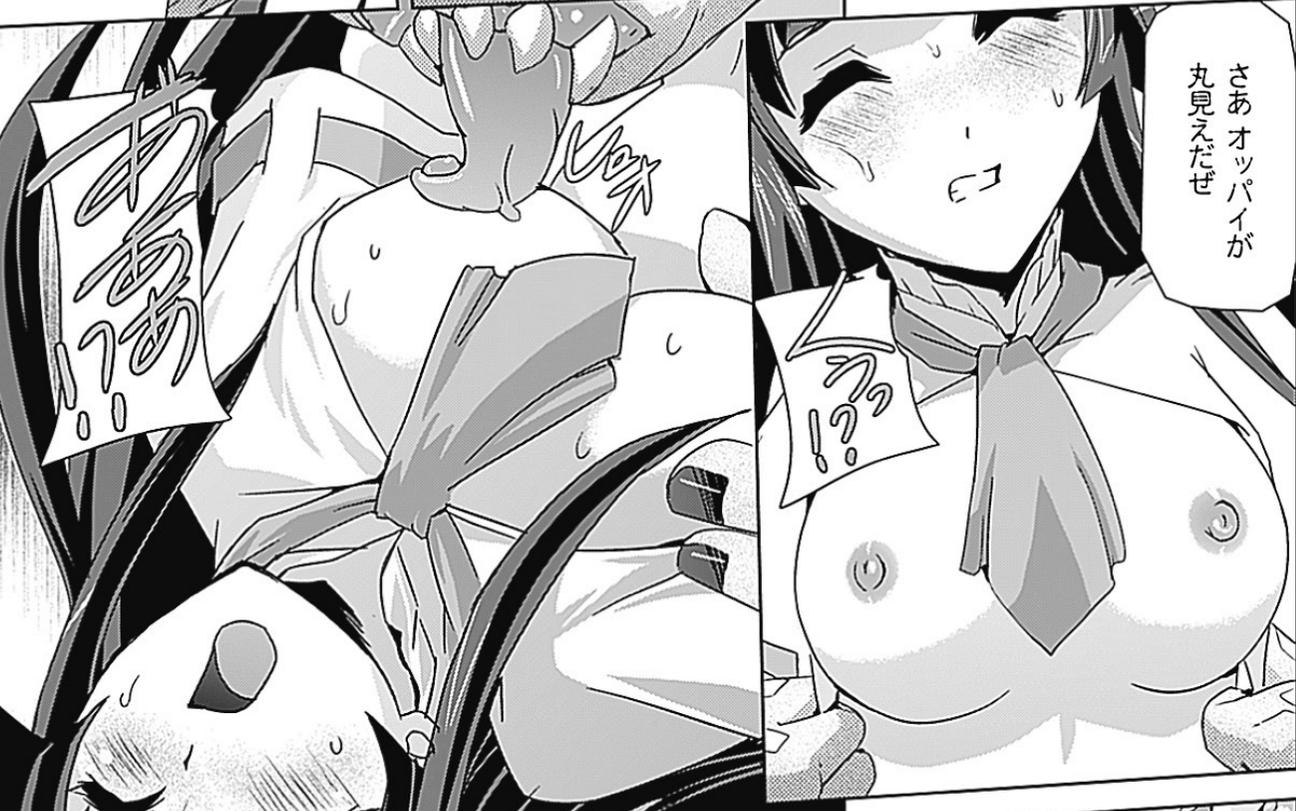
そ空!!

やはり見張りが  
いましたか

翠もいるのですか!?

どうせお前は直ぐに  
チンポの事以外はどうでも  
よくなるさ

お前は俺が  
相手をしてやるよ



さあオッパイが  
丸見えだぜ

あ???

あ???



あ???

もののけいんようたん  
**もののけ妖譚** 外伝  
～俺と発作と妖しい彼女たち～

もののけ娘たちとの独占Hを  
オリジナルストーリーでお届け!

トリプルエックス  
原作 ORIGINAL **XXX**  
いしばよしかず  
小説 NOVEL **斐芝嘉和**  
挿絵 ILLUSTRATION **アライノブ**

——逢魔ヶ刻。

「く……うっつ!?!」

珍しく机に向かつて真面目に宿題に取りかかろうとしていた俺は、突如膨れ上がった凄絶な飢餓感に身体を折り曲げ、椅子から転げ落ちた。

発作だ。

勉強するのが嫌で嫌で、教科書を開くと息が詰まり目が回り——などということではなくて、もつと深刻な、下手をしたら他人に大きな迷惑をかけてしまうかもしれない、切実な問題。

数百年前の御先祖様が懐妊中に百鬼夜行に行き逢ったため、俺の血族は複数の妖怪の力を秘めるようになった。ただ、いままではだれもその力に覚醒したことがなく、だからずつと普通の人間として過ごしてきた。

それが——。

「ぐ、うう……」

なんの因果か、俺の代になって初めて覚醒し始めたのだ。身体は普通の人間のままで、妖怪の力なんて文字通り身に余るわけ——。

新たな力が目覚めかけたとき、俺は強烈な飢餓感に襲われる。

それが今日は、一段と強い。

意識が遠退きそうなくらい凄絶な、狂おしいまでの餓え。

「こ、これは、まずい……」

焦った俺はポケットから鍵を引っ張り出し、なにもない宙空に差しした。

——カチリ。

錠の開く音がした途端、幻の扉が出

現するので、体当たりするように押し開けて奥の部屋に転がり込む。

清潔な布団が敷かれたベッドが一脚、それ以外はなにも見当たらない、殺風景な部屋だ。しかし壁紙の具合か照明の具合かまったく寒々しくないし、むしろ落ち着いた雰囲気満ちている。

通称、エッチ部屋。

俺を苛むこの飢餓感、俺の中で目覚めつつある妖怪の能力が大量の精気を欲しているため——それを補充するためにエッチするのが一番ということ、数千年を超える古妖狐が用意してくれた部屋だ。

強力な結界によって外界から完全に隔離され、音も絶対に漏れない。入るためには「鍵」が必要で、それを使えばいつでもどこでも「扉」が現れ、すぐに入れるという——。

隔離を第一に考えて設計されていることから分かるように、発作を起こしたいま、俺は非常に危険な存在だ。性欲と食欲が混じり合い、区別がつかなくて、傍にいる女性を喰ってしまうかもしれない。

だから、このエッチ部屋には俺より強力な女性しか招けない。でもって俺は、純粋な人間ながら複数の妖怪の能力を併せ持っているから、自慢じゃないが並の妖怪よりも遥かに強い。

そんな俺より強い女性といったら、かなり限られてしまうわけ——。

「も、もろ姉……ごめんっ! すぐに来てくれッ!」

通信機のようにも使える「鍵」に向かって念じると、

「大丈夫、喚くんッ!?!」

待つこともなく扉が開き、白い制服の胸元がとて大きく膨らんだ、おつとりとした顔立ちの美少女が息せき切つて飛び込んできた。

古海里諸巴——親のいない俺を弟のように可愛がってくれている、近所のお姉さん。学年としては同じだが、俺は昔から姉として慕っているし、だからいまでも「もろ姉」と呼んで、いろいろお世話になっている。

「うわ、すごい汗……熱が出てるわ、すぐに冷やさなくっちゃ!」  
 駆け寄ってきたもろ姉が俺の額に手を当て、アタフタと左右を見回す。

(ああ……気持ちイイ……)  
 額に感じる、柔らかくひんやりとした美少女の掌が、発作の苦しみをほんの少しだけ和らげてくれた——が。

「うおっ!?! な……なにするんだ、もろ姉……ッ!?!」  
 「ジッとして! すぐに楽にしてあげるから!」

真剣な表情のもろ姉に、ヒョイツとお姫様抱っこされてしまう俺。  
 たわわな巨乳が目を惹く、物静かで大人しそうなもろ姉だが、その正体は妖怪ですら畏れ敬う龍人だ。しかもいまは角を生やし、尻尾も伸ばしているから、妖力全開状態。

「氷嚢を取りに戻る時間が惜しいから……えいッ!」

——ぼふん。

ベッドの上に投げ落とされ、俺はイヤな予感を覚えた。

基本的には真面目で優しく大人しいもろ姉は、同時にかなりの天然ボケでもあるのだ。思わぬときに思わぬことを思いつ切りしてかして、周囲を困惑させる傾向がある。

いまも——。

「ま、待つてもろ姉……うわっ!?!」

仰向けに寝転がった俺の胸に、白いミニスカートを開かせた桃の実のような美尻がズシッと乗った。

「見ちゃダメ、絶対よ?」

「い……いや、そんなこと言われても、この体勢では……わわっ!?!」

ドギマギしている俺の顔に、シュルンと巻きつく冷たい物体。

ひんやりとして滑らかな、意外に柔らかくてとても長いこれは——もろ姉の尻尾だ。細かな鱗に覆われた龍人の尾を俺の頭に巻きつけて、熱を冷ますつもりなのだ。

「く、うう……熱い……これ、風邪なんかじゃないわ。なにかもつと大変な命にかかわる病気かもしれない!」  
 「いやあの、たぶんだけど、ち、違うんじゃないかな……?」

おつとりとした巨乳美少女が、後向きに俺の胸を跨ぎ、尻尾を俺の頭に巻きつけているわけ——。

俺の鼻先には当然、むつちりとした美尻がある。長い尻尾に目隠しされているから見ることは出来ないけれど、

跨がられる寸前、ミニスカートの下がパッチリ見えてしまったわけで——秘処を守る桃色のショーツの、ふんわり柔らかく盛り上がった様子だけでなく、細かな布目や細い縁取りの緻密なステッチまでが、脇の裏にくつきり鮮やかに焼きついている。

肌の色が透けそうなくらい薄く伸びた柔布の、優美で絶妙な淡い曲線——ふわりと盛り上がった丸みの間にうっすら見えた細い筋——。

妖怪絡みの発作が起きるとはいえ、俺の身体そのものは健康体だ。だから、もろ姉が穿いている下着を思うだけでも胸が高鳴り、その奥に隠れた秘処を想像すれば股間が熱く燃え上がる。

「く、う……ううっ！」

息が上擦り乱れば、閉じられない鼻腔に微かに甘酸っぱい牝香が流れ込んできて、ますます顔が熱くなる。

だからこれは、病気などではない。むしろ実に健康的な、若い牡なら当然の、やむにやまれぬ生理的反応。

——どくんっ！

（あ……ま、まざいっ！）

天然ボケ美少女の突飛な行動に驚かされ、しばらく忘れていた衝動が、急激に膨れ上がった。

犯したい、喰らいたい、骨の髄までしゃぶり尽くしたい——獣欲と呼ぶに相応しい欲望が、俺の理性を侵蝕していく。このままでは我を忘れ、大切なもろ姉を傷つけてしまう——と。

「ああ……いい匂い……」

もろ姉とは別の声が聞こえたと思っただ次の瞬間、脚の間にだれかが這い込んできて——。

「え？ あ……ふヒえっ!？」

俺のベルトが弛められ、猛る淫棒が冷たい手に握られて、容赦なく引つ張り出された。

この強引さは、もろ姉ではない——というか、淫棒にいやらしく絡みついてくる細指やしっとり吸いつく柔らからかな掌の感触は——。

「め、メフィツ!？」

「はあい、メフィでえすッ!」

シリアスに傾きかけていた雰囲気完膚無きまでに粉碎する、のんびり間延びした返事は、間違いなくメフィ。

だとすれば、次は必ず——。

「待て、待って待って……」

——ぬちゃっ!

焦って制止するも間に合わず、怒張した亀頭が熱くヌルヌルとした柔らかかな粘膜にすっぽり包み込まれた。

おちんちん大好きな美少女悪魔・メフィの口に、いつものようにアモツと啜え込まれてしまったのだ。

「ふはっ!?! く……うううっ!」

「ンも、んちゅ、んちゅ……ふはあ。

「んも、んちゅ、んちゅ……ふはあ。喉さんのお■ん■ん、相変わらず美味しいですう!」

「な、なんでメフィが……お、俺、もろ姉しか呼んでない、のに……ふは、あ……ああああ……」

俺の疑問を無視し——れちよん、れちよん、れちよんっ!

淫茎に垂れる己の唾液を舐め取るように、生温かくプリプリとした舌が勃起男根の裏筋を舐め上げ始めた。

熱烈で巧みな、遠慮など欠片も感じられない大胆な口唇奉仕。

「いいな、いいなあ……メッフィー、美味しい?」

俺の胸を跨いだもろ姉がむつちりとした尻尻をモゾモゾと揺らし、あからさまに羨ましがらる。

頭に捻れた角、背に鉤爪つきの羽、尻からは鎌型の先端を持つ尾を生やしたメフィは、見た目通りの悪魔ツ娘だ。

淫魔の血も引いているそうで、俺の精液が大好物らしく、油断していると教室でもむしゃぶりついてくる。

そんなメフィのフェラだから——どうしようもなく気持ちいい。

広げた舌で根元から筒先まで何度も何度も舐め上げたり、尖らせた舌先で裏筋を集中的にチロチロしたり——クツキリと張り出したエラの縁に唇の端を掠めたり、舌の縁を使ってカリ首を切るようにしごいたり——。

「やう、あ……ま、待って、ダメ……め、メフィツ!」

「え……だ、ダメですか? 気持ちよくないですか?」

「いや、気持ちいいよ、気持ちいいけど……イイから、こそ……やめてくれよおっつ!」

ふたりつきりだったらもろん、こんなお願いはしない。淫魔化しているときのグラマーな悪魔ツ娘は肉の悦び

にとでも素直だから、俺もまったく遠慮なく、思う存分エッチする。

だがいまは——。

「も、もろ姉が見てるだろッ! や、やめ……ダメ、舐めないで……ふあ、あッ!?! く、う、ううう……ッ!」

姉として慕っている大切な人の目の前で、別の女の口にエッチなことをされている。しかもそのうえ、声が裏返るほど感じまくっている。

本能的に恥ずかしいし、なんとなく申し訳ないし、だれでもいいのかと軽蔑されそうな気がして怖い。

だから、投げ出した手足をバタバタさせ、快感に裏返った情けない声で、俺はやめてやめてと哀願する。

なのに——。

「気にしないで、啜くん。私がヘルプを頼んだの!」

「え? な、なに言ってるの、もろ姉……ヘルプって……え? え?」

「なんじゃ、気づいておらぬのか?」

「もろもろのオマケは単なるオマケではなく、間抜けでもあったんだな!」

「え? ええっ!?! め、鳴瓜さん……さ、さちもいるのかっ!?!」

「いるぞー!」

場違いに明るい声が聞こえ、右手がムギュッと握られた。

「い、痛イッ! やめろ、放せ……ほ骨が……く、うううっ!」

「大袈裟な奴だな、さちはか弱い人間だぞ? 痛いわけないだろう!」

力を弛めてくれたのは、同級生の蟋蟀塚さち。本人は自覚していないが鬼の生霊というややこしい奴で、ポニーテールがよく似合う快活な美少女だ。もろ姉やメフィと同じく、俺の暴走を喰い止めるためこの部屋でエッチなことにつき合ってくれる、強力な妖怪のひとりでもある。

でもって——。

「ふむ、確かに気配がおかしい。普段と違うことが起きておるようじゃ」

俺とさちのやりとりなど無視して偉そうに喋っているもうひとり、闇入者は、長く艶やかな銀髪が美しい小柄童顔つるべた美少女・弓月鳴瓜さん。

同級生なのにさん付けで呼ぶのは、齢千年を超える妖狐だからで——妖力も知識もハンパなく、もろ姉と同じくらい世話になっている。

俺たちが通う弓月学園の創立者でもあり、学長でもあり、なのになぜか生徒でもあり——と勝手放題している点は困りものだが、俺の暴走を喰い止めるためにこの部屋を用意してくれたのは鳴瓜さんだ。俺にとっては大恩人で、どれほど感謝してもしきれない。

「だがしかし、それとこれとは話が別だろう。いくら恩人でも、他人のエッチを覗く権利はないはずだ。」

「メフィもさちも鳴瓜さんも、出ていってくださいますよおっ！俺が呼んだのは、もろ姉だけなんですから！」

龍人の冷たくて気持ち悪い尻尾に目隠しされたまま、勃起ペニスをメフィ

にアモアモしやぶられながら、俺は情けない声を上げた。

エッチなことは大好きだが、見られるのはやはり恥ずかしい。

「そうはいかぬ。非常事態じゃ」

俺の気持ちなどまるで無視して、鳴瓜さんの偉そうな言葉が続く。目隠しされたままだから実際の姿は見えないが——偉そうに腕組みをしたチンチクリンの美少女が、狐耳をピコピコさせながら意地悪く微笑んでいる姿が、胸の裏にありありと浮かぶ。

「いま、ヌシは熱を出しておるのじゃろう？ そのうえ、妖怪の力を用いておらぬ……」

「あ……そ、そうですね」

言われて初めて気がついた。確かに俺は、発作を起こしたのに妖怪の力を用いていない。

発作は新たな力が目覚める予兆として起きることが多いし、目覚めた力の使い道は考えるまでもなく自然と分かっている。そのままエッチなことに使っていったら、確かにこれは変だ。

「ならば間違いない。ヌシはいま、化け損ないかけておるのじゃ」

「ば、化け損ない……?」

聞き慣れぬ言葉を鵜返しに繰り返すと、俺の左肩に小さな手がソツと置かれた。錯覚かもしれないけれど——本気で心配されているような気がして、急に怖くなる。

「お、俺……いま、すごく危険な状態

なんですか?」

「うむ、危険といえは危険じゃな」

「そ……そんなあつ!?」

「まあ聞け。ただの人間に過ぎないヌシは、いままで眠っておった妖怪の力が目覚めるたび精気に対する強烈な餓えが生じるわけじゃが——同時に複数の妖力が目覚めようとするとき、それらが互いに邪魔をし合つてうまくいぬ場合がある」

「そ、それで……?」

「その場合、目覚め損なつた妖力の代わり大きな虚が生じ、さまざまな力が吸い込まれてしまうのじゃ」

「なるほど、だから妖怪の力が使えないんですね……あ痛ッ!?!」

簡単に納得しすぎたのか、俺の額が小さな手にベシッと打たれた。もろ姉の冷たい尻尾に目隠しされたままだから、完全な不意打ちだ。

「さまざまな力と申したのであろう?」

虚は妖力だけでなく、生命力も吸い込むのじゃ。熱が出ておるのは、身体が弱っている証——

「ええつと……え? ええつ?! お、俺、死んじゃうんですかッ!?!」

「安心せい、死なせはせん!」

力強い断言だが、イヤな予感が余計に膨らむのはなぜだろう?

「要はその虚を、ヌシの命以外で埋め合わせればよいだけの話」

「ええつと……それって、いつもと同じなのでは?」

発作を起こした俺の狂暴な飢餓感、

もろ姉たちとのエッチによつて妖氣を得ることで癒やされる。とすれば——なんだかんだ言う割に、いつもと同じことをすればよいだけじゃないか。

「やることは同じでも、必要な妖氣の量は桁違いじゃ。命を吸い込むほどの虚となれば妖怪一体分であるわけがないからの。十か二十か、あるいはそれ以上——」

「……私たちの妖力でも、ひとりでは賄いきれないってことですか?」

もろ姉の言葉に答え、

「うむ。ふたりでも危ない。最低でも三人、余裕をみて四人」

鳴瓜さんの重々しい返事。

愛らしい見た目に反してその正体は海千山千の妖狐だから、なにか裏があるような気もするが——妖怪に関しての知識で鳴瓜さんに勝る者はいない。信じて任せる以外、手はないだろう。

「分かりました、ほかに方法がないなら、四人一緒でいいです……」

渋々俺が承諾すると、

「ではまず、わしからじゃな!」

それまでの深刻そうな気配を一転かなぐり捨てて、鳴瓜さんがはしゃいだ声を上げた。

「エッ?! そ、そんな……きゃっ?!」

なにをどうやつたのか、俺の胸に乗っていたもろ姉が放り投げられ、顔に巻きついていった尻尾も外れる。見た目は小柄童顔の小さな小さな女の子の姿、素の力なら龍人であるもろ姉に敵うはずもないのだが——伊達に千年も生き

「トリプルとらぶるプリンセス」「暴れん坊メイドは甘えん坊」「うらはらツインズ」「仙獄学園姫姫ノブナガッ! 1~3」「アリシア 淫獄の姫騎士」「学園戦姫 巴 淫辱の下廻上」「魔戦姫 紗夜 淫辱の闘妻」「新・呪い屋 零 1~3」

好評発売中!

83

著者近刊

83

83

83

83

83

ていないということか。

「め、めーかさん、狡いッ！ 私が最初に駆けつけたのにい！」

「落ち着け、諸巴。こやつ虚がどれほどの規模か分からぬいま、ヌシらのような未熟者を危険な目に遭わせるわけにはいかぬ。これは年長者としての義務じゃ。べ、別に、こやつを独り占めする気などないからな、勘違いするでないぞ！」

——余計な一言を口にしたせいで、もろ姉やメフイやさちから白い目で見られる鳴瓜さん。

部屋に立ち籠める剣呑な気配に気づいているのかいないのか、

「うむ。これはわしに課せられた義務じゃ。こうするよりほかにないのじゃ。仕方ない、仕方ない……」

チンチクリンの美少女は小声でしつこく咬きながらいそいそと制服を脱ぎ、白く滑らかな肌を顕した。

桃色の乳首が可憐に色づくベタンコな胸、ほとんど括れていないウエスト、ブリッと小さく丸い尻——何度見ても背徳感に襲われる、あまりにもあどけない——体型。

（初めのころはすぐにパニクって、見た目以上に可愛かったのになあ……）

重ねた年月の為せる業か、それとも妖狐の性分なのか、最近の鳴瓜さんは己の欲望に正直すぎるほど正直だ。いつもはどこか冷ややかな瞳を、淫らな期待に爛々と輝かせ、■気な類に蕩ける笑みを早くも浮かべ——四本のふさ

ふさ尻尾をバタバタ振りつつ、ベッドに飛び乗ってくる。細い背をくねらせ、小さな尻を俺に向けて、欠片も羞じらずに四つん這いになる。

「ほれ、早くせい！」

——風情もなにも、あつたものではない。普段なら思わず苦笑してしまう場面だが——ドクンッ！

「く、うう……ッ!?」

三度目の発作が起き、周囲の音が遠退いて、視界が暗く揺らいだ。

下腹部が熱い。  
ペニスが滾る。

（ああ……め、鳴瓜さん……）  
なんて小さく、なんて細く、なんて瑞々しい少女だろう。

扇のように広がった四本のふさふさ尻尾も美しいし、小振りな美尻の真ん中にキユッと窄まった紅い菊蕾も、瑞々しい太股の付け根にわずかに顔を覗かせた■気なオ■ンコも——実に美味しそうだ。

（……お、犯したい、貫きたい、可愛い悲鳴を心行くまで堪能したい……）  
狂暴な衝動に急かされるまま、俺は鳴瓜さんの華奢な腰に手を伸ばした。

抑えつけてもいけないが、押し流されてもいけない——何度も念を押され、た心構えを忘れたわけでは無いが、

「う……ぐうう、うぐぐ……ッ！」  
膨れ上がる獣欲があまりにも激しく、コントロール出来ない。

「す、済みません、鳴瓜さん……俺、俺……くう、おお……おおっ！」

猛々しく吼え、目の前にある小さな尻を乱暴に引き寄せる俺。

「くっ!? こ、これ……早くしろとは言つたが……うっ!? あっ!?」

慌ててもがきかけた美少女を、逃すまいとしてさらに強く掴む。ヒクつく穴に亀頭を押し当て、力任せに——。

グリッ！ グリッ！

「うあっ!? ば、バカ者、そこは違う、ちが、ちが……あッ!? くあ、あ……あぎい——ッ!!」

尻穴を貫かれた鳴瓜さんが、俺の胸の下で反り返り、ビクビク震えながら掠れた悲鳴を上げた。

（ダメだ、いけない——!）

頭の隅では思うのに、小さな小さな美少女の狭くてきつい尻穴は、あまりにも気持ちよすぎた。

熱くキツくヌルヌルとした直腸粘膜が怒張ペニスに密着し、いやらしく絡みついてくる。排泄反射を起こしているのかヒクヒク蠢き、ときおり波打ち——まるでしゃぶられながら揉まれていような、不思議な感触。

「ふあっ!? あぐ……くうう……」

「ご、ごめんさい、でもあと少し、あと少しで……」

震え呻く小柄な鳴瓜さんに覆い被さり、温かくて柔らかなふさふさ尻尾に顔を打たれながら、グイッグイッと腰を振って滾る淫棒を根元までねじ込んでしまう俺。

「く……ふうう……」  
一息吐いたところで衝動がやや治ま

り、さらに動きたがっている腰を俺は懸命に止めた。挿入ただけでこんなに痛がっているのだから、本能に命じられるまま突き続けられたら壊れてしまうかもしれない。

「く、ひ……ううう……ふ、深い……わしの奥に、奥深くに……か、硬い肉棒が、こ、こんなにも、深くう……」

苦しげに呻く銀髪美少女の顔を、心配そうなる姉と頬を赤らめたメフイが左右から覗き込み、

「だ、大丈夫ですか、めーかさん？」

「初めてのときはビクビクするし、ズキズキするし、変な感じだし……どうしていいのかわからなくて、困ってますよね」

口々に言った。

ふたりともグラマードから、つるべたな鳴瓜さんと並ぶとどうしてもお姉さんのように見えてしまう。

「深呼吸してください、鳴瓜先生。意識してお尻の穴を弛めるのです。そうしていればそのうちに、だんだん気持ちよくなつてきますよ」

「そ、そんな……の、嘘、じゃ……うう、くぐ……ううう……」

「嘘じゃありません。私の実体験です。いまではもう、お尻のほうが気持ちよいくらいなんですから——」

「……えっ!?」

無邪気な悪魔ッ娘の大胆な告白に、もろ姉たちが声を合わせて驚いた。俺の胸の下でビクビク震えていた鳴瓜さんまで、尻穴の激痛を忘れたように涙



に濡れた瞳を真ん丸に開き、天然ボケの悪魔ツ娘をまじまじと凝視する。

「め、メフィ……おぬしまさか、いつもこんなことを……？」

「え？ いやあの、さすがにいつもってことはないですが……あれ？」

こういう反応をまったく予期していなかったのか、いまさらながらにポツと頬を赤らめ羽を窄ませ、豊満な乳房を重々しく弾ませながらアタフタし始める悪魔ツ娘。

「も、もしかして、お尻の穴でしてるの、私だけでですか……？」

「さちもされたぞ！ イヤだというのに、無理矢理されたぞ！ あれは、すごく痛かった……！」

「わ、私も……でも、いま思い返すと、痛いだけじゃなかったかも……！」

あからさまに顔を歪めるさちと、頬を赤らめモジモジし始めるもろ姉。

俺はと言えば、秘密のはずの性交を勝手に思いつ切り暴露され、恥ずかしいやら情けないやら申し訳ないやらで半ばパニック状態に。

「ご、ごめん、さち……もろ姉も、ごめんさい。でもあのときは俺、どうしても、可愛いお尻の穴に挿入れてみたくて……あうっ!!」

最後の呻き声は、顎をガツンとやられたから。

俺の下で弱々しく震えていたはずの鳴瓜さんが、いきなり背を反らせ、後頭部をぶつけてきたのだ。

「ほ、ほかの者にはしておいて……わ

しにだけ、コレをしておらなかつたのかッ!! なぜじゃっ!!」

「な、なぜって……だつてほら、鳴瓜さんは身体が小さいから……いまだつて、すごく痛いでしょ？ 無理はさせられませんかよ」

「む……無理ではないッ！ わしは平気じゃー！」

「え？ でもさつき、あんなに痛がつていたじゃないですか」

「平気じゃッ！ これくらい、全然、まつたく……うっ!! く、うう……！」

シーツを掻きまじった鳴瓜さんがわずかに腰をくねらせたため、俺の淫棒が繊細な排泄器官を深々と抉った。再びの激痛に細い肩が強張り、薄い背が震え——四本の尻尾が力なく揺れ、銀髪から突き出た狐耳がヘニヤッと伏せられてしまう。

「ほら、痛いでしょう？ 無理矢理ねじ込んでしまつてごめんさい。でも、おかげで衝動は少し治まりました。いますぐ抜きますから、ジツとしていてくださいね」

「よ、よい……抜くな……！」

「え？ でも……！」

「よいから、抜くなッ！ せ、せつかくの機会じゃ、わしにもみなと同じことをせいでっ!!」

自分だけ仲間外れにされていたとでも思つたのか、鳴瓜さんが細い手足をバタバタさせながらワガママを言った。四本の白い尻尾も暴れまくり、俺の胸や顔をファサファサと掃く。

「我慢しないほうがいいですよ、いまだつてもう、かなり……あ痛ッ!!」

「勝手にねじ込んでおいて、四の五の言うな！ お前は鳴瓜のお願いを聞かずに挿入したんだから、今度はちゃんとお願いを聞いてやれ！」

我がことのように眉を怒らせたさちが、拳を振り回しながら俺を睨みつけてきた。理屈としては間違っていないような気もするが、しかし——。

鳴瓜さんは意地になつているだけだ。本当は痛くて痛くて耐えられないはずだから抜くのが正解だろう。

俺がそう言うのと、

「ダメよ！」

「ダメです」

「ダメだ！」

三者三様異口同音、即座に否定された。あまりの剣幕に身を引くと、

「覗くんは普段から、めーかさんにお世話になりっぱなしでしょう？ ご恩返しするチャンスじゃない」

「私たちが協力して、痛いのはなんとかします。だから、鳴瓜先生の願いに応えてあげてください」

「さちも協力するぞ！」

両目を妖しく光らせた三人の美少女たちが、可愛い小鼻を膨らませながら迫ってくる。

ただでなく——身体が火照っているのか、だからともなくネクタイを解き、制服を脱ぎ始めた。

「あわ、わわ、わわ……！」

予期せぬ展開に戸惑つて、言葉を失

う俺。そうこうしているうちに三人が三人とも下着まで脱ぎ捨て、瑞々しい柔肌を惜しげもなく晒した。

ゆさゆさ揺れるもろ姉の乳房、たつぶんたつぶん弾むメフィの巨乳、ブルンブルンと小気味良く躍るさちの美乳——に、見惚れている場合ではない。

(ま、ま……！)

発作を起こした俺が欠乏した精気を補うためにエッチしたくなるように、強い妖怪である彼女たちも、俺の妖気が強くなると発情してしまふのだ。

その証拠に、発作が起きるようになって以降、もろ姉はしきりと俺に身体を擦り寄せてくる。寝ている俺に覆い被さり、キスしまくつたりもする。淫魔の血を引くメフィはもつと激しく、少しでも隙を見せたら人目も憚らずに股間に顔を埋めてくる始末。

だから——。

「う、わあ……もろ姉やメフィだけでなく、さちまで目の色が変わっちゃつてるよお……！」

こうなるともう、止められない。いずれも類い稀な美少女ながら、その正体は強力な妖怪だし——妖力を外に向けてられない俺は、しがたい人間に過ぎないのだから。

いまの三人を俺が止めようとするのは、最高速で突っ込んでくるトラックに素手で立ち向かうようなもの。いや、三人まとめてだからトラックというより、列車か。

なんにしろ、こうなつた三人を止め

情け無用の最強番長が



どうよ  
思い知ったか

ヒュウッ  
さすがスよ



ハッ  
気合いが  
足らんのお



ててめえら  
三年に逆らって  
どうなるか…



ハハッ  
鬼塚おにづかくん  
にかなうわけ  
ねーだろ

ざまあみろ  
バーカ!

喧嘩すんなら  
もっと気張らん  
かい!



ケツ  
雑魚が  
今日は  
終わりだ  
片しとけ

おおつか  
れっした!!



すすつ  
スンマセン

俺様を  
差し置いて  
何威張って  
んだ? あ?





気絶させて  
拉致って  
くるんだよ

そんな物  
使うんすか!?

犯罪じゃ...

まずは  
コイツで

バーカ  
フクロにする  
時点で犯罪  
だつつの

それも  
そつスね



くつそお...  
鬼塚の野郎!

けどアイツ  
強えからなあ

一度シメて  
やろうぜ

人数集めりゃ  
ヨユーだろ



ボコる  
だけじゃ気が  
すまねーな

入院半年  
コース?

二度とデカイ  
ツラできなく  
してやろうぜ



おーお前ら  
ワルタクミか

オレも仲間  
に入れろや

鬼塚やる  
んだろ?

た田  
たくら  
先輩!

イイ考えが  
あるからよ



まさか  
テメーらが

ここまでやる  
外道だとは…  
恐れ入るぜ

くそが！  
ほどけ！！

全員まとめて  
ブチのめして  
やらあつ！！



飯食ってる  
最中に  
スタンガンで  
襲うたあよ

お前やりすぎ  
なんだよ

一匹狼気取りで  
メチャクチャ  
しやがって！

今までの分  
仕返しさせて  
もらうぜ

おとなしく  
俺らの傘下に  
入ってれば  
仲良くして  
やったのによ

そこでコレを  
プレゼントだ

ヤポン



ウチの親父が  
製薬会社の  
研究員でな  
禿げ治療の薬を  
作ってたんだ

が逆に  
毛が抜ける薬が  
できちゃった  
そうだ

女性ホルモンが  
どうか

これで  
一生…

禿げにして  
やるぜ！

あああ



最新単行本  
『堕天使たちの輪舞曲』  
堕天使たちの輪舞曲  
好評発売中!

# ある日、俺らの番長が 萌えキャラに なってしまったら

漫画 ぽふえ  
COMIC





上等だ！  
かかって  
こいやあ！！

一斉に  
かかれ！  
取り押さえ  
ろオオ！！

ふうん♡

テ  
テ  
ハナシ  
ヤガレ！！



ななんだ  
今の感覚？  
あああ

瞬間フワッて  
力が抜けたぞ  
……





まだまだ  
終わりじゃ  
ねーぞお!!

卑怯なマネ  
してくれた  
お礼に!  
百倍にして  
返してやるぜ

今だ!  
捕まえろ

ああっ  
しまった!  
くそお!!

暴れんな  
って!!  
コイツまだ  
気づいてない  
のかよっ!

はなせ  
えええ!!

**アッ**  
**アッ**  
**アッ**

れさ

おほえてろ  
コノヤロー

くっぞ  
テメエら!

うおおっ  
マジか!?



マジ  
だ!

バツ

シタ  
バツ

はなせ!  
はなし  
やがれ!!

なんだ  
コイツら

本物だ  
……

すげー  
揺れてる……

でか……

妙な顔  
しやがつて



やっと  
捕まえた  
なんて  
奴だよ



ちよ……  
携帯で  
見せる



はいっ



あー  
あー  
あー

いっしょ  
ちゃん



す  
すげえ…  
本物だ

んんっ

本当に女に  
なってるんだな

ん…  
や…め

あ

く…なんだよ  
この感覚

さっきの  
同じで

まさか…  
感じてんのか

どーなっ  
てんだコレ!?

こころ  
触んな!

やわら  
け…

でも元は  
鬼塚だよな

あ  
ああ…

でも  
可愛いな

あー

あー



へへへへ  
お前ら何  
ビビってん  
だよお

顔も体も声も  
変わっている  
肌の触り心地  
まで完全にもう  
女だぜこりゃ

相手は女  
いつものように  
やればいだけ  
じゃねーか

くっ…  
ううっ  
くそ  
こんな奴  
いつもなら  
腕なんか使え  
なめても



お前…くっ  
何言ってるんだ

はねのけ  
られるのに  
力が…  
出ねえ

こいつあもう  
別人ってこと  
なんだよ  
ただの女

お前らを  
ブチのめした  
女だ

んっく  
は…  
恨みを晴らす  
機会なんだぜ

ああっ  
やめ…ろ

どうなって  
んだ…  
この体は？

ヒュウッ  
デケエ乳  
してんな

ややめっ  
揉むんじゃ  
ねーよっ

揉まれてる  
おっぱい  
エロいな...

感度も良い  
みたいじゃん

っつこし  
俺のか

うっ  
うるさー

んっ  
はう  
あぁ♡

おお前!  
何してん  
だよ!?

気持...ち  
くうっ...  
悪い...

舐め...んなっ  
男に...乳首い  
舐められ...る  
なん...てッ

く...  
ソクソクする

あぁっ♡  
あぁ...あ  
そんなに舌で  
転がす...なあ

いっ...  
いい加減に

しろお!

テ...メ  
もう容赦  
しねーぞ



選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

# TS騎士シャリー

トランスセクシャルナイト

牝悦楽の嵐

かりのけい  
小説 NOVEL 狩野景

挿絵 ILLUSTRATION

SAKULA

性転換した少年騎士の肉体が牝の発情に苛まれる!!

**ご注意**

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

「はあああああつ!!」

ドシューウツ!!

すれ違いざまに抜き打った一撃が妖魔を切り裂く。

「ギエエエツ!! オ、オノレエ!!」

(し、しまった!!)

しかし踏み込みが甘かったせい、致命傷には至らなかった。手傷を負いながらも背後から王国騎士シェーリー・コルベルに襲いかかってくる。(くそつ、今日は何だか身体が重い)

元から小柄で華奢な体格なため、俊敏さで敵の懐に潜り込み、一撃必殺の刃を繰り出す。

その戦い方が今回はさっぱり冴えない。動きは遅く、踏み込みが甘いため、敵を一刀で仕留めきれずいまみたいな窮地に陥ってしまう。

頭もぼんやりしていて、どう対処するかが咄嗟に思い出せず、無防備に立ち尽くしてしまう。しかし、

「せいいつ!! —— 大丈夫か? シェーリー!!」

斬り殺される寸前に仲間、戦斧が、敵の頭を叩き割った。

「ジョルジョ、すまないっ!!」

「おう。ヤツらはもう壊滅寸前だ。あまり無理するな」

「あ、ああ……」

西国境近くの村が妖魔の襲撃に遭い、シェーリーの部隊に討伐の命令が下った。ヤツらのアジトのひとつを発見し

奇襲をかけたのだが、

(風邪をひいたかもしれない……)

女と勘違いされる容姿と名前をした騎士は、体調最悪だった。

おそらくは出立前日の酒盛りで酔いつぶれそのまま寝てしまったのが原因だろう。今頃になって症状が出た。

(くそつ、弛んでいるぞシェーリー・コルベル!!)

活躍どころか仲間の足を引っ張っている体たらくに歯噛みする最中、部隊は洞窟の妖魔を全滅させ圧倒的勝利を手に入れていた。

制圧した妖魔のアジト近隣にある村で戦勝の宴が繰り広げられている。しかし体調を崩したシェーリーは一人、宿舎として提供された宿屋の一室で、薬箱を漁っていた。

今回の遠征は少人数精鋭での任務のため薬師が同行していない。こうして病気になるたりすると、自力で治療薬を見つけ出さなければならぬ。

「たぶん……これと、これだ」

おぼろげな記憶を頼りに、風邪に効くであろう薬を何種類か選んで、一気に飲み干した。

「これで、楽になるはずだ……」

仲間のはしゃぐ声を窓の外に聞きながらベッドの上で目を閉じると、シェーリーの意識はあつという間に闇の中に沈み込んでいった。

「ん……。う……」

夢も見ずにぐっすり眠ってしまった。どうやら熱は下がったようだ。頭の痛みも消えている。けれど、

「なんだ、これ? 喉まで……」

全身が奇妙な違和感に包まれていた。しかも声の調子がおかしい。咳払いをしながら身を起こし、汗でぐっしょりになった寝間着を脱ぎ捨てると、

「へっ!? な、なに……、こ、れ……」

胸にズッシリと重い感触があった。身じろぐとそれが、ぶるんと跳ねる。思わず両手で触って確かめる。

「うわああつ!!」

ズッシリとした肉感が掌をいっばいに占める。つい力を込めると指が極上の柔らかさにヌプッと埋まり、

「んうつ!!」

蕩けるような快感がその膨らみの中から全身に広がった。

「なんだ? どうなってるんだ、俺!」

慌てて手を放し、姿見の前へ向かう。一歩ごとに胸の柔らかいものが弾んで、妙に歩きにくい。

「あ、ああ……、なん……だ、これ?」

これが……お、俺……!?!」

全身が収まる鏡の中に映った姿を見て、シェーリーは絶句した。

「お、女に……なってる……」

元から女性的な童顔は完全に女そのものの顔付きになり、短い赤髪が首筋にかかるくらい長さを増している。しかしそんな些細なことよりも、身体そのものが、どこからどう見ても女そのものの姿に変わり果てていた。

たつぷりと撓たがむに膨らんだ胸と、張り出した骨盤から安産型に質感を増した尻。それとは反対に細く括れた腕。鍛えてようやく筋肉がついてきた腕と脚も、無骨さの欠片もないしなやかでたおやかな美線を描く。

「嘘……だろ?」

ダブダブになった寝間着の下が、下着とともにずり落ちる。股間にあるはずの男の証が跡形もなく消え失せ、縦に溝を刻むツルンとした仄かな膨らみと化していた。恐る恐る、指先でそのワレメと、胸の膨らみでツンとそそり立つ乳首に触れてみた。途端、

「……ッ!! はあああああつ!!」

雷に打たれたような激しく熱い痺れが全身を突き抜けた。

それだけでもう立っていられない。へなへなとへたり込む。

(何故……? ま、まさか、薬を間違えたのか……!?)

魔導に通じる薬師の薬は組み合わせ次第で様々な効能を生み出す。うろ覚えの知識で、性別を変える組み合わせを選んでしまったに違いない。

「ど、どうしよう……」

仲間にはばれないように部屋で

おとなしくしている↓シーン2へ

※任務をおろそかには出来ない、

仲間のところに行く↓シーン3へ

「こ、こんな身体で、みんなの前に出るなんて……」

ただでさえ華奢で女性的な容姿と名前でも知られてはいるのに、本当に女になっちゃったなんて、なにを言われるかわかったものじゃない。

「それにこんな姿できちんと戦えるのか不安だし……。昨日みたいな足手纏いは二度とごめんだ！」

妖魔討伐の任務をおろそかにするのは心苦しいが、今日は宿に留まり元に戻れる薬を見つけないならならぬ。

「く……ッ」

悩ましくへたり込んだ様子を鏡に映す女の身体にシーツを巻きつけ隠すと、シャーリーは薬箱の中の薬をひとつひとつ調べ始めた。その最中、

「おいシャーリー、具合はどうだ、熱は下がったか？」

「メシの用意が出来たぞ。食べるようなら出てこいよ」

仲間が心配して様子を窺いにきた。

「あ……ああ、まだ、熱が下がらなくて……。今日は一日ここで休んで、治ったら追っかけるからって、隊長に伝えてくれないか」

咄嗟に思いついた言い訳を、しわがれ声を作って伝える。けれど、

「なんだ、妙に声が甲高いな？ まるで女みたいじゃないか」

「しかしあれくらいで風邪こじらせるなんて鍛え方が足りねえな。だからシ

ャーリーお嬢ちゃんなんてからかわれるんだぜ」

口は悪いがこれでも心配してくれているのだ。けれど、言葉の内容にいちいちドキドキしてしまう。

「風邪によく効く薬草摘んできたから飲ませてやるよ。薬師の得体の知れない薬よりよっぽど治りが早いぜ」

さらには部屋の中に様子を見に来ようとする。

「——!! いや、大丈夫だからっ！ 寝ていればすぐに治るからっ!!」

鍵をかけていなかったことに気がつき、ドアを必死に抑える。

「うわあっ！」

けれど華奢で非力な女の身体は呆気なく押し退けられ尻餅をついた。

「お前……、シャーリー、だよな？」

その様を見下ろす同僚たちの目が、驚きに見開かれていた。

「あ、ああ……」

引き撃った顔で答える。

「で……でも、その身体……」

指さされ、

「え……？ うわああっ!!」

巻きつけておいたシーツが解け、性別の変わった裸身が丸見えになっていることに気づいた。

胸で押し合うように谷間を刻む揉むな乳房はもちろん、華奢な腰も。そして、両膝を立てて開帳した両脚の狭間、陰茎と睾丸が跡形もなく消え失せた股間に女陰が割れ目を綻ばせる様をさらけ出していた。

「こ、これはっ、そのっ！」

慌ててシーツをたぐり寄せ、身体の前を隠しながら立ち上がった。呆然とした顔で部屋の中へと進んでくる彼らから、遠ざかるように後ずさる。

「お、お前、実は女だったのか？」

「可愛いツラしてるからまさかとは思ったが、本当に女だったなんて……」

「そんなわけあるか!! バカッ！」

着替えやら風呂やらでいままでも裸の付き合いがあつたくせに。仲間のボケた発言に思わずツッコむ。

「これは風邪薬を飲もうとして、その熱で頭ボーッとしてたんで、それっぽいのかまとめて飲んだら、こうなっちゃってんだ……」

「お前……、薬師の薬、ろくに調べないで飲んだのか？」

「組み合わせ次第では下手すれば死んでたぞ……」

仲間たちが呆れ顔で溜め息を吐く。

「うう……。だ、だって……」

浅はかさは自分でよくわかっている。己の間抜けさが恥ずかしくて顔を赤らめ、伏し目がちに呻くと、

「う……くそ、顔立ちが前よりもっと女っぽくなってやがるからっ」

「可愛いツラしやがって、こいつ！」

男たちが一斉にどよめいた。

「なっ!! なに可愛いとか言ってるんだ、お前ら！ 俺は男だって、何度言わせるんだっ、くそおっ!!」

「相変わらず先輩に対して口の利き方なんてねえなあ」

「でも女の声で生意気なこと言われると、何だかゾクゾクしねえか？」

「お……おまえらあ……」

なるべく低音で話そうとするのだけど、興奮するについ町中ではしゃぐ小娘みたいな甲高い声になってしまふ。

(つて、嘘だろ……!!)

悔しさに歯噛みすると、危うく目から涙が溢れそうになった。

(涙腺まで、女みたいに、緩くッ)

堪えるが目が潤んだようになるのは避けられない。隠そうと顔をますます伏せ上目遣いで窺うその仕草が、さらに男の視線を刺激する。

「な……なあ、本当に全部女になっちゃったのか、調べたほうがいいんじゃないか？」

「なっ!!」

「あ、ああ、そうだな。もしかしたら男の部分が残っているかもしれない、それに身体がどんな具合になっているのか、きちんと調べないと元に戻る方法も探しようがないだろうし」

「で、でも……」

いきなりの彼らからの要求に戸惑った。男の時の華奢な身体つきでさえ、筋骨隆々とした仲間たちに比べると貧弱すぎて、見られたりからかわれたりするのが恥ずかしかつたのに。本当に女になった身体を見られるなんて、情けなさすぎる。

「お前本当は男なんだろう？ だったらいまの身体はいわばお前の身体じゃないってことだ。だったらそんなの見ら

な

れたって平気なはずだ。一生その姿でいるわけじゃないんだし」

「あ、当たり前だ！ 俺は男だつ。こ、こんな、身体……別に。だから、どこまで変になつちまつてるのか、きちんと調べてくれ!!」

こうなると恥ずかしがつているのが、実に女々しく思えてきた。身体を隠していたシーツを投げ捨て、全裸を晒すとシャーリーは大胆な胡座姿でベッドにドカッと腰を下ろした。

「それじゃさつそく……」

彼らは、ベッドにかぶりつきでシャーリーの股間を覗き込んできた。興味津々に迫り出してくる顔の圧迫感に、思わず後ずさりそうになる。

「お前たち、調べるだけ、だからな」

照れ隠しに釘を刺すが、

「他に、なにかやることあるのか？」

「う……」

逆に返されてしまう。

「それよりさつきみたいに膝立てろよ。胡座じゃ全然見えねえ」

「アアッ、おい、あまり手荒に……」

「本当に女のお●んこだつ!! シャーリーにおまんこついてやがる!!」

「なんだ、もう結構濡れてやがるな。ピラピラが落ちて弛んでやがるし、穴もひくひく開いたり閉じたりしてる」

「ひあつ!! ち、違う、それは……」

彼らが部屋に入ってきてから、下腹の奥で妙な疼きが続いていた。ジンジンと痺れるような感覚が、いまはないはずのペニスと、股ぐらの下端のすぐ

内側で熱く膨れ上がっている。そこに、「ふえあああつ!! だ、め、くあああ!」

崩れ落ちるような刺激が灼熱を伴って炸裂した。

ぬちゅ、ぐちゅ、ず、ぶ、ぬぶぶ!!

戦友の太い指先が陰唇を掻き分けて鋭敏な粘膜をまさぐる。

「ば、か……、触る……な……つて、いった、あひつ! は、あああつ!!」

男の身体で味わうのとは比べものにならない快感を受け止めきれず混乱する中、指は弛み開いた小さな穴口を探り当て、中へと埋まり込んできた。

「お、おい、やめろ、このつ!」

そこにしか意識が向かわなくなる。

「俺は、男だつて、いつてる、だろ」

ぬぶぶと深くまで来るに連れ背中が打ち震える快感を堪えながら、自分の性別を主張する。

「でも愛液ピチャピチャに垂れ流しちやつて。発情しまくりじゃないか」

「ひぐつ!! だ、だから、これはつ!」

変化した肉体は、太い指を咥え込んだ股ぐらから、淫靡な蜜を止めどなく溢れさせていた。

「見て触った感じだと完璧に女になっているみたいだな。後は実際に女としてセックスできるのか試してみないと」

言うなり、彼らはスポンの前を開き硬く勃起した逸物を取り出した。

「お、おいつ!! そんなもの、出して、よろける身体で逃げようと腰を浮か

せるが、素早く背後に回り込んだ奴に胸を鷲掴みにされる。

「おお、乳も女そのものだ。柔らかいし、乳首コチコチに勃つてるぜ。それにしてもでけえな。立派な巨乳だ」

「だから、俺ッ、男、だつて……ッ」

男なのに巨乳と褒められたつて全然嬉しくない。けれど乳房に指をめり込ませて大胆に捏ねられると、甘い悦感が湧き起こつて惱ましい喘ぎが抑えられなくなる。

「気持ちよさそうだな。いまこつちも満足させてやるぜ」

「んひいっ! くふ、あ、はあつ!!」

房を揉まれながら乳首を不意打ちに弾かれると、女々しい悲鳴を上げて身体中が痙攣する。胸が歓喜を覚えるほどに下腹の熱も勢いを増して、じゅん、と奥から蜜汁が溢れ出る感触に見舞われた。陰部の蕩け具合を確かめながら、仲間の一人が勃起を打ち震わせてのしかかってくる。

「あ、ああつ、や、やめ……ろお!」

背後から抱きつく男との間に挟み込むように華奢な女体を抱き締めて、股間へと陰茎の先端を押し当ててきた。

「ひうつ!! はああつ! だめつ!!」

「そんな声でッ。まったく女そのものだなつ! それにもう早速、お前の膈俺のを締めつけてきてるぜつ」

「ち、膈!! そ、そんな、あぐうつ」

自分の身体に開いた穴の名称を告げられて愕然とする中、極太が奥へと突き進んでくる。

「くうつ、痛うあああああつ!!」

なにかが突き破られる衝撃とともに、激痛が股穴を走りぬけた。

「ご丁寧に処女膜までついてやがった。いま俺が破つちまつたげだな!!」

（処女お……ッ!? お、俺がつ? くうつ、そんなことつ）

「やめ……ろ、こんな、男、なんだぞ、俺……は。それなのに……ッ」

情けなさに打ち震えながら同僚を睨みつける。

「だからなおさらだろ。折角女の身体になつたんだから、男に戻る前に女の快感をタップリ味わっておけよ」

「こん……なの、快感じゃない……!」

そんなの、味わいたく、ないつ!!」

男のペニスを挿入された膈の、内側から激しく脈打つ破瓜痛は、男の身体で受けたどんな傷よりも屈辱的な痛みを感じさせた。男にはない股ぐらの穴の疼きに、自分が男に犯される立場の憐れな牝に成り下がったことを思い知らされ、情けなさに唇を噛む。

しかしお構いなしに狭穴を押し広げて埋まり来る怒張肉の先が、子宮口に突き当たつた途端、

「ふあああああああ……つ!!」

甘美が弾けた。つい相手にしがみついて腰をくねらせてしまう。

「なんだよ、嫌だとかいいながらしつかり感じてるじゃねえか。いまの締めつけすこかつたぜ」

「ち、ちが……。ああ、嘘お。ふあ、や、やめ、あああ、動く、なあつ!」

完全に身体が制御を失っていた。声が媚びるように上擦り、膣が自分でもわかるくらいに窄まり続けている。その絡みついてくる濡れ髪を刮けて、激しいストロークが繰り返された。

「くうっ！ あ、ふえあああああつ！！」  
「だ、だめっ、やめっ、お、ああつ！！」

一気に膨れ上がった快感を必死に押し殺そうと歯を食いしばったが、ほんの一瞬で限界に達した。

「気持ちよさそうなのツラしやがつて。本当は男だなんて嘘みたいなのに、まるつきり発情した牝の表情だ」

「元から女顔だし、実は本当は女だったのにもまだ男の身体になつて、それが元に戻つたんだつたりして」

傍らで見ていた連中も勃起した。ペニスを抜き、欲情の眼差しを注ぎながらからかってくる。

「い、いい加減な、こと、い、いう、な……あ、はっ、んっ、あひいッ！」

魚介臭い匂いを振りまきながら目の前に迫る他人の陰茎に顔をしかめ、戯言を一蹴しようとするが、硬くて極太な肉竿と愛液まみれの髪が擦れるに連れ、身体が快感に染められてゆく。

（あ、あああ、入れられてるだけ、で、どうにか……なるっ!! お、女の、身体ッ、こんなイイッ、なんてっ!!）

辛うじて口には出さなかったが、快感を認めてしまった。  
「いまの表情、いいぜ。ゾクゾクするっ！ おまんこも、俺のチ…ポ喜んで

くれてるしなっ!!」

濃厚な愛液にぬめつた膣の髪が蠕動しつばなしで、快楽を与えてくる硬肉を歓待する。戦友の興奮もますます昂り、ストロークが激しさを増す。

ズブズブッ、ズンズンズンッ！ パンッ、パンパンパンッ!! ズブッ!!  
「はひっ！ お、あ、あああつ!!  
はうんっ！ 強おッ、あ、ふああつ!!  
激し……んひいっ！ ああ、な、んだ、こ……れえ、あ、あああ、はうっ、

なにかに……ああ、く、くるっ!!」  
子宮を乱打されるたびに、意識が真っ白に染まる。

「感じまくつて、乳までますますでかくなつてきたぞ!!」

「あひいッ！ 乳首っ、だめっ!! ふああつ、感じ、すぎりゅっ！ おかし

く……あ、あ、あああつ、お、奥ううっ!! ち、奥ッ、あた、当た……

つてッ、くふあああつ、こんなのつ、こんなのおおつ！ ふあああ、だめっ、く、くりゅっ、来りゅううっ!!」

内臓にまで響く抽送の快感に狂つたように身をくねらせ、乳首を手荒に転がされる甘美に痙攣を繰り返す。

「くおおっ！ 出るぜっ!!」  
どびゆるるっ!! びゆるびゆるっ!!  
「お、あ、はあうううっ！ んあ、い、く、ふあああああつ!!」

男の陰茎が膣壁を押し広げてサイズを増したと思つた途端、灼熱の白濁液が激しい勢いで牝壺に降り注いだ。  
込み上げていた甘美の塊が、その刺

激に解き放たれ、シャーリーの意識を絶頂へと押し上げた。

（いま……の、イッた、のか？ 俺……それに、俺、男なのに、中出し、された……？ あ、あああ……）

ペニスを抜かれた膣穴からどぼどぼと精液がこぼれ出る。愕然となる中、  
「次は俺の番だぜ！」

男と違って余韻の長い絶頂が続く膣へ、もう新たな男根が突き込まれる。  
「待ッ、あ、はああああああつ!!」  
ズブズブズブ、ズズズズッ!

「お、俺も、もう我慢できねえっ!!」  
「は、早く射精して交代しろ！」

他の男たちが急かしながら、手淫の勢いを加熱させてカウパー濡れした先端を牝肌を擦りつけてくる。

「んあ、あああつ、そんな、ものっ、くつつけるな、あ、ああああつ!!」

ぬちゃぬちゃと先走り汁を擦り込まれ、身体が汚染される感覚に苛まれる。

「く、はああつ、き、汚いっ!! ほおおつ!! ああつ、はああああつ!!」  
けれどそれと同時に、子宮を弾き上げる深い突き込みが繰り返されて、濃厚な快感がいやでも沸き立つ。

ズブッ、ズブズブッ、ズズッ!!  
「んっくっ、ふ、おおつ、あ、はあああつ!! んあつ！ も、もお……」

膣穴に渦巻く女の快楽と、亀頭を擦りつけられる牝肌の汚染感が関連づけられ、カウパーがぬめるたびに子宮が脈打つ。押しつけられる亀頭の本数が増えるほどに、先走りがぬちゃぬちゃ

と粘り音を高鳴らせる。それに対抗して、牝壺からも、粘度を増した官能汁が溢れ出て、窄まりつばなしの髪壁に狂おしい潤滑をもたらした。

「うおっ、すげえ、この締めつけッ」  
腰を振りたくつて乱れるシャーリーを、全力の突き込みが襲う。

ずぬんっ、ずばんっ、ずばんばんっ!!  
「イイッ、女あ、気持ち、いいっ!! おおまんこおつ、これ、ダメ、なる！ 変ッ、なるっ!! お、あ、あああつ、イクっ、また、きた、イッつちやうっ！

ふああああああああつ!!」  
最初の絶頂もまだ収まらないその上から、さらに絶頂が押し寄せた。

「もう、イキやがつた、こいつッ!!」  
どびゅびゅうっ、ぶびゆるるっ、どびゅっ、どびゅどびゅどびゅうっ!!

膣の中に熱い白濁が怒濤の勢いで注ぎ込まれ、シャーリーは白目を剥いて痙攣を繰り返した。肌を汚す幾本もの亀頭からも、手淫の射精がぶちまけられ、女体と化した身体に降り注ぐ。

「あ、あああ……い、い……。おん、なあ、からだあ、よすぎ、りゅ……」  
ガクガクと収まらぬ絶頂の痙攣に身をくねらせ、淫蕩に蕩けた眼差しを勃起した肉棒に注ぎながら、シャーリーは誘うように自分から腰を突き出して荒く息を弾ませていた。

**BAD END**



### シーン3

集合場所に着くと、ざわめきとともに一斉に注目が集まった。

「お、お前、シャーリーか？」

「あ、ああ、もちろん。昨日具合悪かったんで薬飲んだのだけど、その時きちんと成分を確かめなかったんで……」

尋ねられる前に自分から平然を装って説明する。

「それで、そんな姿に……？」

薬師の魔法薬は取り扱いを誤ると思いも寄らない効力を現す。仲間たちが呆れつつも、男物の鎧からはみ出しかけている乳房や、たおやかさを備えた顔に視線を注ぐ。

「でも任務には差し支えないし、後で調べれば元に戻れると思うので……」

「ついてこれなかったら、即刻帰還させるからな！ もたもたしてないで、お前らも出発の準備を急げ!!」

シャーリーの姿を見回し複雑な表情になりながらも、隊長が命じる。

手が止まっていた仲間たちが再び慌ただしく動き出す中、性別の変わった騎士は安堵に胸を撫で下ろした。

(それにしてもこの鎧、困ったな)

体型がいままでとは完全に違ってしまったので腰や肩がぶかぶかだ。それでいて胸や尻は窮屈で息苦しさを覚える。しかも、

(胸当てが、擦れてる……ッ。乳首に。それに、尻のほうに布地が引つ張

られるから、股当てが……く、食い込んで……、ああ……)

宿を出た時にはすぐに慣れると思っただけが、それどころか刺激はどんどんと蓄積してきている。

「んうっ!!」

歩いた拍子に、陰核と乳首が同時に擦られて息が詰まるほどの甘美が走る。

「ど、どうした？」

「いや……、なんでも、ない……」

思わず漏れた悩ましい呻きに、側にいた同僚がギョツとして振り返る。

(ま、まずい。感じてるの、ばれる)

適当に誤魔化すとシャーリーは、足早に、物陰へ向かった。

「これ……。こんな状態で馬なんかに乗ったら……」

振動に激しく擦れる様を想像すると気が遠くなりかける。ベルトや紐など緩められるものはないかとズボンをもさぐった途端

「ひゃわっ! は、ああ……ッ」

さらに食い込んだ布地がクリトリスごとワレメの粘膜を盛大に擦った。

「く、お、あ、ああ……」

脳裏に火花が散る快感に身を振らせると、いまにも胸当てから飛び出しそうな豊乳まで刺激に見舞われる。

(奥……のほうが、熱いつ。なんだ、この……感覚ッ。ふああっ!!)

股間の奥のほうにもうひとつ心臓があるように、なにかが激しく脈打ち続けている。切ない疼きが膨れ上がり、その奥の壺から股間の内側に、ヌメッ

た雫が、じゅわつと溢れ出していた。

「だめ……だ、こんなこと、しちゃ……」

妖魔のアジトを襲うため出立の準備をしなくちゃいけないのに。

「ふえあああつ! はあううううっ!!」

我慢しきれず両手で自分の乳房を鷲掴みにしてしまった。

「くうっ、あ、ああ、む、胸……え」

革鎧の窮屈さが感度を一段と高めていて、指がめり込むと気が遠くなりそうな痛苦しい感覚が弾けた。

「俺の……胸っ、おんな、の、おっぱいっ。こんな、気持ち……イイ……なんてッ!! ふあああつ!!」

性別の変った身体を改めて意識すると、倒錯的な興奮が湧き上がる。

防具の上からでもわかる乳首の強張り勃ちを圧迫するように、撓むな筋肉を捏ねると、下腹の脈打ちも加速して股間に漏れ出る灼熱が量を増す。

「こつち、ちんこ、無くなつちやつた……」

……のに、勃起の、感覚があつ。それも、男の時より……狂おしいッ!!」

指先をそろそろと伸ばす。食い込んだ布地の上から股に触れてみる。

「ふえええはあああああ……ッ!!」

雷撃のような激しい快感が弾けた。

(こ……れ……、ひ、あああ……)

もはや立っていられず、ガクガクと脚を震わせへたり込む。

「その身体だと男の鎧は大変そうだなあ、シャーリーちゃん」

「戦いの最中にそんな調子で自慰始め

られたら大変だしなあ」

いきなり声をかけられギョツとして振り返ると、部隊のみんがニヤニヤ

笑いを浮かべて見詰めていた。

「ひっ、あ、こ、これ、違う……」

羞恥に言葉がまとまらない。言い訳も出来ず焦っている。

「丁度昨日の戦いで女妖魔の鎧を戦利品に頂いていたんだ。これならそのスケベな女体もピッタリ収まるだろ」

「ふえっ!! あ、ああ、やめッ。俺はこの鎧のままで、大丈夫……夫、さ、触る、な、ふあああああッ!!」

取り押さえられ無理矢理に露出度が高い鎧に着替えさせられた。

女物の鎧は着心地抜群なのだが、扇情的な意匠がどうしても落ち着かない。ここにたどり着くまでも散々仲間たちに欲情の視線を注がれ、不快なはずなのに股ぐらの火照りが強まった。

そんな状態で、

「総員っ、突撃!」

隊長の号令とともに部隊は妖魔のアジトへと攻撃を開始した。

◆発情が激しくて足手纏いになる。  
しんがりを務めよう。↓シーン4へ

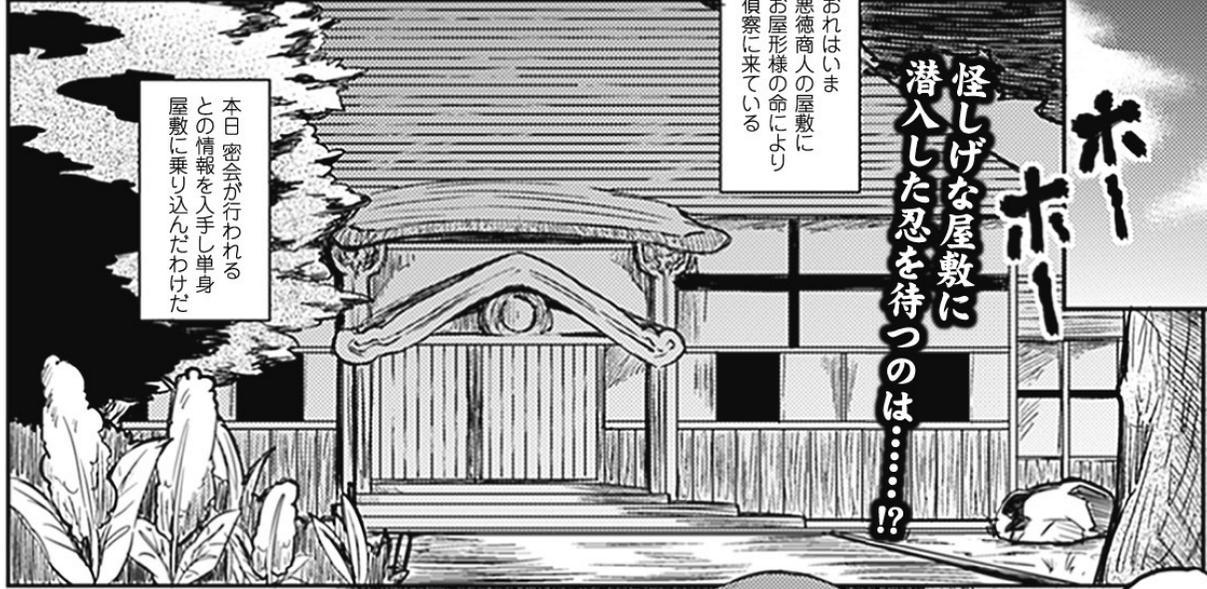
◆俺は騎士だ。先陣切って妖魔の  
アジトに突撃する。↓シーン5へ

ホー  
ホー  
ホー

怪しげな屋敷に  
潜入した忍を待つのは……!?

おれはいま  
悪徳商人の屋敷に  
お屋形様の命により  
偵察に来ている

本日密会が行われる  
との情報を入手し単身  
屋敷に乗り込んだわけだ



ふむたしか屋敷の主の部屋は  
この辺りにあったはずだが…

まよ  
まよ  
まよ

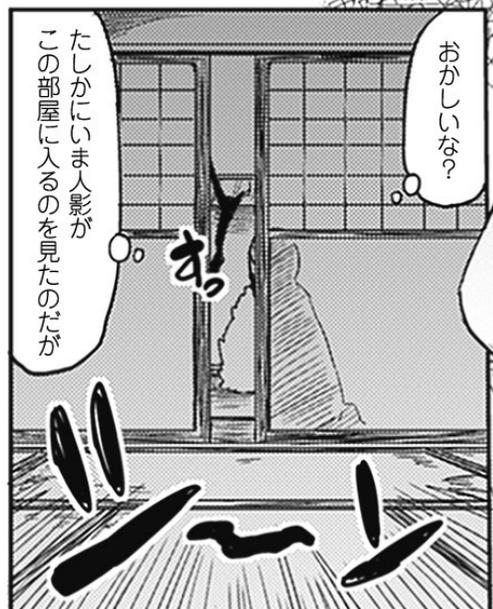
んあれは…!



おかしいな?

たしかにいま人影が  
この部屋に入るのを見たのだが

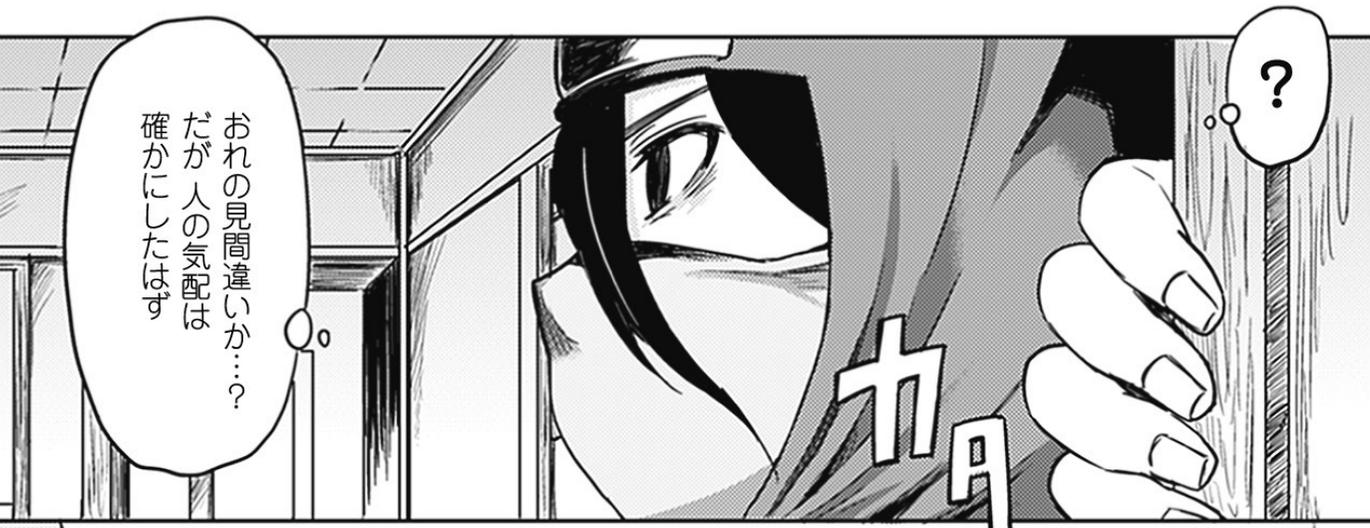
お



ギリリ

忍び  
しのび  
ダブルエックス

あやかせ  
漫画 綾柳ちよこ  
COMIC



くそッ

何とかして  
退路を開かねば！

ガッ



ウッ

グッ



キッ

ガッ



おいお前  
頭巾を外せ

捕まってしまうのは  
ざまあないですねえ

ですが

クッ

ひとりでの屋敷に  
忍びこむとは勇気の  
ある方ですね



く...

くそ体が...

ガッ

ガッ

キッ







これはまた  
良い女じゃ

ほうほう

うッ



それはよい

ほう?

ひッ

ガッ

ちゅぽん



ギョッ

おぬしとその姿で連れて  
こられた意味もう分かって  
おるのではないか?

おれをどうする気だ!  
…くッひと思いに殺せ!



良い女…  
おんなになったのか?  
おれが?  
くおれは男なんだぞ…ッ  
何故そんな目で見るんだ



おれの姿が何だと  
言うんだ…

早速味見と  
いこうかのう

ガッ  
ガッ

もうよい  
下がれ

スッ

はッ

おまんこ

何をする！

こんな奴いつもなら  
すぐにも振りほどける  
のに…これが女なのか？

ギィ  
ギィ

やはり女の体液は  
美味いのう…

うう…

ほほ  
おまんこ

れろ  
れろ

ぬる

うぐッ

そんな所を  
舐めるな

おまんこ  
ぬいッ

やめろッ

ババ

ちゅ

こんなオヤシに  
舌を吸われて…  
吐き気がする

んッ

ぎゅ

んび

んん



男に言められるなと  
こんな屈辱はじめてだ



あッ

サッ

ぐいー ちゅぽん

くそッ

やめろ  
おれは男なんだぞ

やはり女よりも男の方が  
反応が良いのう…  
ほっほそうじゃよ  
もっと抗わぬか



つ

舌が体内に…!?  
舐められている…  
こんな感覚は  
はじめてだ…

じゅる  
じゅる

うう  
くッ

あッ

あひッ

ぬちまお

ぎゅ!



ほー

ほー





そおら

一気に入ったぞ！

ひッ

びっぴ

ハッ

ズッ

ズッ

ああ

おれの股が  
広がっている



ズッ

ズッ

ズ

ちい



ちくしよつ…  
おれ男に犯されて  
いるのか

おお

おなごではやはり  
この締まりは味わえぬ

ズッ

ズッ

ズッ

ひあッ

あッあ…なんだこれ  
腹が押し広げられる

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

『雷の戦士ライディⅢ ～逆襲の邪神官～』発売記念特別企画！



待望のシリーズ最新作『雷の戦士ライディⅢ ～逆襲の邪神官～』がいよいよ発売間近！ それを記念して、今回は特別企画としてライディの外伝カラー小説をお届けします！ ゲームの原画を手がけ、現在『メガミクライシス』にてコミック版『雷の戦士ライディ ～破邪の雷光～』を好評連載中の、和馬村政先生が描く美麗イラストと共に楽しみ下さい！

# 雷の戦士ライディ

原作 / **ZyX**  
ORIGINAL

小説 / **筆祭競介**  
NOVEL

ふでまつりけいすけ

筆祭競介

かずまむらまさ

挿絵 / **和馬村政**

赤髪の女戦士——ライディは、嫌悪感を掻き立てられる光景を目の前にして、下唇を噛んでいた。

旅の途中で立ち寄ったサッドの町で、女の子が魔物にさらわれる事件が多発。その解決を依頼されて、魔物の巣窟であるこの塔にやってきたのだが——。

「……ちよつと、ミスっちゃったわね」

迷宮化している塔内を探索中、トラップにひっかかり今いる小部屋に落ちてしまったのだ。

（この塔に入ってから……可愛い女性型のモンスターにしか、ほとんど出会わなかったのに……）

小部屋の中では、女戦士の嫌悪感の正体——色とりどりの触手たちが、全身を粘液まみれにしながらグロテスクに絡みあっていた。

「人ゲンだ」「二ん間の牝だ」

触手たちは人の口にあたる部分を持っていない。それなのに、いったいどんな構造になっているのかカタコトながらも言葉を操れるようだ。

「エサだ」「あそこからマン汁すすルう」

そいつらがウネウネと近付いてくるのは、自分を攻撃するためではなさそうである。

（……クッ。たしかこの塔を支配しているキュバストも、女の子たちをさらっているのは、愛液を餌にするためだつて話だし……）

どうやらボスと同じ、卑猥な特性を持っているようだ。無論、だからと言って、こんな下等な肉管たちの餌になる気などさらさらしない。

「近付かないで！」

手にした剣を繰り出して、足元に絡みついでこようとする肉管の群を次から次へと薙ぎ払う。

「ビギイ！」「ビィィー！」

触手たちも咄嗟に避けようとするが、女戦士の振るう白刃のスピードがそれを遥かに上回る。彼らは簡単に肉胴を切り裂かれ、その場に粘液まみれのいびつな臓腑を撒き散らしていく。

しかし、いくら弱くとも敵の数が圧倒的すぎた。また細い触手と違い、太くて黒い触手は多少は戦い慣れた動きを見せる。

「しまつ……！」

三ヶタを超える肉管を切り捨てたところで剣を振るう右腕が、太い触手に搦め捕られてしまう。

咄嗟に左手で振り払おうとするが、そちらの腕も別の触手に搦め捕られてしまった。

こうなると、あとはもう多勢に無勢。

足元から絡みつかれ、脛当てやニーソックスの上を粘液まみれの肉縄たちが這い上がってくる。

「……くッッ!!」

触手の先が太腿に直に触れ、そのおぞましい感触に喉の奥から鋭い声が漏れてしまう。

それは人間の舌のぬめりと、勃起した男性器の熱と硬度を併せ持っているような感触だった。

背筋に嫌悪の震えがゾゾツと走る。

「や、やめて！ それ以上は絶対にダメ！」

股間にまで這い上がってこようとしたり肉管たちを防ぐため、ライディは全力で太腿を閉じた。

「ビギイ！」「チィィィー！」

細い触手がそれだけで、怯えたようにその身を引く。もし一対一ならば、剣などなくとも踏みつけるだけで倒せそうな弱さである。

——ギチツ、ギチチツ。

しかし今は、太い触手たちに四肢を完全に搦め捕られている。その両脚に巻きついている肉縄に、今までにない力が籠り、全力でよりあわせていた太腿が、徐々に開かれていってしまう。

「ッ……つくつ——んはああ」

ライディが思わず声を上げてしまったのは、触手が一本、スーツの内側に入り込んできたためだ。

「この牝、いい身体シテル。最高のエサになる」  
そいつはスーツの内側を、粘液まみれの身体でズ

ルスル這いだした。そのおぞましすぎる感触に、力で抵抗していた両足が一瞬緩んでしまい——がばあとその隙を突かれてM字に開かれてしまう。

「チィー！」「チィィー！」「ビギイ！」

直後、それまで様子を窺っていた触手たちが耳触りな歓声を上げて、一気に股間へと群がってきた。

「ああっ！ ダメ！ ソコだけは絶対にダメえ！」  
そいつらは次々にスーツの内側に潜り込み、そしてコレが邪魔だと言わんばかりに、股間を覆う部分を思いっきり下に引いてくる。

これでは当然、ライディの股間が丸見えだ。厚めの大陰唇がぱつくりと開き、その内側から覗く濃い桃色の小陰唇までもが化け物たちに晒される。

——又るるるっ、ぐちゅうう。ぐちゅうルン！  
すぐに無数の肉管たちが、その牝華の花弁を舐めるように這いだした。

「くっ……くう……」

女戦士は屈辱の声を漏らさないように、下唇を強く噛み締める。おぞましさしか感じない。しかし、触手たちの粘液には媚薬効果でもあるのか、身体が急に火照ってくる。強烈な嫌悪感の奥の方で、肉悦の火花がチリチリと小さく弾けだす。

「クッ……くう……んはあああ」

そして肉管に執拗に牝芽を擦られ続け、とうとう声を漏らしてしまう。その声には嫌悪だけでなく、はつきりと愉悅の色も混じっていた。

「濡ってきた」「ウマソウ」「エサああ！」

己の股間から聞こえてくる、肉縄たちの歓声を絶望的な気分で見聞かされながら、

——グチュぬるるるるるるるるるるん！

そいつらがライディの中に入ってきた。

「んはあああああああああ！」

色も大きさも違う触手たちが、四方八方から腔内に侵入し、牝路の中を舐めるように擦っていく。



感情は嫌悪感でいっぱいだ。

しかし陵辱を受けている肉体は全く痛みを感じていない。むしろ自在に蠢く肉管たちに、性粘膜をメチャクチャに捏ねくり回されて、過去に経験したことがない愉悅を感じてしまっている。

「あつ。あああ！ つああ。ダメつ、だめええ！」  
それでも——否、それだからこそ、ライディは長い赤髪を振り乱して必死に拒否を叫んでいた。

（気持ち悪いのに！ 心の底から嫌なのにいい！）  
太い触手が蜜壺内でのたうちながら、さらに細い触手がその僅かな隙間を埋めるようにして、膣壁たちを擦っていく。まさに複数の巨大な舌に、牝路をがむしやりに舐められているような快感だ。

人間の男が相手では決して味わえない、異形がもたらす壮絶な肉悦が炸裂している。

——カラン……。

たまらずと握り締めていた剣までも下に落としてしまう。こうなると、もうライディは女戦士ではなく、ただの女だった。

両腕に巻きついて太い肉縄も一旦ほだけ、今度は一本の触手だけで両肘を拘束されてしまう。

抵抗するだけの戦力を完全に失ったと、判断されてしまったようだ

「あああ！ つはあああ！ らめえ！ そんなに奥までヌルヌル舐めちゃらめえええ！」

あからさまに感じている声で抗議するだけでは、そう見下されても仕方がなかった。

——ぐちゅん、クちゅ、又ちゅんクちゅん！  
肉管たちに貫かれてる股間から響いてくる音も、さらに湿り気を増してしまう。

（く、悔しすぎる……あんなに弱かった相手に……）  
太腿を閉じただけでも怯えて逃げ出した触手たちが、今はなんの躊躇もなく自分を犯している。欲望の赴くまま膣内を動き回り、ライディに屈辱の喘ぎ

声を叫ばせては、好きなだけ愛液を貪っている。

「コイツの汁、ウマイ。もつと欲し！」

するとウァギナを責め続けていた触手が一本、今度は上へと向かってきた。今、両腕をヘソの前で交差するように拘束されているため、二の腕が両乳房を寄せあわせる格好になっている。

その谷間に、そいつは潜り込んできた。

「チィイ。チィィイ」

人間では発生できない、奇異な鳴き声を上げながら、ヌルヌルと乳肉の狭間を這い上がってくる。

そしてそいつは、にゅるん、と胸の谷間から先端を出すとライディの顔と正面から向きあった。

「才まえ、気に入ッた。もつと、汁だシテやる。もつと汁吸って、はやくキュバストにする」

「なっ?! ま、まさかお前たち……た、ただの触手じゃなくって……」

愛液を餌にしている特性や、ほぼ女性型モンスターしかいないこの塔内に、牡系の触手が一か所にこれほどの数存在している不自然さ——そんな諸々のひっかかりが一気に繋がる。

「こいつらキュバストの幼虫……ンぐううう!!」  
驚愕に目を見開いたライディの口に、いきなりその肉先を潜り込ませてきた。

口内に広がる生臭い匂いで眉間にきつい皺が寄り、反射的に歯を立てようとする。

「囓むナ」二度とモノを噛めなくするゾ」

しかし仲間をサポートするように他の触手——キュバストの幼虫たちが後頭部を威嚇するように這い始めて、閉じかけた口から力が抜ける。

（ク、クッ……このままじゃ……）  
口まで好きにされてしまう。しかしこの状況では抵抗してもさらに酷い仕打ちを受けるだけだ。

——ヌるるるる。ヌル、がぼがぼがぼつ。  
女戦士が囓むのを躊躇しているうちに、触手が動

き始めてしまった。自らが分泌する粘液によって乳房の間を滑りながら、唇の感触を楽しんでいる。

舌と男根の感触を併せ持っているその感触が、勃起ペニスの方へと近付いていく。

「な、なメロ。ナメロお」

しかも妙に甲高い声でそう命令してきた。後頭部を這う仲間たちが、小突くようにしてそれをうながしてくる。従うしかなかった。剣を落とし、四肢の自由を完全に奪われたこの状態では……。

口内を満たす生臭い肉管に、忤怩たる思いで己の味覚器官を這わせる。

「チィイ。チィィッ！」

すると、ますますそいつの鳴く声が甲高くなり、硬さもピギンと極限に達する。

（……ま、まさか!）  
それは人間の男が達する直前にそっくりの反応だった。そしてその後に行われることは——。

ドギユどりゅどぶん! どぎゅどぶん!

「ぶぶう?! んんんんん?! ん——!!」  
乳房の間につつく挟み込まれている触手が、ブルブルと震えながら、生臭い汚液をライディの口内に吐き出してくる。

（粘り気が凄すぎて、息ができないッ!）  
しかし、モノ凄い勢いで口内にぶちまけられているため、その何割かは嫌でも飲んでしまう。

そして脈動を終えた触手がズルンと抜けた直後、

「うげえ……」  
ライディは口内に残った汚液を一気に吐き出す。

しかし——ズクン! と全身が震えた。

触手たちが分泌している粘液にも媚薬効果はあったが、今飲み込んでしまったモノはその比ではない。

（な、なにこの感じ? か、身体が熱くて……）  
体温が一気に上昇するような感覚に伴い、触手たちが小突かれ続けている子宮が猛烈に疼きだす。



十聖換天使十  
**エクストラガナ**  
*Reincarnate Angel Exagna*

第五話 淫獄...

うえだ

小説  
NOVEL

**上田ながの**

ひなもりみずは

挿絵  
ILLUSTRATION

**雛森瑞羽**

曝される生徒会長の痴態！  
少女の日常空間をも陵辱は侵食する！！

著者近刊



10月22日発売!

登場人物紹介



黒河ヒツギ

人間の精気をエネルギーにして無限の力を発揮する「聖換天使エクスラグナ」に変身し、人類の敵 EP と戦う少女。

絹川昭介

ヒツギの着用する「聖換衣」を開発した研究者。かつてヒツギの両親とともに EP 討滅のために働いたが……。

高坂レイ、リナ

ヒツギによって EP の陵辱から救われた双子の姉妹。「魔殺天使」への変身能力を得て以来、EP と戦っている。

前号までのあらすじ

戦うほどに強大化し続ける EP を討滅するため、ヒツギは地球を揺るがす規模の力を使う。エネルギー補完として指示される絹川からの恥辱は、ヒツギの学園にまでおよびことに。人類救済と被虐の狭間で少女の孤独な戦いは続く――。

「な、なんだあれ？」  
写真家でアルピニスト野口健一は、冬の富士を撮ろうと河口湖口に自家用車で向かっている最中に異変に気付いた。  
遠くに見える富士山が紅く輝いている。とても禍々しい光だ。  
「どういうことだ？ まさか噴火の前兆か？」  
首を傾げつつも一旦車を止め、カメラを構える。シャッターに指をかけ、ピントを合わせた。  
ドオオオオオオオッ！  
凄まじい轟音が響き渡る。大地震でも起きたかのように周囲が揺れた。  
「……なっ?！」  
富士山頂から炎が吹き上がる。けれど火柱ではない。それは火炎球だった。富士山火口直径と同じ七〇メートルほどの大きさはありそうな火炎球が、発射されたロケットのような勢いで空に上がっていく。ゴオオオオオッという鼓膜を震わせる不気味な音を響かせながら、空に消えていった。  
「い、今のは一体……」  
呆然としながら首を傾げる。  
「え？ あ、な、なんだこれっ!」

同時に周囲の地面にヒビが入った。アスファルト道路に穴が空く。  
「ひ、ひいいいいいっ!」  
出現したのは幾本もの触手だった。全長は二〇メートルほどはあるだろうか？  
「うわっ! うわあああああ!」  
思わず悲鳴を上げる。これに反応するように、触手の先端が野口へと向いた。  
意識を保つことができたのはここまでである。  
\*  
「……これほどの大きさなんて……」  
静岡上空——白銀と黒色のバトルドレスに身を包んだエクスラグナは、ソレクを見て呆然と呟いた。  
富士山一つが丸ごと EP に取り込まれている。いや、富士山だけじゃない。静岡県全体が一体の巨大な幹のような EP が伸ばす触手によって覆われていた。動いている人はいない。静岡はまさにサイレントヒルと化していた。  
静岡県民をはじめとした人々はすべて捕らわれている。内部からは魔殺天使達の力も感じた。二人も敗れたらしい。  
「こ、これまでで最大級の敵だよ。うえ、ウエヒビこ、これは大変なことになっちゃったね。じ、人類存亡の危機だよ。最凶の敵だよ」  
呆然とするヒツギの耳に憎むべき男——絹川昭介の声が届く。妙に嬉しそうだった。  
「大変だ。わ、怖いよ怖いよ」  
小馬鹿にしているようにしか聞こえない。実際その通りなのだろう。が、言葉自体は事実だった。  
強大すぎる EP。その力は今までの比ではない。今回の被害は静岡だけに止まっただけではない。米国の二分の一が消滅した。英国なんて跡形もない。消えていった人々の苦しみ、悲しみを想像すると、

それだけで胸が張り裂けそうになる。  
「絶対に倒す!!」  
決意と共に手を合わせ、力を集中させた。  
「ラグナ——」  
EP 直上に巨大な魔法陣が描き出される。  
（これを使えばまた——それでも……）  
エネルギー補充時の陵辱が脳裏をよぎり、下腹部が疼くのを感じた。反応してしまう自分自身に嫌悪すら覚える。それでも、止まれない。  
「エクスプロージョン!!」  
カアアアアアッ!  
強大な力を解き放った。北半球全体を包み込むほどの光が力となり、一点に集中する。富士山全体を巨大な光の柱が、貫く——  
ドガアアアアアッ!!  
「う、嘘……」  
はずだった。  
だが、光は富士に命中することなく、EP が作り出した結界により、途中で四散する。  
「ひえー! これは凄いなあ。エクスプロージョンを防ぐのかあ。ひ、ヒツギたん大ピンチ! お、犯されちゃうよ。化け物にグッチャグッチャにヒツギたんが陵辱されちゃうお!」  
どこまで状況を理解しているのこいつは!!  
「だ、だまっ——きやあああああ!」  
エクスラグナに向かって凄まじい速度で触手が振るわれる。聖換天使でさえも反応できない速度だ。  
「こ、このっ! は、放せっ!! 放しなさいっ!!」  
腕を、脚を拘束される。ネットとした感触が気色悪かった。  
「ああ、捕まっちゃった。どど、どうするの? こ、このままじゃ触手に犯されちゃうよ。はあはあ」  
一本、二本では済まない。三本、四本と触手の数は増える。うねる肉紐が、聖換衣の上から、肌を

「ああ、捕まっちゃった。どど、どうするの? こ、このままじゃ触手に犯されちゃうよ。はあはあ」  
一本、二本では済まない。三本、四本と触手の数は増える。うねる肉紐が、聖換衣の上から、肌を

撫で回すように蠢きだした。

「んくっ！ くううう」

粘液が、聖換衣<sup>レ</sup>に染み込んで来る。触手はうねりながら乳房に絡みつき、母乳を搾ろうとするかのように締め上げてきた。

豊かな胸が肉触手に潰される。あつさりとした形を変える柔肉。今にも、聖換衣<sup>レ</sup>を破りそうなくらいに、乳房先端部が張り詰めた。

「んあっ」

僅かに愉悅の色を含んだ吐息を漏らしてしまふ。絹川によって散々性感を教え込まれてしまった肉体は、化け物が相手でも快感を覚えてしまっていた。

「あれ？ もも、もしかして気持ちいいの？」

「そ、そんなことないっ！ んっく！ くふっ」

否定はするものの、触手の動きに合わせて漏らしてしまう吐息を抑えられない。

「わあああ。へへ、変態だ〜！ ウエヒヒ、しし、触手に弄られてか、感じる変態だよ。怖い怖い」  
すべての言葉に悪意が混ざる。最低な男に言われっぱなしになるという状況——これ以上屈辱的なことはなかった。

「だ、黙れ——黙りなさいっ!!」

とはいえ、これ以上力を放出すれば、後でこれまでに以上屈辱的な侮辱を受けることになってしまう。考えるだけでおぞましい。

一瞬生まれる迷い。この隙を突くように、更に触手が肉体を締め上げてくる。下腹部に絡みつく肉紐。聖換衣のクロッチ部分に肉先が触れる。ぬちゅっぬちゅっ。と秘所を擦り上げてきた。

「んっはっ……。んっふあああ……」

性感が走る。半開きになる口から、熱い吐息が漏れた。全身から力が抜けそうになる。

触手に拘束され、肉体を持ち上げられた状態。大きく両足を開かれ、秘裂を何度も刺激される。触手

で陰部を撫で上げられるたび、性感を知っている肉体はどうしても官能の疼きを覚えてしまふ。  
くちゅっ、ちゅぐっ、むちゅるう。

「んっは！ んっんっ、くふっ——あっあっ」

甘い痺れが身を襲う。触手の表面を覆う粘液が下着に染み込み、淫靡な音を奏でた。

「触手に絡まれて感じてるヒツギたん。ウエヒ、た、堪らないよお。はあはあ」

絹川の興奮した声が耳に届いた。

（な、何をしてる……。わ、私は何を恐れている。わ、私が恐れてどうする!! 私しかみんなを救うことはできないのよ！ 躊躇うな！ なんの為にこれまで戦ってきたの!! それを思い出しなさい!!）

耳障りで気色悪い声が、躊躇するヒツギを現実に引き戻す。

「わ、私は——私は止まるわけにはいかない！ わ、私は聖換天使——エクストラグナなのよ!! はああああああ！」

シユバアアアアッ!!

気合いと共に力を全開にする。絡みついていた触手はこれだけで完全消滅した。  
「おおっ！ でもいいの？ そ、そんなに力を使ったら……ウエヒヒヒ、あ、後で僕が酷い目に遭わせちゃうよ」

「……五月蠅い。か、関係ない。私は……私はみんなを——この世界を守る!!」

絹川に穢されることをどうしても考えてしまう想像するだけで頭がどういかなってしまっそうなほどの屈辱を覚えた。だが、それでも両腕を天に向かつて掲げ、力を集中させる。

（わ、私は止まるわけにはいかない。負けるわけにはいかない。ここでやめたら母さんが、私が——）  
屈辱の数々を思い出す。今にも泣き出しそうな母の顔が脳裏に浮かんだ。

（これまで戦ってきた意味がなくなっちゃうから）  
聖換天使としての力を最大限にまで高める。聖換衣<sup>レ</sup>の背中から、天使を思わせる翼が伸びた。

「私は悪を滅ぼす。天よ——私に力を——」

解き放たれた力が、宇宙の配列さえも変える。動き出す星々——地球を中心に、太陽系の星々が十字架を描き出した。

「エクス——グラランド」

すべての星々から、強大なエネルギーがエクストラグナへと集中する。

「クロスツ!!」

掲げていた腕を富士山に向かって振り下ろす。

ドグアアアアアッ!!

尋常でないエネルギーの塊が、EPの作り出したバリアを打ち破り、富士に直撃した。

「すず、凄いだったね。富士山が完全に消滅しちゃったよ。し、しかも、それでいて捕まっていた人達を助け出すなんて。さ、流星だね。しゅごいよお♡」

研究所モニターに映る富士山跡地——富士の山は消滅し、底が見えない巨大な穴が空いていた——の光景を眺めながら、嬉しそうに絹川は笑う。  
（笑えないわよ……）

だがヒツギは全然喜ぶことができなかった。

確かに攻撃と同時にバリアも発動させ、静岡県民の命を救うことはできた。しかし、富士登山中だった人々の行方は分からない。どうやらEPによってどこかに連れ去られてしまっているらしかった。魔殺天使二人も方知れずである。

救うことができなかつた……。変身を解いた制服姿で、血が滲みそうなほどに拳を握り込む。

「そ、そんな悲しい顔しないでヒツギたん。僕、ヒツギたんそんな顔されたら、悲しくって泣いちゃうぞだよお。うえ〜ん」

（これ以上は……）

「……そ、そんな巫山戯たこといつてる暇があったらみんなを探さないよ！」

「別に巫山戯てる気はないんだけどなあ。で、でも、大丈夫。ちゃ〜んと探索はしてるからね♪ だ、か・ら……みんなが見つかるまでの間に、エネルギー補充をしないとね」

「パチッとウインクしてくる。気色悪さに肌が粟立った。」

「さて、エネルギーを八〇%も使っちゃったヒツギさんの為に今回用意したのはこれだよ！」

巨大な注射器のようなものを取り出す。大きさは絹川の身長と同じくらいはあるだろうか？ その中にはたつぷりと透明な液体が注がれていた。

「な、なによそれは……」

「何っても、勿論——みんな大好き流腸器だよ」

「か、流腸……」

血の気が引く。

「む、無理よ」

巨大な器具の中に注がれた液の量は尋常でない。

「無理じゃないよ。お、音羽にだってできたんだ。き、君にも当然できるさ」

「か、母さんも？」

母が肛門に液体を流し込まれる姿を想像してしまふ。屈辱と絶望に彩られた母の表情を……。

（クズ野郎……）

殺意さえ覚える。

「怖い目だなあ。で、でも怒るのは筋違いだよ。だって音羽だって喜んでたんだから。あの日はヒツギさんの参観日だったなあ。ウエヒビ、あ、愛する子供の頑張ってる姿を見ながら、ずっと音羽はうんこを我慢してた。でもって我慢できずにお漏らししちゃった。うんこ漏らしてイキながら、そ、それでも君の為に参観し続ける姿。ウエヒビ、か、感

動ものだったなあ。母の愛……だね♥」

「絹川あつ！」

遂に我慢できなくなり、殴りつける。

「い、痛い。凄く痛い。ああ、気持ちいいよ♥」

床に転がる太った身体。表情は恍惚に歪んでいた。不気味すぎる姿に、殴った腕の方が腐りそうだった。

「いい拳だったよ。ウエヒ、そ、それじゃあ一発殴ってすつきりしたところで、か、流腸を始めようかさあ、そ、そこに四つん這いになってね」

殴られてまるで動じない。EPなんかよりもよっぽど化け物のように見えた。

「どうしたの？ は、早くしてよ。ぼ、僕のいうことが聞けないの？ 魔殺天使とか、攫われた人達がどうなってもいいのかなあ？」

「こ、これで……いい、いいの？」

逆らうことなどできはしない。屈辱に打ち震えながら、ヒツギはその場に四つん這いになった。

「ウエヒビ、い、いつ見てもプリプリしたお尻だねえ。たた、堪らないなあ」

スカートが捲られ、ショーツが剥き出しになる。

（見るな。く、腐る……）

「ああ、この感触。最高だよお」

勿論心の声など届かない。絹川が視姦を中断することはなかった。それどころか、下着の上から尻を撫で回し始める。

「んっく、くふう……」

掌の温かみが伝わってきた。張り出したヒツップを掌でなぞられるだけで、肉体はピクッと反応してしまふ。条件反射の様に下腹部が熱を持っていた。

「あれ？ も、もう感じてるの？」

「……黙れなさい」

「ウエヒビ、ほ、ホント淫乱な身体になったね。音羽もそうだったなあ。死んじやうちよつと前なんてヒツギさんに触られるだけでも濡れてたよ」

「黙れえつ！」

ズキンッと胸が痛む。母の苦しみ、悲しみが分かりすぎるほどに理解できてしまった。

「怖いなあ。ウエヒビ。そ、それじゃあいくよ」

容赦なく下着が破り捨てられた。プリンツとした白い尻が露わにされる。戦いを終えた後の為、ムワツとした蒸れた匂いが室内に漂った。絹川は「ああ、いつ嗅いても堪らないなあ」とかいいながら、破れたショーツを口に唾えてハムハムとしやぶる。

（——ひっ！ き、気持ち悪い……）

全身が総毛立つほどにおぞましい光景だった。正直逃げ出したい。

だが、この場で逃げることは許されなかった。四つん這いのまま硬直することしかできない。

「じゃあ流腸するね」

やがて巨大器具を絹川が構える。ペニスと同じくらいに不気味に膨れあがった流腸器の先端が、グヂユリツと肛門に密着してきた。

じゅぐつ、ぐじゅぶるう。

「ふひっ！ おつ、んおつ！ おつおつおつ、お、大きい。む、無理っ！ そ、それ以上無理。挿入らない。さ、裂ける。お、お尻が裂けちゃうっ！」

巨大器具が腸壁を押し広げる。冷たい感触が下部に広がってきた。尻が震える。肛門が引き裂かれてしまうのではないかと思うくらいに拡張された。

「裂けなんかないよ。だ、だってお尻はひ、ヒツギさんのぶつというんこを出したって大丈夫なくらいに丈夫なんだからさ、も、もつと奥まで挿入するよ」

「うくつ、そ、それ、それ以上はむ、むつり——んひいひいっ！」

訴えなど聞き入れてはもらえない。肛門に流腸器注射部の根元まで挿入されてしまった。

「おつ、んほつ……おお……ぬ、ぬいつて。こ、こんなのお、おかしくなる……。こ、こわれつる。わ、

私が壊れる……。も、もう抜いてえ」

まるで巨大な杭を肛門に穿たれているかのような感覚に瞳を見開く。半開きになった口からは「おっおっおっ」と獣のような呻き声が漏れた。

「ま、まだまだほ、本番はここからだよ。た、たっぶり流し込んであげるからね」

「流し込むつて——ふひっ！ ほおっ！！ んっ、くひいっ！ や、な、なっかに、中にな、ながれつて、流れてくるう」

どぶじゅつ、ぶじゅつ、ぬぶじゅつうう。

挿入だけでは終わらない。器具の先端から多量の浣腸液が、ヒツギの直腸に流し込まれた。

「っ、冷たい。お、こ、こつれ、お、お腹。私のお腹がやぶ、やぶれつる！ と、止めて、とめてえええ！」

下腹部に冷たい液体が広がっていく。排泄器官を逆流してくる液体の感覚に、自然と悲鳴が漏れた。

「ウエヒ、すご、凄いや。ひ、ヒツギたんのお腹が内側から膨らんできた。ウエヒヒ、ま、まるで赤ちゃんできたみたいだねえ。ぽ、僕とヒツギたんのうんこ赤ちゃんだよ♥」

どんなに悲痛な声も届かない。それどころか喜ばせる結果にしかならなかった。

不気味に笑いながら、浣腸液注入を続けてくる。膨張する直腸。ぽこつと下腹部が膨らんだ。

それでいてなお、浣腸液は器具内に残っている。膨れた腹に更に汚液が流し込まれた。

「む、むっり。も、これ以上は無理なの。おっお、おとおお……。お、お腹、わ、私のお、なが、ば、パンパンなのお」

すべての液体が流し込まれる。その頃には本当に妊娠でもしているのではないかと思えるくらいに、下腹はパンパンにされてしまっていた。

「ほくら、全部入ったでしょ？ さあ、じゃあお願いどおり抜いてあげるね」

はあはあと荒い息を吐き、唇を舐めながら、肛門に挿入した器具を引き抜こうとしてくる。

「だつめ！ い、いま、今抜いちや駄目えつ！！」

先程までとは逆。今度はその行動を止めようとする。この状況で浣腸器を引き抜かれるわけにはいかなかった。

（漏れちゃう。ぬ、抜かれたら漏れちゃうっ！！）

流し込まれた液体がすべて逆流しかねない。この男の前で汚物を漏らすことになってしまう。

「ほくら、抜き抜きしまちようね」

だが、絹川の耳には届かない。ニタニタ笑いながら、ジュブツと容赦なく浣腸器を引き抜いてきた。

「おっ！ ほ、ほおっ！！ んんんん。くつ、ぶぐつ、くふううう」

（た、耐えて！ 耐えてえええつ！！）

括約筋に力を込める。必死に肛門を閉じ、流れ出そうとするものを必死に抑えた。

ぎゅるるるうつと腹が鳴る。

「へく、すぐ漏らすかと思っただけど、け、結構耐えるねえ。流石音羽の娘だよ。でも、辛いんじゃない？ す、凄くげげ、下品な音が鳴ってるよ」

挑発するような言動。この場で八つ裂きにしてやりたいくらいに怒りを覚える。が、怒りを向ける余裕なんてどこにもなかった。

「……と、トイレ……。トイレに行かせて……」

肛門が痙攣していた。ギョルルツという音色と共に、便意が増幅していく。少しでも油断すれば、この場で汚物を撒き散らかねない状況だった。絶対にそれだけは避けなければならぬ。

「お、お願い。お願いだから……。と、トイレに……」

相手が憎むべき最低のクズだと分かっていたなお、ヒツギ繰り返した懇願を口にする。

「ふふ、す、素直なヒツギたんも可愛いねえ。でも、なんでトイレに行きたいのかなあ？ 教えてよ」

簡単に聞き入れてはくれない。分かっているくせに、惚けてくる。

「だ、だから、も、漏れそうだから……」

「漏れそう？ 何が？ はつきり名前をいつてくれないと分からないよ」

「だ……。だから……。そ、それは……」

開く口が震えた。屈辱でズタズタになりそうになる心。だが、それ以上に肉体は切羽詰まっている。

「う、う。ちよ。う、う。ちが漏れそうなの！ だ、だからトイレに行かせてえ！！」

なりふり構ってなどいられなかった。研究所中に響くような声で叫ぶ。

「まあ、まあまあまあ……。だ、駄目だよヒツギたん。う、う。ちなんて下品なこと言っちゃあ。きやわわ、恥ずかしい」

わざとらしく口元を押さえて瞳をはくりさせる。「お、お願い。行かせて。げ、限界なの……。うんち出ちゃうのぉ」

それでもなお懇願することしかできない。無敵の聖換天使はあまりにも無力だった。

「……仕方ないなあ。まあいいよ。や、約束だから行かせてあげるね。ウエヒヒヒ。で、でもね、残念ながら研究所のトイレは壊れちゃってるんだ」

「そ、そんな……」

血の気が引いていく。

「だから、ちよつと遠くのトイレまで遠出しようか」

今夜浮かべた中で最高に下劣な笑みが、絹川の口元に浮かんだ。

「お、おっおっおっ」

べたぺたと四つん這い状態で道路を歩く。首には首輪がつけられていた。そこから伸びるリードを持っているのは絹川である。尻には巨大なパイプが挿入されていた。

「近くに確かここ、公園があつたよね。そ、そこにはトイレもあつたから、あ、あそこに行こう。でも、普通に行つたんじゃないから。い、犬の散歩風しようね。蓋もしてあげるからさ♥」  
「という言葉の為に、こんな事態になつてた。衣服は身に着けることを許されていない。晒した白い肌と首輪という状態だ。ただし、何故かネクタイとニーソックスの着用は認められている。」

正直完全に全裸よりも恥ずかしい。  
（こ、こんな姿……。だ、誰にも見られるわけにはいかない）

深夜で人影はまったくないとはいえ、全身の血液が沸騰しそうなほどの羞恥を覚えた。

公園まで急がなければならぬ。が、進行速度を上げれば、汚物が漏れてしまう。ぺたぺたと進む足取りは、まるで亀のように遅々としたものだった。

「遅いなあ。こ、こんな速度じゃ朝になっちゃうよ。あ、明日の朝はプリキア見ないといけないから、はは、早起きしないとイケないの。ね、寝るのが遅くなっちゃうじゃないか、ブンブン！ ほら、もっと早く歩いてよ!!」

この歩みの遅さに少し苛立ったような表情を浮かべたかと思うと、手を振り上げ、容赦なく尻を叩いてきた。パンツという乾いた音が響く。

「ふ、ふひっ！」

尻から頭まで抜けるような刺激が走った。閉じていた肛門が開きそうになる。

「が、がまん。た、たえる。おっおっおっ……。耐えるの。も、漏らしたら、漏らしたらだめえ」

括約筋に力を入れながらキュッと太股を締め、腰をくねらせる姿は、あまりに哀れなものだった。

「つ、ついた。こ、公園ついたあ……」

それでも何とか漏らすことなく公園まで到着する。

全身を脂汗に塗れさせながら、公衆トイレを見てほと安堵の笑みを浮かべた。

（トイレ。出せる。う■ち出せる……）

そのことしか考えられなくなる。まるで散歩にはしゃぐ本物の犬のように、四つん這い状態のままトイレに向かって駆け出そうとした。

「うぐえっ」

が、首輪が引つ張られる。

「げぼっ！ ど、どうして？」

息を詰まらせながら、リードを引つ張る絹川に媚びるような視線を向けた。

「ご、ごめんねヒツギたん。と、トイレに行かせてあげたいんだけど、そ、その前に一仕事しないと」

「ひ、一仕事？ な、なに？ なんなの!？」

「いやね、あそこにいる連中なんだから」

公園内を指さす。視線を向けるそこには十数人の若者がたむろつていた。年齢はヒツギと同じくらいだろうか？ 彼らは煙草を吸いつつ、くだらないことを話してゲラゲラ笑っている。

「か、彼らがな、なんなの?」

「この為に僕が呼んでおいたんだ。さあ行こう」

そういつて歩き出す。

「や、だ、駄目っ！ こ、こんな格好で駄目え！」

当然リードが引つ張られる。この状態で彼らの前

に出るなど、絶対にあり得ないことだった。

「お〜い君達」

しかし制止の言葉は届かない。笑いながら絹川は少年達に声をかけた。

「ああ？ なんだ？」

「うわっ！ キモイおっさん」

「俺達になにか用かよ？」

少年達は絹川を見た途端、明らかに不快そうな表情を浮かべる。敵意を持った視線が向けられた。

「何ってその……。招待状は読んだでしょ？」

まったく動じた様子を見せず、少年達に問う。

「招待状……。あれ送ったのおっさんかよ」

「綺麗な女が奉仕してくれるって書いてあつたけど……こんなキモイおっさんってことは、ありや嘘か」

「……舐めやがって。ぶっ殺し——え？」

そこで一人の少年が絶句した。

「あ、どうした？」

「ど、どうしたって……。そ、それ見ろよ」

呆然としながら——ヒツギを指さしてきた。

「え？ あ……。え？ せ、生徒会長？」

「ま、マジ？」

少年達が瞳を見開く。

（へ？ あ……。こ、この子達……）

ヒツギも呆然とした表情を浮かべた。

彼らには見覚えがある。よく学校内で注意をする不良生徒達。

「そうだよ。きき、君達の生徒会長。か、可愛い牝犬だろ？」

「め、牝犬？」

「そうだよ。僕の牝犬……。ウエヒヒ、ぼ、僕の招待状……。信じてくれたかな？」

驚く少年達に笑いかける。

「す、すげえ。あ、あの生徒会長がこんなエロイなんて……」

「み、見ろよこのおっぱい。でけえ。た、たまんねえな」

「裸で犬みたいに散歩って……。ド変態かよ」

ゴクリツとみんなが息を呑む。

「ウエヒヒ。そ、その通りだよ。こ、この子は本当に変態だね。ぼぼ、僕だけじゃ我慢できないっていうんだ。もっと沢山チ■ポ吸いたいわってね。ほら、

できるよねヒツギたん」

「な、何を、い、いつて……」

最悪な提案だった。一瞬夢を見ているのではない

のだらうかとさえ思う。

「ウェヒヒ、みんなのをべろべろしてあげるんだよ」  
しかし、ヒツギに向けられる絹川の視線はどこまでも現実だった。

「そ、そんなことできるわけ……」

「やるよね？ や、やらないと……攫われた人達の行方捜索をやめちゃうよ」

どこまでも最悪な男だ……。

「ままま、マジかよ。せ、生徒会長がほ、本当にフエラしてくれるのか？」

「も、勿論だよ。さあ、ズボンを下ろして」

絹川の言葉に従い、不良生徒達はズボンを下ろすこの異様な状況に興奮しているらしく、彼らは皆ベニスに勃起させていた。

（あ、あり得ない。こ、こんなあり得ない……）

呆然とする。身体が硬直した。

「さあ、やってあげて。ほら、やらないとトイレにも行けないよ」

パンツと尻を叩いてくる。

「ふひっ！ んんんんん」

拒否権などどこにもなかった。

べたべたと四つん這いのまま不良男子の一人に近づいていく。

（嘘でしょ？ こ、こんなことしちゃ駄目よ。だ、だって、あ、相手は同じ学校の生徒なのよ！）

理性が悲鳴のような声を上げた。

だがやる以外に道はない。

口奉仕しなければ絹川がみんなを探してくれない。エネルギー補充もできない。それでは世界が守れない。今までの行為が、母の戦いが、すべて無駄になつてしまう。

「ほら、やらないとトイレにもい、行かせてあげないよ。そ、それでもいいの？」

逃げ道は完全に塞がれていた。

（し、仕方ないじゃない。こうするしかないんだから。だから仕方ないじゃないっ!!）

目の前に肉棒が突き付けられる。ムワツと噎せ返るような匂いがした。

「そ、それじゃあ……い、いくわね……」

「そんな、言い方じゃ駄目だよ。こ、こういうわんくちやね。ウェヒヒ」

耳元でいべき言葉を告げられる。

「そ、そんなこと……」

「いえるよね？」

拒否権はなかった。

「……こ、これから……み、皆さんのお、オチンポに……ほ、奉仕させていただきます……」

絞り出すように屈辱の言葉を口にする。

「お、オチンポ……生徒会長が……。マジかよ」

「変態大人だな」

ゲラゲラ男達が楽しそうに笑った。

（だ、黙って……黙りなさい……こうするしか。こういうしかないのよ……）

いいたいことは多々あった。けれど何もいうことはできない。

屈辱と便意に耐えながら、唇を肉先に寄せ——

ちゅうっ。

キスをした。

「おおっ！ マジで！ スゲえっ!!」

感動の声を不良生徒が上げる。

（……こんななんでもない。なんでもないわ）

屈く声に心にヒビが入りそうだった。

これを抑えて、チュッチュッチュッと繰り返し啄むように口付けする。肉茎はキスをするたびにビクビク震えた。

当然キスだけでは終わらない。唇を開き、舌を伸ばす。チロツと肉先を舐めた。塩気を含んだ味が伝

わつてくる。

「んちゅうつ、ちゅばつ、ちろつちろつ、んちゅう」  
アイスでも舐めるみたいにべろべろ肉棒を舐め、

遂には——

「んもっ！ ふもおっ」

これを啜えた。

「せ、生徒会長がお、俺のを啜えてる。た、たまんねえ。こ、こんな我慢できねえよ」

喉奥までベニスを啜え込む。

「ふうふう……。ふちゅうつ、ちゅぶつ、くちゅぶう」

口腔を窄める。舌先を鈴口に這わせ、べろべろ舐めながらこれを啜った。

「そ、それすっげ、で、射精るっ！」

するとすぐに男子は限界を告げる。ビクンツと口腔内でベニスが痙攣し——

どびゅぶっ！ どびゅぶっ！ どびゅぶるうっ!!

「んもっ！ ぶっ、ふぶおっ！ うえっ、うええ」

白濁液を口腔内に撃ち放つてきた。反射的に吐き出してしまふ。口まわりが汚液でドロドロになった。

「ああ、最高だったあ」

「おめー早すぎ」

「つ、次はオレだあ！」

我先にと肉棒を突き付けてくる。ヒツギに対する

気遣いなど、どこにもなかった。

新たな肉棒が突き出される。

「……ん、ふちゅう」

一瞬迷ったけれど、ギョルルツとなる下腹部の音にせかされるように、これを啜えた。

先程よりも大きなベニス。

「んちゅうつ、べろつ、ちゅつちゅつちゅつ」

まずは口付けをする。何度も肉棒にキスをした。勿論それだけでは終わらない。舌を伸ばし、裏筋を

舐め上げる。舌先でなぞるたびに、肉棒はビクビク

クツと反応を示した。

やがてペニスは唾液に塗れる。最初に舌を這わせ  
た時よりも、更に大きさを増していた。

「す、すげえ。せ、生徒会長なんか手慣れてない?」

「チ ポ好きの変態かよ。幻滅だなあ」

口々に勝手な言葉に向けられる。

(ち、違う。わ、私は変態なんかじゃない……)

自然動きが鈍った。

「ウエヒヒ、ど、どうしたのヒツギたん? 早くし  
ないとトイレに間に合わなくなっちゃうよ」

だが、休んでいる暇などない。

(こ、こうするしか……こうするしかないのよ)

必死に自分自身に言い聞かせながら、口を大きく

開き、ペニスを啜える。

「んもっ、おっ、んぶおお」

顎が外れそうなほどなので、肉先だけ啜えるに止  
まる。

「や、やっぱり生徒会長はチ ポ好きだったんだ。  
ああ、たまね。口の中最高! でも、もつと、も

つと奥まで啜えてくれよ!!」

それだけで健全な男子が満足するはずもない。腰

が突き出される。

「おぼっ! んぶおおっ!!」

喉奥まで容赦なく肉棒が突き込まれた。

「お、あつご、く、くつち、わ、わだつちのく、く  
ぢがざげぢやうう」

「こ、これ最高。ああ、マジ気持ちいい!」

突き込むだけでは終わらない。

じゅごつじゅごつじゅごつ!

「おぼっ! むっむっむぼっ!! おっおっおおお」

容赦なく腰を前後に振ってきた。

まるで腔を犯している時のように激しいピストン

が口腔を襲う。玩具の様にヒツギの頭は前後に振ら  
れた。

(く、くるっし、い、いきつが、息がききなつた。

くつち、わ、私の口……おか、犯されてるう)

自然と溢れ出した唾液によって、口まわりが淫ら  
に穢れる。ドジュッドジュツと喉奥を突かれるたび、  
剥き出しの肢体がビクビクッと震えた。

「も、もう射精る。た、たっぶり飲めよっ!」

これまで以上に腔奥まで肉棒が突き込まれる。亀  
頭が破裂しそうなくらいに膨れあがり――

ぶびゅばっ! どびゅつ! びゅぶるるるっ!!  
「おっぼ! むぼっ、んぶおおお」  
喉奥に白濁液が放たれた。  
(お、おぼれる。せ、精液で潮れるう)  
牡汁で喉奥が塞がれる。息が詰まった。しかし、  
肉棒を口腔から引き抜いてもええないので、吐き出  
すこともできない。  
「お……ん、ご、ごきゅつ、ごきゅつ、ごきゅう……  
うぶえつ、うぶええええ」  
ペニスを啜え、嘔吐えずしながらも白濁液を飲み干す  
ことしかできなかった。  
「うえつ、げぼつ、ハアツハアツハア……」  
飲み終えたところでようやく肉棒は引き抜かれる。  
「こ、今度は僕だあつ!」  
「ぶぶっ! むちゅうつ!」  
間髪いれず口腔に肉棒が突き込まれた。  
「お、俺も我慢できない」  
しかも、今度は一本だけではない。もう一人残さ  
れた男子が声を上げ、肉棒を突き込まれている口腔  
に無理矢理ペニスを突き込んだ。  
「んぶっ! ぶううう!」  
(む、むっつ!! に、二本なんて、ぜ、絶対無理い)  
二本の肉棒が同時に口腔を犯す。  
「おっ、むぼつ。や、やめつで、こ、こんらのため  
え……。ふうっふあああ」  
肉棒を啜えたまま、必死に許しを請うた。  
「うあ、き、気持ちいい」

「ああ、最高。これがフェラなんだあ」  
懇願は耳に届かない。少年達は容赦なく腰を振り、  
容赦なく口腔に肉液を流し込んできた。

「ぶっ! んびよおっ!!」

二本同時射精。当然その分量は多くなる。ブクツ  
と内側から頬が膨らみ、逆流した白濁液が鼻の穴か  
らビュブツと噴き出した。

「見ろよこれ。鼻提灯できてるぞ」

無様な顔を晒してしまふ。

「さあ、まだまだだぞ」

それでもなお終わらない。

本能に支配された男子生徒達が、ヒツギの口腔を  
犯した。

「だ、だひて、は、はやくだひてえ」

増幅していく便意。それに耐えながら肉棒を啜え  
つつ、射精を懇願する。

「そんなにザーメン飲みたいの? 流石にどん引き  
するつての」

「見ろよあの必死なフェラ。こんな姿学校の連中が  
見たらどん引きだぜ」

ジュツジュツポと首を振り、肉棒に奉仕する様を  
嘲笑される。

(違う。これは違うの。仕方ないから。こうするし  
かないから……)

だが、言い分けている暇もない。

「た、たるむ。おねがいから、はやく――んちゅ  
ぼつ、ちゅぼお……。ら、らひて、しえーえきらひ  
てえ」

無様に懇願することしかできなかった。

「あ、ぶへつ、うぶえええ」

十数人の肉棒を射精させた頃には、ヒツギの顔は  
ザーメンでパツクされたみたいにくちやぐちやにな

っていた。

顔だけじゃない。頭にも多量の精液がかかっている。美しい髪が精液に塗れ、べったりと顔に張り付いていた。

「こ、これつで、い、いいんれしょ？ も、もう限界。限界なのお」

その状態で救いを求めるような視線を絹川に向ける。肛門はもう限界だった。

「いいよ。よ、よく頑張ったね。そ、それじゃあとイレに行こうか」

にっこり笑う絹川の顔が、天使の顔に見えた。

しかし——  
「だめ。で、でて、出て行って……。お、お願いだから出て行ってよお」

公園の公衆トイレ。和式便器に跨がったヒツギに、数十人の男子生徒達のきらぎらとした視線が向けられていた。

「で、出てけなんてひ、酷いことをいっちゃ駄目だよ。だ、男子のみんなにも見てもらおうね。ヒツギさんのぶつというんこそ」

「い、嫌よ。そ、そんなの絶対嫌あ。お、お願い。こ、これだけは……これだけは許して……」

駄々を捏ねる子供みたいに首を横に振る。  
「だゝめ。じゃあ行くよ」

「ひっ！」

パイプに手がかけられる。

「や、やめて……。お、お願いだから……。な、なんでもするから」

必死に懇願した。

これまで散々陵辱されてきた。凄まじい恥辱を何度も与えられてきた。生徒達の前で犯されたことだつてある。だが、必死に耐えてきた。世界を守る為だから……。

それでも、これだけは耐えられない。人前で排泄するなんてあつてはならない。

「お願い。ゆ、許して……。それだけはやめて……」

絶望に表情を歪めながら、必死に許しを請う。  
「いっぱい放りだしてねっ」

が——  
じゅぽつ、ぐじゅぽつ！

「ひっ！ おつ、だ、だつめ。で、でる。こ、これ——も、もう、が、我慢できない。で、出ちゃう！う、う、ち、う、ち出ちゃう。おつおつ、ほおおおおつ！！」

容赦なくパイプは引き抜かれてしまった。クパツと肛門が口を開く。必死に括約筋に力を込めようとした。

しかし、もう抑えられない。限界だった。

「で、でつりゆ。でりゆのおつ！！ う、ちでりゆう」

ぶびっ！ ぶびびびっ！！ ぶびやああああつ！  
下品な音と共に、汚物が肉穴から排泄された。

「うわっ！ すげ、マジで出した」

「最低だなおい」

「生徒会長が一番風紀違反かよ」

男子の声が耳に届く。  
「み、見ないで！ 見ないでえつ！！ と、止まらない。うんち止まらない！！」

必死に排泄を中断しようとするが、肛門を閉じることができない。我慢に我慢を重ねたものを放出する圧倒的解放感が、全身を包み込んでいく。

「だつめ、ほおおおお！！ こ、こんなのさ、最低なのに、わ、私、わだち、い、いぎゆつ、いぎゆのつ！ いっぢやうのお」

それが性感に変わり、肉体を包み込む。快感を抑えることができなかつた。トイレ中に響く嬌声を上げながら、ビクンビクンと肢体を痙攣させる。  
じよばつ、じよぼろろ。

「おしっこ……おしっこまで出ちゃつてるう」  
小便すら漏らしながら、性感に身を震わせた。

「あは……あへあああ……」  
だらしなく表情を蕩かせる。

「変態だよ。マジもんの変態……」

「こんな姿学校の連中が知つたら、一体どんな反応するかな？」

この姿を見てゲラゲラ男子達が笑つた。  
「だ、だつめ。いわないでえ。お、お願いだからあ。そ、それだけはやめてえ」

必死に懇願する。  
「や、やめてえなんて、ここ、言葉で言うだけじゃ駄目だよ。ちやくんと誠意を見せないと」

「せ、誠意？」  
それは一体何だろうか？

「勿論き、決まつてるよ。み、みんなにその身体を抱かせるんだ。男子生徒に頼むにはそれが一番だよ」

「だ、抱かせるつて……」

視線を男子達に向ける。彼らの股間部はズボンの上からでもはつきり分かるくらいに勃起していた。先程口奉仕した時以上に膨張している様な気がする。

その光景だけで、ジュンツと下腹部が勝手に疼くのを感じた。

「む、無理よ。ぜ、絶対無理」

だからといって彼らとセックスなんて——  
「無理じゃない。だ、だつてやるしかないんだから。わ、分かるよね？」

やらなければエネルギー補充は完了しない。攫われた人々も見つからない——視線がそう告げてきていた。

選択肢などはじめから存在しない。

（仕方ない。仕方ないのよ。悪くない。私は悪くない。こうするしか……こうするしかないの……）  
きつと母もこんな苦しみを耐えてきたのだ。自分

だけが逃げるわけにはいかない。

(いいんだよね。これでいいのよね母さん……)

聖換天使となつてから、一体何度したか分からない問いをもう一度心の中で母に向けながら、和式便器に跨がった状態で腰を上げた。

男子生徒達の方は見えない。ただ手を伸ばし、クパツと花弁を広げる。

「き、今日のはまだ、黙っていて……。か、代わりに……私を好きにしていから……」

絞り出した声は、今にも消え入りそうだった。

「まさか生徒会長とやれる日が来るなんてなあ。感無量だよ。じ、じゃあいくぞ」

一人の生徒が肉先を膣口に密着させてくる。

(なんでもない。これくらいなんでもない。や、やらなくちゃいけないからやるだけ。それだけ……。ただそれだけのことよ!)

必死に自分に言い聞かせる。

じゅぐつ、ぐじゅぶうつ!

「んっあつ! あつ、あつあつ! は、挿入って。挿入って来た。んんんん」

トイレの個室内、一人の生徒と後背位で結合する。和式の便所。壁に手を当て、身体を支えながら立ち

バックで繋がりが合う。プリンツと張りのある尻が、ズンツと腰を打ち付けられた途端、弾けるように震えた。乳房も大きく揺れる。

「スゲー尻が震えてる」

「お、おっぱいぶるんぶるんだ。早くやりてえ!」

トイレの外に集まった男子達が股間を押さえた。膣中に肉棒の熱気が広がる。蜜壺がペニスによって拡張されていた。

(挿入ってる。本当にせ、セックスしちゃうてる。み、みんなに見られながらセックス……)

膣奥まで肉棒は達する。

(い、いやっ。こ、こんなの……いやああああ)

すぐにもこの場を逃げ出したいくらいの絶望を覚えた。

「ああ、最高。ねえ、気持ちいい? 生徒会長も気持ちいい!」

うっとり瞳を細めながら問いかけてくる。

(き、気持ちいいはずないじゃない)

ヒツギは無言でこれに答えようとした。

「駄目だよヒツギたん。ちゃーんと、みんなを、いい気分らせてあげないとね。ウエヒビ。でないと、あ、後でばらされちゃうかもよ」

だがそれは許されない。

「……き、気持ちいいわ」

屈辱に打ち震えながら、男子生徒の言葉に答えた。

「そ、そっか、気持ちいいか。じ、じゃあもつと気持ちよくしてやるよ!」

歓喜の表情を浮かべると共に、腰を振り始める。

どじゅつどじゅつどじゅつどじゅつ!

「んっく! あつあつあつ。お、奥まで届く。き、気持ちいい。い、いいの!」

肉棒が激しく蜜壺を犯した。亀頭が膣壁を擦りあげる。そのたびに肉体が痺れるような刺激が走った。

激しく乳房が揺れる。汗が飛び散った。

(でも、この程度……本当は気持ちよくも何ともない。き、気持ちいいっていわなくちゃいけないから。そうでなかったら、こんなことで気持ちいいなんて絶対にいわない!!)

犯されながらも自身が口にした言葉を、自身の心で否定する。

膣中を蹂躪されながら、感じるなどあり得ない。気持ち悪いだけだと心の中で何度も言い聞かせ続けた。

「んっく! や、な、膣中? 膣中はいやあああああつ」

膣中に広がる白濁液の熱気。

「膣中射精し気持ちいい?」

「う、ふぐつ……うつうう……き、気持ちいい。はああはあ……す、すごく良かった」

問いかけに対し、心にもないことを答える。そう。気持ちよくななどない。快楽なんかこれっぽっちも感じてない。

(そうよ、私は感じない。感じないの……)

しかし表情は半ば湧けている。頬は紅潮し、半開きの口からは熱い吐息が漏れていた。自分自身でそれに気付くことはできない……。

「そっか、良かったか。でも、まだまだだよ」

「へ?」

射精を終えた肉棒。だというのに、まるで衰えない。それどころか、更に大きさを増しているようだった。

「じゃあいくぜ」

じゅぐつ!

「くひいいっ!」

ズンツと蜜壺を深く突かれる。

「あ、お、大きい。こ、これ凄い。すごくいいの。大きくて、私の膣中がペニスでいっぱいになる」

衰えることのない巨棒が蜜壺に沈み込む。簡単に子宮口に亀頭が届くほどに長い肉槍だった。挿入の圧力で愛液が結合部から溢れ出す。

「子宮まで犯してやるよ」

「子宮って……んあつ! は、挿入って、挿入ってくる!! わ、私の、い、一番奥まで、ペニスが挿入ってくる!!」



はつきりと肉棒の形が肉壁越しに認識できる。

「お、おおつきい。こ、こつれ——あ、お、おつく。わ、奥までと、どいてつる」

子宮壁が肉先に叩かれた。それだけで意識が飛びそうになるほどの刺激が走る。

「あつあつ、あへあああ」  
自然と蕩ける表情。まるで身体がペニスの一部にされてしまったかのような刺激だった。

「ウエヒヒヒ。きき、気持ちよさそうだねえ」

「き、きもひ、いい……」  
（違う。気持ちよくない。こ、こんなの嘘。本当のことなんか、ぜ、絶対に口にしない……）

蜜壺からは新たな愛液が溢れ出す。自然と肉壁が収縮し、ペニスを締め上げた。ドクンドクンという肉棒の脈動を感じる。

気持ちよくなどないはずなのに、ペニスを胎内に感じていると、それだけで全身が甘く震えた。

「じゃあもつと気持ちよくしてやる。だ、射精すぞ」  
ぶびゅつ！ どびゅるる！ どつびゅるる！！

熱液が放たれる。撃ち出された白濁液が、子宮を一瞬で満たしていった。

「あつ、ひつ！ い、イクツ！！ いくうつ！！」  
瞬間、目の前が真っ白になる。背中が反り返り、全身が激しく痙攣した。

（あ、ひへ……あ……。ち、違う。こ、これは、え、演技……演技なのよ……）

全身に心地よさが広がっていく。だが、これは快楽ではないと心の中で必死に否定した。

（わ、分かんない。も、もう分からな……。感じるなんて、嘘なのに、あり得ないのに……。分からない。自分が分からない）

男子生徒達は代わる代わるヒツギを犯す。もう何度膣中に精液を流し込まれたのか、数を数えること

すらできなくなっていた。

現在は二人の男が肢体を犯している。身体は抱き上げられ、一人は正面から膣を、一人はバックから尻を犯していた。

二本の肉棒が二つの肉穴を蹂躞する。

「あつ！ あへつ♡ い、いっく♡ いくの♡ おつ♡ おお♡ おお♡ イクツ！ いくうつ♡」

一突きごとに意識が飛びそうになる。膣奥、腸奥に肉先を叩き付けられるたび、肢体は愉悅に打ち震え、どうしようもないくらいに性感を感じていた。

プビュップビュッと愛液が飛ぶ。揺れるネクタイ。ニーソックスは白濁液に塗れていた。

（演技のは、はじゆなのに、き、きもひいい。いいの。おくちゆかれるのいいのお♡ どうして？ どうしてなのお？）

自分で自分が理解できない。

「ほら、欲しいか？ 膣中に欲しいか？」  
「だ、だひて♡ おつおつ、わ、私の、ひ、ひちゅぎの膣中にセーシ射精してえ♡」

（欲しくない。でも、欲しい。どうして欲しがっちゃうの？ ああ、欲しいの。精液欲しいのお）

下腹部が牡を求める。犯してくれと懇願していた。「たっぷりくれてやる。変態女を孕ませてやる」

「尻の中にもたっぷり流し込んでやるからな！」  
ばんっばんっばんっばんっ！

これまで以上に激しく腰が振られた。そして——  
ぶびゅばつ！ どびゅつ！！ ぶびゅううう！

「き、きた♡ ま、マコと穴マコにきたあ♡ い、イクツ♡ イクイクイク、イクううう♡」

流し込まれる白濁液により、肉体は絶頂にまで上り詰めていく。じよばつ、じよぼろろつと小便まで漏らしながら、ヒツギは愉悅に溺れた。

（気持ちいい。気持ちいいのお♡）  
心まで快楽に溺れていく……。

「あへああああ♡ ば、パンパン。ひちゅぎのマンコ、せ、セーキでパンパンらのお♡」

すべての男達に犯されたヒツギの背中では、和式便所にずっぽり嵌まっていた。

白濁液塗れの身体。表情は愉悅に蕩けている。そんなヒツギに男子生徒達が肉先を向けてくる。

「すつかり汚くなっちゃったなあ。仕方ない、綺麗にしてやるよ」

「シャワーの時間だよ」  
じよばつ、ぶじよろろおつ！

言葉と共に黄金水が放たれた。男達の小便がヒツギの身体を打つ。  
「んべつ！ あ、お、おじつこ、おじつこシャワー。臭い。臭いの——い、いやだ。嫌だ。イキたくない。こんなことでイキたくないのいい♡」

汚水に肌を打たれる感覚が性感に変わる。聖換天使は「あへえ」と表情を崩しながら、再び達した。

じよぼろろつ！

「お、おしつこ。わ、私……おしつこかけられながら、お、おしつこしちやつてる。はへ、はへえええ。最低。私……最低だあ……。汚れちゃった。汚れちゃったよ母さん……」

まさに便女そのものだった。

\*  
「ウエヒヒ。い、いい知らせだよヒツギたん」

それからどれだけの時間が過ぎたのだろうか？  
男子生徒達が消えてなお、便器に嵌まったままだったヒツギに絹川が声をかけてくる。

「さ、攫われた人達と……ま、マザーの行方がわかったんだ」

「しよ、しようならあ……」  
精液と小便でバリバリになった前髪を額に張り付けながら、まるで他人事みたいに頷いた。

姉弟は、二人の絆を守るため、  
禁忌を犯す——！

Kissing for my stray dog with everlasting promise.

# 捨て犬少女に 誓いのキスを

第二話 Two of us

小説 / あいえだなお  
NOVEL 愛枝直

挿絵 / A.S. ヘルメス  
ILLUSTRATION

破れた窓から風が流れ込む。ひっくり返ったソファに散らばったガラス片が一つ、滑り落ちた。

「姉さん、まずは病院へ行こう」

怒りも度を越せば頭をまっさらにして、やるべきことだけに目を向けさせるらしい。

高崎堅悟は真つ直ぐに姉の悠里の目を見て切り出した。受けた仕打ちが仕打ちだ。言い出しにくいことは確かだが、誰かが言わなければいけないことだ。気になることならいくらでもある。

姉に暴行を加えた白衣の女と青髪の娘は何者か。後者は特に、背中から粘体の触腕を生やし、人の範疇を踏み外していた。

鍵のことも気になる。夕暮れと夜を歩き来したあの現象は何だったのか。何の気なしに使い続けた家の鍵にどんな秘密があるというのか。

そして——姉のそばに立ち、彼女と俺の間でおろと目を泳がせる少女は何者だ。姉さんは親父がよこしたと言った。自分達を捨て失踪したあの男がこれから何をするべきか考えることも、そのための情報と知識も必要だ。しかし、それ以前に姉さんが無事でなければ全てのに意味がない。

「病院に行かなきゃならないのはけんごくんの方よ。もう立って平気なの？ 身体、痛くないの？」  
乱れた服を手早く整えた姉は、両手を突いて身を起こし、気遣わしげに問いかける。

「人の心配なんかしてる場合じゃ——いや、待て。何で俺は」

この期に及んで暢気なことをと、堅悟は早口で窘めようとした。だが、その台詞は半ばで途切れる。確かにおかしい。

あれほど全身を苛んでいた打撲痛も、視界を歪ませる脳震盪も、綺麗さっぱり消え果てている。姉さんの様子にも不自然な点がある。ほっそりとした首に掛かる重たげな枷のことも、

根元から染まりきったどこか蠱惑的な桃色の髪のこととも気がかりなのは当然として——。

それ以外の痕跡がごとくなくなっているのは、一体どういうことだ。胸元のボタンがはじけ飛んでいたワンピースはいつの間にか元通り。直視するのが躊躇われるほど肌を汚していた粘液もどこにも見当たらない。それどころかべしやべしやだった絨毯もいつの間にか朝見たままだ。

よくよく見れば家の中で壊れた物は、最後に割られた窓だけで、横転したソファも（ガラス片まみれで二度と使えないだろうが）破損してはいない。まるで——。

「あ、あのっ……ルームの中で起きたことは、なかつたことになるんです」

堅悟の思考に割り込むように、少女が口を開いた。舌つ足らずで高い、子供供した声。殺気だった堅悟は眉根を寄せた険しい瞳を向ける。

「なんだよそのルーム、つてのは。なかつたことに？ だつたらどうして姉さんの髪は戻らないっ」

少年は詰め寄って問いただす。少女は鬼気迫る様子に怯え、胸の前で腕をちぢこめてびくりと震えた。「堅悟くん？」

みつともなくまた八つ当たりする弟を、姉が一段深い声で窘める。今度は少年が顔を青くする番だつた。

「うっ……でも……」  
怒らせると後が怖いのは承知の上で、堅悟はなおも食ひ下がろうとする。

だが、間髪入れずまた叱られて、それ以上の抵抗を諦めた。

ふーっと大きく息をつく。少女にまた向き直る。「怒鳴って悪かった。姉さんのことが心配なんだ。知っていることがあるなら教えてくれないか」

「あつ謝らないで下さいっ」  
頭を下げた堅悟に、少女は恐縮しきりで顔の前で手を振った。

ぐつと胸が詰まる。自覚よりもだいたいぶ頭に血が上っていたことを悟った。

小さな手のひらは相変わらず火傷だらけの血まみれのまま。こんな傷を負っていないながら、自分達を庇い戦ってくれた人間に当たるのは、姉さんの言う通り最低の行いだ。

そもそも、泣いて怒鳴り散らしたいのは、姉さんのはずじゃないか。当の彼女に叱られるほど狼狽えてどうする。

「あのっ、それよりも——」  
やはりこの状況に心当たりはあるらしい。少女は焦った様子で何かを訴えようとする。しかし——。

「ふあ……？ つううううううんっ！♡」  
突然の嬌声が、その言葉を遮った。

「ね、姉さんっ？」  
「なっ、なんでもないのよ？ お、お姉ちゃんたらんっ……変な声出しちゃって、恥ずかしいわ」  
ぎよつとする弟に姉は引き撃った笑みで答える。

だが、彼女の異変はそんな態度でごまかせるような物ではなかつた。

垂れ目がちの優しい瞳が色つぼく潤み、頬は赤く染まる。荒い吐息を囁み潰そうと唇をきゅつと閉じるせいで、余計に艶めかしい鼻息がふつふつと漏れる。自らを掻き抱く腕に豊かな乳房がむっちり潰れては、胸郭の上下するたび震える様子は眩暈がするほど扇情的だ。

更には乱れたワンピースの裾から覗く肉感的な両脚がもじもじと擦り合わされている。堅悟の目は凶らすように擦り潰されたのを捕らえてしまった。苦しげというよりもこれは——。

清楚な姉が演じる生々しい媚態に狂おしい情動を掻き立てられ、居たたまれない罪悪感に困惑する。彼女を邪な目で見ることは、少年にとつて最大の禁忌であった。

そして同時に迷いが生じる。医者に掛かつて何と説明する？ バケモノに姉が犯されたので診察して下さいとでも？ それに——はたしてこれは、当たり前な手段で治るものなのか？ 姉さんを余計に傷つけるだけじゃないのか？

「やっぱり……」

「どうすればいい？」

何かを知っているらしい少女が深刻な表情で呟く。話を聞いてからでも遅くはないかもしれない。また声を荒らげそうになるのを必死で自重し、尋ねた。「え、えっと、お姉さんを寝かせられる部屋に連れて行って下さい。その、鍵を持って」

少女はまだ少しオドオドした様子ながら、はつきりと告げた。そして悠里の真横にしゃがみ込んで膝裏に火傷を負った手を差し込み——。

「ひゃっ！」

「ごめんなさい。その、服、汚れちゃいますけど」  
心底申し訳なさに謝りながら、軽々と姉さんを抱き上げた。

「まあ……力持ちさん……なのねえ」

間に悩ましげな吐息を漏らしながら、姉が軽口を叩く。心配させまいとしているのは見え見えだった。

「その扉から廊下に向かってくれ。階段がある。登って正面左側が姉さんの部屋だ」

「はっ、はいっ」

端的な指示に少女は頷き、いわゆるお姫様抱っこで悠里を運んでいく。見送った堅悟はバッグに向かう。前ポケットを漁り件の鍵を取り出した。

やはり何の変哲もない家鍵にしか見えない。だが、

首の鍵穴に、白衣の女が起こした不可思議と、二つの裏付けを否定する材料も今のところない。ポケットに突っ込んで後を追う。少女は姉を抱えたまま扉の前に立っていた。

「あの、鍵を挿してみて下さい。ノブのちよつと上のところでもいいです」

奇妙な指示に根掘り葉掘り問いただいたくなるが、堅悟はあえて無言で従う。大抵のことは聞いてやるよりやつて聞く方が早い。

取り出した鍵を適当な場所に押しつける。もちろん先端が金具に当たってそれでおしまになる——はずなのだが。

「うわっ！ なんだこれ！」

予想通り予想外のことが起きたと言うべきか。

別の扉を開閉するための鍵がずぶりと沈み込んだ。鍵を中心に周囲の戸板が波打つように揺らぐ。現実離れた光景は、今自分が異常の入口と向き合っているのだという事実を強く意識させた。

「右に二回廻して下さい……。ルームへの扉が開きます」

堅悟は帰宅時の違和感を思い出す。夜から夕にさかのぼった時も、確かに同じやり方で扉は開いた。微かに震える指で、その指示に従う。

ガチャ、ガチャリ——と。存在しないはずの錠前が開く音と感触。

生唾を飲み込み扉を開いた。

ライトグリーンで統一されたカーテンに寝具、木目調の本棚に整然と並んだ書籍。足下には毛足の長いカーペットが敷かれ、その真中に背の低い丸テーブルがちよこんと置かれている。

窓から差し込む月明かりだけで、どこに何があるか分かる、いつも通りの姉の部屋だった。一目で分かるような異常がないことに、少年は逆に困惑する。

「見た目は変わんないんです。でも、中では時間が進みませんし、その、いろんなことが出来るんです」  
視線を向けると少女が少し早口で説明をする。

姉は無言だった。少女の肩を締るように握り、顔を伏せている。表情はうかがえないが、荒い息が間断なく漏れる。だいぶ切羽詰まっている様子だった。お邪魔しますと律儀にことわり、少女は部屋に入つて姉をベッドに横たえた。堅悟もそれに続く。扉横のスイッチを入れるが、蛍光灯は点らなかつた。

悠里は離れる少女に縋りつこうとして、離し、両手で顔を覆つた。それでも落ち着かず、結局背を向けて横臥し、枕に顔を押しつけた。

自然まるやかな腰が上向いて突きだされる形になる。堅悟は慌てて目をそらした。

「それから？」

「えっと、えっと……その、私の髪、何色に見えますか？」

不埒な感情を引き剥がそうと、堅悟は少女に意識を向ける。返ってきたのは出し抜けな質問だった。

「オレンジ色……か？ それがどうした？」

「変だと、思いませんか？ ううん、変なはずなのに、変じゃないと思つてることが変なんだと思うんですけど、あのその……じょうずに説明できなくてごめんなさい」

訝しみながら答えた少年は、自身の言葉に混乱してパニックる少女の言わんとするところを咀嚼して、黙り込む。確かに言う通りだ。

髪色だけではない。

生白い腹部が丸見えな切り詰めた黒のトップスに白いマイクロミニのプリーツスカート。腰元やニーソックスの上端などの要所に、赤のスタッズ付きのベルトを巻き付け、肩からはマントを羽織っている。

そして——首元にはやはり首輪と南京錠。はつきり言つて街中で見かけたなら迷わず目をそらして見な

かったことにするような、コスプレじみた格好だ。

思い出してみればコーカソイドらしき白衣の女はともかく、従う少女も鮮やかな水色というあり得ない髪色をしていた。疑問に思わなかったことが不思議なぐらいだ。違和感がないことは、逆におかしい。「共通点」ってことか？ 姉さんと、お前と。あとは……あの青髪も」

「はっ、はいっ。鍵を持ってないと分かんないんです。その、私達が普通の人間じゃないって」

僅かに迷って、少女は決定的な言葉を口にした。どくんと心臓が鳴る。「達」と言った以上、それは姉さんも含まれる。

「だったら……何だ。普通の人間じゃないなら」

「スレイブって、呼ばれてました。鍵を廻したマスターに従う、その……奴隷だって」

生唾を飲み込み、問う。母親に悪戯を告白する子供のよう、少女は不穏な言葉を絞り出した。

「姉さんが……あの女の……奴隷？」

説明に現状を代入すれば、そういうことになる。堅悟は呆然と呟いた。

荒唐無稽でとても信じられないし、信じたくもない。だが、堅悟はその半生の経験から、不都合にこそより真実味を見いだす思考の癖があった。

「そのスレイブってのは普通の人間とどう違う？ 姉さんが、その……『苦しそう』にしているのどう関係があるんだ」

「あの……お姉さんの首に、鍵穴を見たことがありますか？ それが、スレイブになれる人、適合者のめじるしなんです。適合者に、今みたいなの、ルムの中で、その、儀式をして鍵を廻すと、鍵の力が与えられるんです。髪の色が変わって……鍵付きの首輪が掛けられます」

少女の言う「儀式」を、確かに見た。わざわざ名を明かした白衣の女が、姉さんに忠誠を誓わせ首に

鍵を差し込んだ光景を。

「続けてくれ」

「はいっ、えと、スレイブには、さつき私が使ったハンマーとか、それを振り回すための力とか……普通の人にはない力が備わるんです。その代わり、鍵を廻した人——『マスター』から鍵の力をもらわないと、弱って死んじゃうんです」

要するに、姉さんの症状はその「スレイブ」にされてそのまま放り捨てられたせいと言うことか。

「元に戻す方法はないのか？」

少女の言葉に沿うなら、姉を落着かせる方法はあのジェイミーとやらにならなかの方法で「補給」をさせることになる。

まるで論外だ。あんな輩、もう二度と接触させるわけにはいかない。

だが——少女は顔を伏せて首を横に振った。重苦しい沈黙が降りる。喘ぎ混じりの荒い吐息と身悶えに鳴る衣擦れがベッドからことさらに響く。

「でも……一つだけ。お姉さんを、ジェイミーさんの物じゃなくすることなら出来ます」

焦慮を煽る静寂の後、少女は再び顔を上げ躊躇いがちに切り出した。

(……?)

「その方法は？」

台詞廻しに僅かな引っかけかりを覚えるが、あえて掘り下げず先を促す。

少女はやはり黙り込んでさんざん迷った末——

「堅悟さんの、鍵……それを使って、その、契約し直せば……マスターを変えることは出来ます」

酷く受け入れがたい提案を口にした。

「姉さんにもう一度同じ目に遭ってというのか！」

たまらず怒鳴り声を上げた。少女はヒツと息をのむ。

そんな真似が出来ないわけがない。時間を無駄にした。四の五の言わず病院に連れていけばよかった。

「けんごくん、おんなのこを、どなつちやダメ」

激昂する弟を、顔を上げた姉が再び窘めた。

「姉さん！ そんなこと言ってる場合じゃ……！」

「あのね、お姉ちゃんも聞いてたわ。ニコちゃんの話してくれたこと。ジェイミーさんも、同じこと、言ってたわ」

夜間にも目が慣れだし、月に照らされてその表情が浮かび上がる。姉は切れ切れに言葉を詰まらせながらも微笑んでいた。まるで「大丈夫よ」と言葉にする代わりのように。

堅悟はいっそ泣きそうになる。

どうしてこの人は、こんなにも強いのか。白衣の女とこの少女。立ち位置の違う二人がばらばらに述べた内容が一致することの意味は重い。

そもそも——誰よりも傷ついているのは姉さんのはずなのに。口にするのも憚られるような下劣なやり口で、尊厳を踏みじられた直後だというのに。

なぜ彼女は笑っていられる？ 心配をかけまいと、気丈に振る舞える？

「ニコちゃん、教えて？ わたし、このままだと、どうなっちゃうのかしら」

「……飢餓反応が出たら、もう……あんまり余裕はないです。私達、死んじゃうと、消えて首輪だけ残るんです」

黙り込んだ堅悟に代わり、悠里が対話を引き継ぐ。

「お医者様に、治して貰えるかしら……？」

重ねての問いに、少女は無言でふるふると首を横に振る。

「信じて下さいっ！ 私、変な子だって、怪しいって、分かってます！ でも、お願いされたんです！ マスターから、二人を守れっ！」

そして、泣き出す寸前の震える声で、彼女も感情

を爆発させた。

「信じるわ。だってお姉ちゃん、こんなちよつとの間でも、ニコちゃんがとつてもいい子なの、よおく分かったもの」

結局のところ、スレイブなどという訳の分からないものになつても、髪の色が変わつても、高崎悠里はあくまで高崎悠里であつた。

彼女はあの叫びすら笑顔で受け止め――。

「ねえ、けんごくん。お姉ちゃん、誰かのモノになるなら、けんごくんのモノがいいわ」

悲痛に顔を歪める堅悟を、優しい瞳で見上げた。

☆

「……契約の条件つていうのを、確認させてくれ」  
長い沈黙の後、弟は身体の横で拳を震わせながら少女に聞いた。

「ふえ!? えつと、あの……ま、マスターになる人ですわね! ですから、その……あ、あ、あ、愛して貰つてですわね!」

「名前を呼んで、貴方のモノに、なるつて誓つて……鍵を廻して貰うのよね……?」

しがらせて、困らせちゃ。ダメじゃない。女の子を恥ずかず少女の言う、スレイブ<sup>スレイブ</sup>になつた影響なのか、どうすればいいのかが、何となく分かつた。

それで正解だつたようで、彼女はコクコクと可愛らしく頷く。逆に、弟は身を固くした。

「来て――?」  
悠里は両手を差し伸べ弟を見上げる。

悪いお姉ちゃんだと思ふ。辛い決断を強いている。いつも大事にして貰つているという実感があつた。

だからもちろん、どんな意味で、どれぐらい彼が想つていてくれるのか、考えたこともある。

こんなことでもなければ、お互い巧く目をそらしていられた危うい感情に、向き合わないといけない。

それでも――悠里はまだ生きていたかつた。誰よりも大事で、誰よりも大好きなけんごくと。自分勝手は百も承知だ。だからこそ。いつものように微笑んでみせる。せめて心は繋がつていたら、二人確かに言えるように。

「……ッ!」

顔を伏せて歯を食いしばり、荒い足音を鳴らして弟がそばに来る。肩の横に両手を突き、真剣な表情で悠里を見下ろす。

「そうするしかないとか、仕方ないとかじゃない――俺が、姉さんを好きだから。俺が、姉さん自分のモノにしたいから。……姉さんのこと、抱くよ」

告げられた言葉はまるで自分の想いの映し鏡でしか、びつくりするほど、男の子<sup>おれこ</sup>。していて――。

「はい♡ 不束者ですが、よろしくお願ひします」  
こみ上げる熱いもので胸がいつぱいになりながら、涙声で返事して、伸ばした腕をきゅつと絡めた。

☆

心臓が早鐘を打つ。堪えようもなく手が震える。静まれ、静まれ、静まれ。何度も心の中で繰り返し降つてわいた軋機に堅悟は早くも一杯一杯だつた。

うなじを包んだ細指の柔らかさ。間近に迫つた唇から温かな吐息が漏れて当たる。それは夢のような感触で――だからこそ疑問と不安が頭を巡る。

本当にこうするほかないのだろうか。異常な体験と欲望に流されて、自分を見失つただけじゃないのだろうか。いやそれを承知で啖呵を切つたんだらうが今更日和るな覚悟を決める!

よほど情けない顔をしていたのか、そんな堅悟を見て姉はくすりと笑つた。そして、ゆつくりと目を閉じ、くつと顎を持ち上げた。

ドクンと。鼓動が一際高鳴る。

色つぼく半開きの唇に視線が吸い付けられる。まるで魔法で操られるように堅悟は顔を寄せる。二人の唇が音もなく重なり――禁忌が一つ踏み越えられた。

思考も触覚もぶつとんだ。何が何だか分からないうちに息が続かなくなつて顔を上げる。それがもどかしくて息を継ぎ足すと、すぐまた唇を合わせる。

ちゅく――と。甘やかな水音が口蓋を伝つて耳朶に届いた。途絶えた五感を手練り寄せるように、ちゅ、ちゅくと唇を鳴らす。

「んっ……ふ……」

姉がぐぐもつた吐息を漏らす。鼻の下をさわさわとくすぐられて口元の知覚神経がにわかに蘇る。唇はふつくと艶めく見目そのままに、柔らかくて、滑らかで、何より温かかつた。意識した瞬間びんと痺れるようなパルスが一気に押し寄せて、頭の芯が熱く茹だつた。

たまらずにまた顔を離す。すん、と鼻を吸る。どうして涙が零れそうになっているのか、自分でも分からない。姉さんが目蓋を開けると、彼女の瞳も月明かりを湛えて潤んでいた。それを見てまた泣きそうになつた。

「姉さん……好きだ」  
「うん……」

「本当に……本当に大好きなんだ」  
胸が痛いほど締め付けられて、その言葉は押し出された。何度伝えても足りないと思えた。

姉さんは無言で絡めた細い腕にぐつと力を入れる。(うっ、うわ、うわっ)

堅悟の上半は悠里の上にはぶふんと倒れた。顔の下半分が、柔らかな乳房に抱き留められて沈み込む。甘やかな香りが鼻腔いつぱいに満ちる。

とくとくと速く鳴る鼓動が伝わる。何もかも忘れて頬摺りしそうになるほどの心地良さに固まつていと、片方の手が後頭部に当てられた。

「お姉ちゃんも、大好きよ。けんごくんのこと、だあい好き」

あやすように髪を撫でながら、囁く。  
いつもならすぐに振りほどいて、許されない感情を握って潰して殺すのに。

理性のよりどころを求めてこの場に在るもう一人を探し、少年は視線を彷徨わせるが――。  
「ニコ」は、正座で壁の方を向いていた。行儀良く、背筋をピンと伸ばして。

見ていない。そう思うともう体裁を繕う余裕もなくなる。甘えるように姉の胸に顔を押しつけて縋る。下腹に痛いほど血が流れ込んでいくのを自覚した。

☆

二人何度もキスを重ねて、一緒に裸になる。

さすがに踏ん切りが付かないのか、彼は下着を残し躊躇っていた。その中ほどがばつんと膨らんでいる。

何よりも雄弁な興奮の印に、胸がきゅうと疼く。

「ダメダメ♡ おねえちゃんにも見せて？」

「ちよ、ちよと姉さん!!」

気付いた時には酷くはしたない台詞を口にして、彼の代わりに下着を引き摺る下ろしていた。

ゴムに引っかけられたシャツがたわみ、限界を超えた瞬間ビタン! と雄々しく腹筋を叩く。

「まあ……♡」

カチコチにそそり立った直線的な幹。先端だけが力強く反り返り、大きく張り出して逸り脈打つ。

早熟な若竿に熱い視線を送り悠里はうっとり溜め息を漏らす。狼狽えながらも隠さずにいる律儀さが、可笑しくて、可愛かった。

少年は覚悟を決めて下着を脚から抜き取り、脱ぎ散らした服をベッドの脇に落とす。

鍵が、シーツの上に置かれた。

真剣な瞳が、また悠里を真正面から見つめた。

「触って……♡?」

彼の両手が、近づくと。指が長くて大きな手が、そつと胸を包む。

「ふ……うん……っ」

じいんと幸せが胸肌にも染みこんだ。ふに、ふにと力が込められるたび、自分でも不思議なほど強い快美が生まれる。

下乳に潜り込んだ親指が付け根を持ち上げ、四指の先が沈んで顔を出す。鼻腔の奥から甘えた吐息が漏れて止められない。

こんなにも気持ちがいいのは、きつと彼の触れ方がとても優しいからだ。

微かに震える指は、ガラス細工を扱うように肌をさする。逸るようにむっちり肉果をたわめても、すぐさま抑制を取り戻して柔らかいタッチに戻る。

無言だった。真つ直ぐに口を引き結んで、ぎんぎらと目が開いている。興奮しきりの表情と、慎重な手つきの落差に、悠里はたまらなく嬉しくなる。

「もつとつよくても、だいじょうぶ……よ?」

だからこれは、自然なことなのだ。彼にもつと愛して欲しいと思うことは。

小さく頷いた後、彼は指先にぐつと力をこめる。爪が隠れるほど沈み込んで、ぞくんと胸の芯にきつい痺れが走った。

「ふあ、あああん!♡」

「ご、ごめん!」

「やめちやダメえつ。ねえもつとお、お願い……♡」  
痛がったと勘違いしたのか、弟は慌てて乳房を放そうとする。咄嗟に手首を掴んで止め、きわどいおねだりで誘惑する。

罪の意識を、感じて欲しくなかった。

優しい子なのは本人よりも知っている。だから悠里は何度でもシグナルを送る。あの人達にされたこ

とと、今けんごくんがしている事は、正反対なのよと。

それからはもう、彼もわたしも止まらなかつた。

「はう、んっ……ふ、あああんっ……ああ♡」

ぐに、むにいと、一転激しく肉果が捏ねられる。赤く痕が付くほど搾って伸ばされては、強く押しつけた手のひらで廻し揉まれる。

痛くはなかつた。それどころか強烈すぎる淫らな悦びに、えつちな声が止められない。

「あううん♡ はっ、あんっ、あああん♡ もつとお……♡ もつとおねえちゃんのおっぱいもみもみしてえ♡」

はしたない喘ぎ声に、弟の手つきはエスカレートしていく。分厚い脂肪を潰しきって親指と中指を合わせようと、みっちりきつく握り込む。

ふつ、ふつと荒い鼻息が聞こえた。夢中になっている。楽しんでる。にわかに悦びが膨れ、煽られる柔肌の痺れと共振して高く悠里を舞い上がらせる。

無意識のうちに膝が持ち上がる。悩ましく腰がぐねり内腿を擦り合わせてしまう。

過敏なほどのリアクションは少年の欲望を煽り立てて。

「ふああつ! あんっ♡ さきつぽダメよおつ♡」  
その指先を、たわわな果実に比して慎ましやかな、桜色の突起に導いた。

「クリ、クリと、弟の指先が乳頭を転がす。皮下に溜まっていた血が一気に結実し、びいんと硬く痛つてそそり立つ。」

「痛かつた……?」  
手の動きは止めないままで、見下ろす弟がどこか

甘えた声で尋ねる。

「痛くは、あああんでもダメダメ、ダメよお♡ おねえちゃん気持ちよくてヘンになっちゃう♡」  
桃色に染まった髪を振り立てて悠里は身悶える。

「気持ち、いいんだ。もっと気持ちよくなつてよ」  
何か振り切れた様子の弟は、ふにやりと楽しげに  
笑った。

(その顔、反則よお♡)  
普段なかなか見せないような無防備な笑顔に、き  
ゆうんと母性本能まで刺激される。

強すぎる悦びに切羽詰まって、嬌声はトーンが高  
くなる。彼がねりねりと先端を転がすたび、ひんひ  
んとふしだらを晒してしまふ。

「もうっ、おっぱいばかり虐めて……んっ……  
けんごくんのあまえんぼさん♡」

あまりに幸せすぎるせいで、ついつい口が滑って  
しまふ。いじわるを受けて弟ははたと手を止め、目  
をまん丸にして慌てた。

「い、いや、これは、その、俺、初めてで、だから」  
きつと耳まで真っ赤になっている。しどろもどろ

で釈明するのが可愛くて、悠里はまた大胆になる。  
彼の手を、一つ取る。お腹に置かせて、すつと少  
しだけ下に滑らせた。

「ねえ……もつとすこいところ……触ってみたく  
なあい?♡」

艶然と微笑みかけて上目遣いで見上げる。生唾を  
飲み込んで喉仏が上下するのを、悠里ははつきりと  
確かめた。

☆

興奮しすぎて、眩暈がする。心臓はバクバクと鳴  
り続け、過剰に血が集まった陰部が痛い。

すべすべの下腹を一つ撫でる。ただそれだけで、  
ヒクンと腹筋が跳ねた。

もつと感じさせたい。この美しい人の淫らな声が  
聞きたい。悶える顔が見たい。堅悟はさわりと桜色  
の茂みを指先でなぞり――

「ひあ……ああああああんっ!」  
くちやり、と。秘密の園に手のひらをかぶせた。

「はああ……あつ、あんッ♡」  
そこはすでにしつとりと――いや、ぐつしよりと  
濡れていた。

にぎ、にぎと水音が聞こえる。少年の手は動いて  
いない。愛液を吐き出す牝肉の層が、ひとりでにぎ  
にぐにと蠢いているのだ。

生きた貝の身のような粘膜が、指の腹に絡みつい  
て肉汁を塗しつける。時折器官全体がわなないて、  
そのたび姉が押し殺した喘ぎを漏らす。

生々しすぎるほどの触感に、興奮はいや増す。堅  
悟は掌を押し込んで秘園全体を一つ撫でる。

「あうらん♡」  
姉さんが、悶える。肉の花弁が割り開かれて、溜  
め込まれた蜜がぶじゆりとしぶいた。むわりと蒸れ  
た牝の匂いが立ちこめ、理性に霞を掛ける。

夢中で触り心地を確かめていく。  
外縁にはぶにゅぶにゅと柔らかな脂肪の丘。押し  
潰して指を中心に寄せると浅く溝を隔てて立体物が  
そびえる。挟み潰されせり上がった髪の毛をつらつ  
となぞる。左右対称で合わさる弧の城壁をくちゆり  
くちゆりと撫でさする。

皺の寄った薄い皮膚は指先で摘めて、内と外で感  
触が違う。より少年の興味をひいたのは、内側にあ  
るむっちりとした滑らかな粘膜だった。

源泉に近いせいか、奥園はよりぬかるみか強い。  
指を上下に動かせばぬるぬると滑った。お尻の側に  
進めば内側に落ち窪む洞窟の入口。慌ててお腹の側  
に戻ると、軽く縁石にぶつかり――

(これって……)  
痲りを、軽くつつく。

「ひいいん♡」  
姉さんが、鳴いた。総身がびくんと跳ねて柔肌が  
震える。大袈裟なほどの反応だった。

もう一度見たくて聞きたくて、またボタンを押す。

「ひんっ♡ あつ♡ あんっ♡ ああん♡」  
つんつんとつくたび、あのおつとりと優しい姉  
が身も世もなく悶えよがる。惱殺的な光景に理性は  
焼き切れ、動物的な牡の嗜虐に思考が乗っ取られる。  
堅悟はたつぷりと牝汁に濡れた指で、触覚だけを  
頼りに極小の弱点を虐めだした。

途端むつちりと肉感的な肢体がビクン、ビクン!  
と痙攣する。姉は眉根を寄せて歯を食いしばり、た  
おやかな手できつくシーツを掴んだ。

「あひっ♡ ひい♡ ひい♡ ひい♡ ひい♡」  
苦しげにも見えるのに、両足はだらしなくがに股  
に開いていく。生白い内腿が垣間見える。量感たつ  
ぷりの柔肌がふるふると揺れる。

際限のない好奇心に突き動かされ、堅悟は指先を  
小豆に密着させてすりすりと擦りだす。

「ひっ?! ひいひいひいひい♡ ひい――」  
姉は顔を反らし、か細く笛の音のような悲鳴を上  
げた。シーツから今度は手が離れて腋の横に縮めら  
れる。わなわなと指先をたわめて震わせる様が酷く  
卑猥だ。

「あひっ♡ らめっ♡ らめよらめなのおっ♡」  
「どうして? 気持ちいいんでしょ? もつと気持  
ちよくなつてよ……」

魅惑の痴態に堅悟は目的を見失っていた。呂律の  
回らぬ抗議を一蹴すると、いっそ無邪気に続行を宣  
言して、容赦なく陰核への愛撫を続ける。

「いっちやうからあつ……♡ これいじよおはおね  
えちゃんいっちやうわよおおっ♡」

「いよ……姉さんのイクとこ、俺に見せて」  
姉はいよいよと首を振り立て、しまいには枕に顔  
を押しつけぶるぶると震えだした。

もう少しで、仕留められる。サディスティックな  
昂揚に駆られ、とどめを刺そうとする。しかし――

「おねがい……指じゃいやあよお……けんごくんの……けんごくんのがほしいのお……」

押し殺した涙声に、危ういところで正気を取り戻す。脇に置かれた鍵が、存在を強く主張していた。

☆

欲しい、欲しい、欲しい。その一言で頭がいっぱいになる。

ただ——けんごくんの全てが欲しい。

はしたなく開いた脚を更に割り広げ、股ぐらに彼が腰をすえる。そそり立つ先端が自分の茂みの奥からひよこんと顔を出して見えた。

「……挿れるよ」

声を出せば卑猥な単語を使ってしまうような気がして、こくこくと無言で頷いた。

また少し、彼が近づく。

お尻の裏に内腿が当たる。筋肉質で熱い感触に、ぞわりと痺れるような期待が肌を駆け渡る。

カチカチのおちんちんを、彼がレバーのようにぐっと倒した。虐められてぐっしょりと濡れそぼった女の口に、くちゅんと真っ赤になった傘が当たる。

「きて……?」

我慢できずに掠れた声で誘いかけてしまう。

けんごくんはこくと頷き——。

「あつ……はああああああああんっ!♡」

ずぶずぶとわたしの中に入ってきた。

繋がってしまった。弟と、繋がってしまった。

禁断の悦びが弾けて、身体中を駆け巡る。お腹の奥がきゅうんと力んで中のお肉が彼のモノに甘えて縋る。また気持ちよさが増して全身を循環する。

両足が突っ張ってぶるぶると震える。かと思えば腰がひとりりでにせり出してがくがくと前後し始める。落ち着きなく悶えるのが恥ずかしくて彼に脚を絡めた。すると踵で腰裏を押し込んでしまう。中のモノ

がぐつと奥まで嵌まり込んで——気付いた時にはぶ

じゅりとなえつちなおつゆを噴き上げていた。

「う、うわっ!?!」

「……はひっ♡……ひっ♡……ひいんっ♡」

(い……挿れられただけで、イッチャったわ……)

けんごくんが驚いた声を上げるが、恥ずかしがる余裕さえなかった。強烈な波が去った後もピクンピクンと痙攣が治まらない。ほつぺたに両手を当てて小指で下唇をなぞり、ふしだらな吐息を漏らしながらぐねぐねと身悶える。

視界が歪むほどの淫楽に意識が混濁する。そして——恐怖の記憶が唐突にフラッシュバックした。

「あつ……いや……ああああああああつ……!」

引き攀れたような声が漏れた。視界がにじんで涙が零れる。胸が詰まって呼吸が止まる。嫌な寒気が身体を巡る。

抵抗も出来ずにイカされ続け、地獄のような快楽を味わわされた陵辱の体験がまざまざと蘇る。

油断していた。こんなにも心地いいのだから大丈夫だと思っていた。でもイヤだ。犯されるのはもうイヤだ。いつてもいつても終わって貰えず、玩具みたいに身体中弄ばれるのは。罵られて蔑まれて、恥ずかしい言葉を強要されるのは。

深い傷がまた開き、悠里の心は果てのない闇に堕ちかける。しかし——。

「姉さん、姉さん」

くしゃりと、変わり果てた色の髪を優しく撫でる手が、悠里を、今、に引き戻す。

泣き出しそうなほど心配げな顔で、けんごくんが自分を見つめていた。

「あつ……あつ……」

また一筋涙が零れる。今度は恐怖のせいじゃなく、心の底からの安堵によって。

「けんごくん……」

「うん……」

「けんごくん……けんごくんっ」

何度も名前を呼ぶ。誰に抱かれているのかを、自分に言い聞かせるように。

胸の奥に点つた光が、また身体を温めていく。手のひらを上に向ける。何も言わなくても、きゅつと指を重ねてくれた。

あの時とは、違う。わたしは、犯されてるんじゃない。彼に、愛されてるんだ。

「びっくりさせちゃったね……もう、だいじょうぶ」

「でも……!」

「塗り替えて。ぜんぶけんごくんの思い出に……」

「姉さん……!」

彼の身体が覆い被さる。繋いだ手がシートに縫い止められ、乳房に胸板の重みが掛かる。

唇が迫る。触れた瞬間から、お互い貪るように吸い合っていた。

「うんっ……ふうん……ぶあ……っはあん……すき……だいき……♡」

「んっ……俺も、姉さんのことが好きだ……!」

舌を絡め、唾液を混ぜ合わせ。愛を囁き。涙目で微笑みを交わし——。

「うれしい……んふうっ、だいきよ……♡ けんごくんが、だいきよ♡ ねえ……うごいて♡」

愛し合う。燃え上がる悦びに身をゆだねる。心と身体を溶けあわせる。

彼はこくと頷いた。埋めたオトコノコを抜ける寸前までそつと抜き、慎重にずりゆ、と打ち込む。

「あうううん!♡」

その優しい一撃で、また頭が真っ白になるほどの快感に襲われた。

「ッ! 痛かった……!?!」

危なっかしい痙攣と、嗚咽にそっくりな牝の声に、弟は顔を青くして動きを止める。

さつき泣いたのが、彼を怖がらせているのだ。

痛くない。大丈夫——きつとそれでは足りない。心配性の彼は無理してるんだと考えてしまう。

「うん、気持ちよかったの……♡ けんごくんの赤ちゃんで、突いたらうのが……とつても♡」  
だから——はしたないぐらいの強い言葉で、伝える。もつと動いて欲しいと。おねえちゃん、気持ちよくなつてと。

「……分かった。動くよ……？」

ほんの少し迷った様子を見せ、改めて宣言した彼が抽送を再開する。

ぐにゅ、ずちゅ、じゅぶと、遠慮がちに探るような動きで、女の穴が寛げられた。

「ふあああ♡ あっ……ひいん♡ 気持ちいい……きもちいい♡」

弟のモノに吸い付いた膈壁がめくり返され、淫らな悦びに全身がわななく。

触れ合った粘膜からどろどろに全身が湧けていくような淫楽。悲鳴のようなよがり声が止められない。代えるように何度も快感を訴えて、ダイジョウブのサインを送る。

恥ずかしいけどあの時みたいに辛くはない。むしろその言葉は自己暗示というスパイスになって、悠里を増感させた。

突き込みは少しづつ早くなる。ぐちゅ、ぐちゅと途切れがちな水音が、ぐつちゅぐつちゅと繋がって響き始める。それでも彼は、時折腰を止めて様子を見る。でもその位置は決まって一番深く、ペニスを埋めた状態で——。

「うああああんらめつらめえ！♡ あかちゃんのへやぐりぐりされたら、きもちよすぎておかしくなっちゃう♡」

本人の意図は別として、教度突いて奥を捏ねるやり方は、的確に牝の身体を追い詰めた。

彼に抱かれてすでに一度、その前には教えきれない

いほどの絶頂を覚えて敏感になった女体は、容易くアクメへの階段を登っていく。

「んっ……そっか、こういうのが気持ちいいんだ——そのうえ——ソフトな動きでも感じさせられることに味を占めたのか、また彼のいたずらつこな部分が顔を出し始めてしまった。腰がぐつと押し込まれぐりぐり8の字が描かれる。

「あっひいひいひいひい♡ ひいん、イク♡」

ひしやげ潰された子宮から、強烈な快美が一気に爆ぜた。

牝尻が淫狼に震えて膈壁は若竿にきゅうと甘える。彼の手を振りほどいてきつく背中に縋りつく。歯を食いしばってぶるぶると震え、二度目の絶頂に舞い上がった。

「ああイカされちゃったわ……♡ けんごくんにいじわるされて、おねえちゃんまた恥ずかしい顔させられちゃったわ♡」

腰裏が痺れてずうんと重たい。心地良い疲れに身をゆだね、重なり合った頬をすりすり擦り合わせて甘える。ぜえぜえと荒い息をつきながら、悠里は嬉しげに弟を詰った。しかし——。

「はひいひいん！♡」

こじゅん！ と強めのストロークを受けて、悠里は目を白黒させて悶絶することになった。

「あっ、あう……？ なあに……？」

「急に抱き付くから、見れなかったよ。その顔」  
余韻にまどろむ最中の急襲に、だらしなく内腿を震わせながら悠里は混乱する。

堅悟は肘で上体を支えほんの僅かスペースを作る。大きな両手がほっぺたを挟んだ。真正面に彼の顔。

どきどきと胸の鼓動が大きくなる。

「あっ……♡ らめよおこなかつこお……♡」  
「突くね？」

弟は無言を言わず短く告げると、宣言通りずしんと深い突き込みを放ってきた。

「あひい♡ ヒイ♡ ひいひい♡」  
力強い抽送が、二度、三度、四度と繰り返される。膈壁をこつんこつんとノックされるたび、気の遠くなるような愛憎がお腹で広がって全身を揺さぶる。どれだけいやらしい顔になっているかは、自分が一番分かっている。

口は半開きで閉じきれず、暑い盛りのわんちゃんのようにへへと息をつく。

繋がる小鼻はひくひくと蠢く。瞳はかすんで蕩け、時折白目を剥いてしまうほど。

それに——これだけ近ければ暗い中でもばれてしまう。もう肌は真っ赤に染まり、汗や涎でみっともなく汚れているのが。

何となく分かっていた。この子、Sつけが強い。優しくしようとして理性で抑えている本性が、限度を超えてセックスに夢中になると表に出てしまうのだ。

その証拠にいつもはきりりと凛々しい瞳が好奇心に爛々と輝き、まるでお気に入りのおモチャで遊ぶ小さな子供みたいになっている。じいつと観察されたまま、彼のモノで為す術もなく狂わされる。

反則だと思った。こんな可愛い顔をされたらもう逆らえない。

されるがままに虐められて、みつともない顔を晒すしかないじゃない——♡

「ああダメよおつ♡ おねえちゃんまたいつちゃうう……おねえちゃんいつちゃうわよおおつ♡」

「いつ……姉さんのイク顔見せてよ……？」  
視線の圧力が一段と増す。同時にさつきも狂わされた、膈壁を捏ねる腰文字をぐりぐりゆめと再現されて——。

「イ……イク♡ お■ん♡イク♡」

「イグうううううう♡」

「イグうううううう♡」



悠里の理性も千切れ飛ぶ。獸が唸るような声で、習い覚えたばかりのふしだらな台詞をまき散らしながら、身の碎けるようなアクメを極めた。

しゃにむに首を振りたくつて拘束をほどこうとするが、男の子の力で押さえ込まれてはどうすることも出来ない。

だらしなく舌を突きだし涎を垂らし、焦点のぶれた瞳を見開いたアクメ顔で悶え狂う。あられもない痴態をまじまじと観察されてしまう。

「あは……♡ 姉さんすごいエッチな顔してるよ」

「ハ……ハヒッ♡ ひ……ひどいわ……♡ けんごくくんがはじめからじゃない……♡」

最後の意地で詰つてみても、声がすっかり媚びきつている。女として最大級の恥を掻かされたというのに、頬が勝手に緩んでしまう。しょうがない子ねと許してしまう。

「ごめんね。でももつと見たい。姉さんの可愛い顔もつと見せて」

彼はますます調子に乗って、余韻が抜けずにきゅうきゅう縮まる、女の穴をまた掻き混ぜ始める。

密着した胸板で乳肌を押し潰しながら、腰だけを動かしてのピストン。彼の恥骨が下腹を叩き、ぱんぱんと肌を叩く音が鳴る。

狭くなつて感度の増した下のお口を、カチカチの逞しいお●●んでぐちゅぐちゅと突きほぐされる。気持ちよすぎて訳が分からなくなる。

「おおお……おほお♡ おお、おおんおぼえちやううん♡ けんごくくんがごしゅじんさまつて、おまんこおぼえちやうのおおお♡」

もう顔を隠すのは諦めて、彼の胸に腕を絡めて締めるときながら、イキつ放しの悦びに身をゆだねた。

あまりにも気持ちがいいせいで、もうお姉ちゃんですらいられない。ただの牝になつてしまう。「あの時」でも上げなかつたような下品なよがり声で鳴

いて、彼に屈服してしまふ。

じゅぶじゅぶと肉穴を耕すのはやめないままで、弟は小さく口の中で『ご主人様』という言葉を復唱すると、座つた目で鍵を取つた。

「もう放さない……姉さんは俺のものだ！」

「うん……♡ おねえちゃんけんごくくんのものよ♡ 今までも……これからも……ずうつとずうつとけんごくくんのものよ♡」

そしてイキ狂うわたしの喉を、重たく飾つた首輪に向けて、彼がその先端を震える指で、ゆつくりとゆつくりと近づけ――。

「俺のモノだ……僕がおねえちゃんを守るんだ……！」

鍵が、刺さる。廻る。

彼が自分を僕と言うのも、わたしのことをおねえちゃんと呼ぶのも、ずつとなかつたことだつた。

それは弟の言葉が、そんな昔から胸の内温められていたモノだという何よりの証拠で――。

「くあ……あああつ！」

「ひああああああああああああッ♡」

雄叫びを上げる彼がぶるぶると腰を震わせ埒をあげる。子宮口に圧着した先端が熱の塊をどばりと迸らせた。

首輪が再び炎となつて、悠里と堅悟、姉弟を囲う。不可思議な絶頂に舞い上がりながらも、心の中にはくつきりと強い気持ちが確かに在つた。

これが罪でも構わない。彼と共に生きられるなら、地獄に墮ちるのも怖くない。

悠里は激しく、それでいて甘やかな充足感に満たされながら、弟の奴隷となることを受け入れた。

☆ 「ふあ!? すごい光……」

首輪が変じた魔法陣は、先刻とは比べものにならないほどの光を放つ。部屋中を埋める輝きの強さに、

律儀に背を向けていた少女が驚きの声を上げる。

我慢に我慢を重ねた末の迸りは、快感のあまり脳が焼き切れそうなほど強烈だつた。

肉親に子種を注ぐ近親姦の禁忌に戦っているのに、積もり積もつた思いの丈をぶちまけるが如く、射精はいつまで経つても止まらない。

姉は、恍惚と微笑みを浮かべて震えている。非現実的な炎色が涙に映つてキラキラと輝いた。

炎の蛇は確かに不思議と熱くない。火傷の心配はないようだが、ただ――言葉を成さない概念のようなものが頭の中に流れ込んでくる。

大声での独り言を高速再生で垂れ流されたらこんな感じだろうか。とにかく不快ではあつたが現状把握の一助にはなつた。

なぜか目の前の姉が、今自分の奴隷になつたという途方もない現実を、驚くほどあっさり受け入れることが出来たからだ。

☆ 「あ、あの、ほんとうにいいのでしょかッ」

向かい合せて座る少女が恐縮しきりで姉さんに尋ねる。

「ええ、どうぞ」

すつかり普段の調子を取り戻した姉は、微笑みながら促す。

いつもは悠里の定位置である席に少女が着き、姉弟が椅子を並べて座る。テーブルの上には三人分の食事が乗つていた。

作りかけだつたロールキャベツに、人数が増えた分野菜を増やして鶏胸肉とほうれん草のバターソテー。ボールには自家製ドレッシングを和えたサラダが盛り、こんがりトーストしたバゲットが、籐かごから香ばしい小麦の匂いを放っている。

「ほ、ほんとうにほんとうにいいのでしょかッ」「たぁんと召し上がれ」



あー  
いいぞお...

うーっ  
ふーっ

# 鬼畜兄弟(兄と)と地獄のキノコ

漫画 おおたたけし

こっやっしてじくくと  
キモイいだらおお



外道外道  
アンタ外道!

うんっ

うん

あやちゃんの  
おんん  
ずいぶん  
大っきくなって  
きたねエー

しっかり  
まこに  
根をはった  
様だな  
ccc...

あ..



おーそじか

この根元が  
かゆいんだ  
ねエ

これで  
どうだあ  
あー？

びしょびしょーんん...

でもこは  
うずくまに  
しておこう  
ねエ

おうおう♡  
まこ穴の  
中まで  
キノコはえて  
きてるねえ♡

あやちゃん  
すっかりこの味  
おぼえてくれて  
おじさんウレシイよ

こいつはお前の  
快楽をエサに  
増えていくからねえ  
え♡

おもらしするほど  
キモチいいのなああ...  
いいぞおお

びしょ

びしょびしょ...



あやちゃんが  
ウラヤマしい  
ぞお

こんな快楽を  
味わえる人間は  
この世にはいない  
だからねえー

バラまいた  
甲斐があつた  
ものだ

あやちゃんのいる  
学校にばらまいた  
甲斐がねえ

クッククク...

このおじさんを  
復活させる  
“おまじない”を



何だっけ  
あやちゃん

“同じクラスの  
けーすけ君と  
仲よくなりた  
い”  
だっけ？  
オッケーオッケー  
おじさんにまかせて  
おきなさい

でもまあ  
その前に

ちよつと  
この魔界キノコを  
ふやすの手伝って  
ねエ



ちやんとかなえて  
あげるからねエ

おじさんのいた  
魔界でいくら  
ためしてもすぐ  
枯れちゃった  
のに

まさかこんな  
カントンに  
ふやせるとはねエ

心配なのは  
あやちゃんが  
壊れちゃう  
ことだけ

大丈夫  
大丈夫

もう一人  
おまじない  
使ってくれたん  
だよ



あやちゃんも  
さあ

ちやんと  
あいさつ  
しなさい♡

チポのささった  
ケツ穴しか  
見えてない  
みたいでちゅね♡

自分のチポ  
かきむしる事しか  
頭がないみたい  
だぞおお♡

どーしようか  
しいなちゃん♡

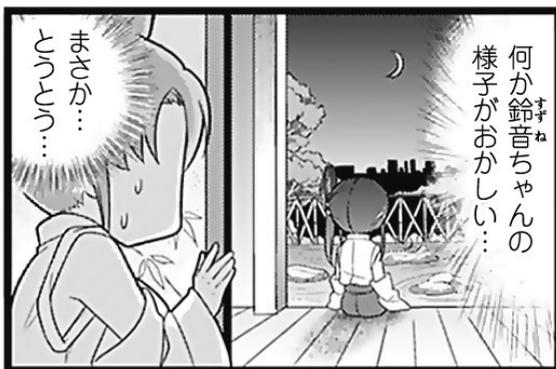
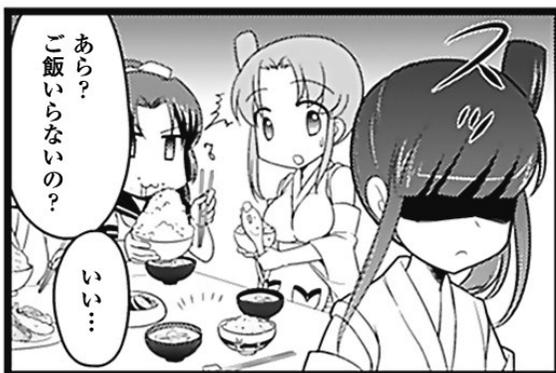
あつ  
あやちゃん  
やめてっ

あーあ  
あやちゃん  
勝手にちゅぽ  
突っ込んだじゃって  
エロい子だあ♡

やだあ  
あーっ!!



日々つれづれに…



# 主に男性向け



如月珠音  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



やっぱり文化祭と  
言えば...!!

メイド喫茶  
なんてどう?

フーン  
メイドか...



如月鈴音  
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



いやいや!!  
ここはあえての  
真剣の演舞ぞ!!

いや  
文芸部関係ないから



真中  
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



...あのさ  
文芸部の枠内で  
考えてほしいんだけど

うーん...

# 悩みのタネ



文化祭?



うん私の入ってる  
文芸部今  
私以外に二人しか  
いなくて...

このままの人数だと  
廃部になっちゃうんだ...

ま、  
文芸部だぞ  
まじめー



せめて文化祭で  
何か目立たせれば...って

あ...!!

思っ...



文化祭で出し物  
ねエ...

つていうかこの人達  
いつ帰るんだろ...

すっか  
ファミー



こうなったら私の催眠アイで  
真中のストリップショーで  
人稼ぎを...

だから  
捕まりますってば!!

宝石を纏いし少女怪盗が  
悪魔の淫らな罠に墮とされる!!



聖晶怪盗  
**セイントピンク**

小説 ほむらりゅう **火村龍** 挿絵 **アサノシモン**  
NOVEL ILLUSTRATION

「いたぞ！ あそこだ!!」

警官の指した先、人がとても登れそうにない大きな木の頂上に向けられたライトが、人影を映し出す。

「警察のみなさん、今日も無駄な警備ご苦労様でしたあ！ それと、マスコミのみんな！ こんにちは!!」

ライトに照らされると同時、その人影はショーの終幕だといわんばかりに可愛らしいポーズを決め、小生意気な声で挑発めいた挨拶をした後、小柄な身体をべこりと折り、丁寧な礼をする。「クソツ!! またやられたっていうのか!」「い、いつの間にも!!」

警官たちの悔しがる声を得意げな顔で受け止めるのは、いま世間を騒がせている、小柄な美少女怪盗だ。

「ふうんだ。バカな警察なんか捕まったりしないもんつ！ 今日、宝石は頂きました！」

得意げに鼻を鳴らした少女は、Dカップの胸に指を這わせ、纏ったコスチュームの具合を確かめる。夜風が優しく彼女の髪を撫で、桃色のリボンで結われた金髪のツインテールが揺れた。

「……ゴクツ」

そんな彼女の仕草に、何人かが喉を鳴らす。それほどまでに、怪盗少女の格好は小悪魔的な魅力を備えていた。

小柄な少女が身に纏っているコスチュームは、ピンクを基調とした怪盗とは思えない可愛らしいものだ。首元から乙女の大事などころまでを覆うレオタードに、少しでも動けばお尻が見え

てしまう、逆にいえばとても動きやすいミニスカート。グロープは二の腕まで覆う白いものと、ピンク色で肘の辺りまでを守るものの二段重ねで、どちらもびつちりと彼女の腕にフィットしている。ムチムチと肉感たっぷりの太ももには白いニーソックスが食い込み、健康的なふくらみはぎをキュッと締め付けた桃色ロングブーツが少女の可愛らしさを一層際立たせていた。胸元にはキラリと輝くクリスタルと羽飾り。気の強そうなツリ目、ピンク色の瞳で警官たちを見下ろし、口元には小生意気な微笑を浮かべている。

また、とても小柄ながらも出るところはしっかりと出た身体、Dカップの巨乳にスカートを押し上げる大きなお尻が、幼さを感じさせる身長、顔立ちとの絶妙なギャップとなり、見る者の視線を捕らえて離さない。

「フフ、みんなが瑠奈に注目してる。やつぱりわたしって可愛いよね!」

ポーズを取り、皆の注目を浴びている美少女怪盗は、ヒソヒソとにもない空間に話しかけた。そう、普通の人間から見ればなにもない空間だ。

「はいはい。瑠奈は可愛いわよ。よくわかりました」

しかし彼女のピンク色の目には、空中に浮かぶ小さな精霊の姿が見えているのだ。少女の耳元を漂う小さな相棒は、美少女怪盗に耳打ちする。

「ほら、早く逃げなくちゃ!」

「むう。もつとカメラに映りたかった

の……。みんな、またね!!」

精霊と小声で言葉を交わした怪盗ヒロインは、大声でマスコミや警察に手を振ると、夜の闇に消える前にカメラにウインク一つして、キメ台詞を放つ。「どんなに厳重に守ったって、この怪盗——」

\*

「この怪盗セイントピンクが、ぜ〜んぶ盗んじやうんだからつ!!」

世間を騒がせる美少女怪盗がリビングのテレビに映り、胸を寄せてお決まりの台詞をカメラ視線で放つ。

「瑠奈、また新聞の一面だよ! あ〜あ。デカデカと顔振られちゃって……」

部屋の中を飛び回る精霊が、テーブルに置かれた新聞を見て呆れる。

「なによりヴ、なんか文句あるわけ?」

そんな精霊をジロリと睨むのは、茶色がかつた髪をツインテールに纏めた小柄な女の子、香月瑠奈だ。その顔つきは、噂の怪盗によく似ている。

「安心しなさいヴ。瑠奈がセイントピンクだなんて、誰にもバレないわよ!」

「確かにバレないわね……んぶつ!!」

え、熱々のコーヒーが注がれたカップの中にためらいなく放り込む。

「きゃああつ! あ、熱いつて!! しかもこれ、砂糖いれすぎ……つ。どろどろでねつとりしてるじゃないつ!」

「いいのつ。瑠奈はそういうのが好きなんだから」

「ぜえつたに間違えた! いつもこんなどろどろじゃないでしょ!!」

どろつとしたコーヒーから這い出したりヴは、砂糖たっぷりのコーヒーを拭いながら文句をいった。対する瑠奈は、フンと鼻を鳴らしてテレビを見るが、心なしか頬が赤い。

「……な、なによちよつと間違えただけだもんつ。リヴがいつつぱい働かせから、疲れてるの!!」

照れ隠しにイーッと舌を出した瑠奈、この生意気な少女こそ、警察の警備をかいくぐり、見事な手際で宝石を盗み、世間を賑わせている怪盗セイントピンクの正体だ。

椅子に座った瑠奈は、どこからともなく取り出した青水晶——聖晶をテーブルに置く。瑠奈の指先でつかれたそれは、光を浴びていないにもかかわらず、その内部から青く輝いた。

「で、魔晶はあと二つ……だつて?」

テレビに映った、理想のスタイルの自分を眺めながら、瑠奈はリヴに問いかける。それは何度も聞いておきながら、なおも聞かずにはいられない問い。リヴはコクンと頷いた。

が復活して大変なことになっちゃう」

聖晶の輝きが一瞬強まると、その周りに黒い水晶の幻影が現れた。これが、世界を混乱に陥れる悪魔が復活する鍵である、邪悪な力が込められし魔晶だ。覚醒すると、封印するまで周囲の人間を歪め、邪悪な者に変えてしまう。

そんな悪魔の力に対抗するために生み出されたのが、瑠奈の持つ聖晶だ。これに選ばれた者は、その精神が揺るがぬ限り、身体能力を高め、魔晶を封印する力を持つコスチュームを纏うことができるようになる——その力を使って、魔晶を封印し盗むのが、聖晶怪盗セイントピンクの使命だった。

「きゃあっ！ 見てよりヴ、すっごく可愛く映ってるっ!! 録画録画っ」

「聖晶も、人選ミスじゃないかな……」

テレビに映る自分を見てはしゃぐ瑠奈、聖晶に認められた強い意志を持つてはいるが、とても目立ちたがり屋な彼女に、リヴはため息をつくのだった。「ほら、今日も盗みにいくんだから、調子に乗って失敗するのだけはダメだよ？ 魔晶を盗んでもらわないと、わたし困っちゃうよ」

「わかっているっての、契約だもんね。瑠奈はセイントピンクに変身して目立てる、その代わりに、魔晶封印を手伝う——。忘れてないって」

お気楽な口調でそういうと、瑠奈はテレビを消し、聖晶を手取る。

「じゃ、下調べいってみよー！ それで、今夜決行ね!!」

「大丈夫かなあ……」

ムチムチの太ももにニーソックスを食い込ませ、とてとてと歩く瑠奈の後を、リヴは心配そうに追った。

\*

そして、その日の深夜——。

「よしよし、侵入成功っ!」

「ま、待つてよ瑠奈、速すぎだよ!」

美術館内に入り、様子を窺うセイントピンクに、リヴが文句をいう。

「ふーんだ。セイントピンクの自慢はこのスピードだもん!」

瑠奈は得意げに鼻を鳴らす。つい今しがた、セイントピンクに変身した瑠奈は、警官たちを欺き、畏にかかったフリをして、目標に侵入したのだった。

「大丈夫だっって信じてるけど……! 畏にわざと引つかかるのやめてよ……!」

「うっさいっ! ピンチシーンがあつた方が、みんな盛り上がるの!」

反省の色をまったく見せない変身怪盗は、ポリウム満点の胸とヒップを揺らして生意気に笑った。

「ふふっ、カメラにアピールもしたし、さつさと魔晶封印して帰ろっつ」

「目立ちたがりなんだから……!」

自信たっぷりで気の強い変身怪盗に、リヴはため息をつく。

「いいじゃない。目立ちたいからセイントピンクやってるんだもん」

金髪のツインテールを揺らし、瑠奈は拗ねたように唇を突き出した。だが、その表情がサツと引き締まる。

「なにか聞こえる……!」

ピンク色の瞳が鋭くなる。みんなに注目されようと派手なアピールをしまくるこの怪盗少女も、邪悪な力に満ちた魔晶を盗むときは真剣になるのだ。

そして、どうやら魔晶は覚醒を始めていたらしい。暗い館内の奥から、くぐもった声が聞こえてくる。

「女の人の声……!」

「みたいね。いくよ、リヴ!」

セイントピンクはミニスカートをひらりと揺らし、桃尻をちら見せしつつ素早く館内を横切った。隠密行動のため、ローヒールブーツが足音を消し、身体にフィットしたレオタード型コスチュームのおかげで衣擦れの音もない。聖晶によって形成されるコスチュームは魔法の繊維で作られており、しなやかで動きやすいだけでなく、とても丈夫で少しの衝撃などではビクともしない。また、足下を彩るピンクのブーツは瑠奈の脚力を大幅に強化し、怪盗に必須な凄まじいスピードを与えてくれるのだった。

その自慢のスピードで向かった先は、美術館の奥にある館長の部屋だ。派手なパフォーマンスのため、完璧な下調べをしておいた瑠奈は迷うことなくたどり着く。扉は半開きになっており、声はそこから聞こえてくるようだ。

「まずい、魔晶が覚醒しかけてる」

扉の隙間から瑠奈とリヴが見たのは、椅子に縛り付けられ猿轡を噛まされた女性と、その女性にのしかかり、いきり立つ怒張をいまにも挿入しようとしている中年の男の姿だった。

「館長と受付にいた女の人のね」

「瑠奈早く魔晶を見つけてなくちゃ!」

リヴが早口で囁く。

「わかつてる! 魔晶は——」

セイントピンクの、獲物を逃さない鋭い視線が部屋中を走る。

「見つけた——! 本棚っ!」

本の中に隠され鈍く光を放つ水晶。セイントピンクは、小柄な身体をスツと館長室に滑り込ませた。

「グオオオオオ……?」

人とは思えない声をあげ、濁った瞳で振り向いた館長。だが、セイントピンクのスピードは魔に魅入られた男の反応速度を遥かに超えていた。

「魔晶、封印っ!」

グローブに包まれた両手に光を灯し、魔晶にかざすセイントピンク。

「ガアッ、ガガアアアアアアアッ!」

その瞬間、セイントピンクに飛びかかるようにしていた館長は、断末魔の悲鳴とともに倒れ伏した。覚醒しかけた魔晶が封印され、穢れた光が収まる。

「ふうっ。あつかなかったわね」

「完全に覚醒してたわけじゃないからね。おつかれさま」

「ありがと」

封印した魔晶を弄ぶ瑠奈に、リヴは勞いの言葉をかける。その視線は魔晶に注がれていたが、気の抜けたセイントピンクがそれに気づくことはない。

「んっ……!」

瑠奈は手にした宝石を、ピンクのこ

はじめて、火村龍です。変身ヒロインはいいですね、頑張ってるけど負けちゃうところが素晴らしい。これが初小説となりますが、楽しんでいただけたら幸いです。よろしくお願ひします。

スチュームの胸元に輝く聖晶に取り込む。少し頬を赤らめ、取り込みを完了したセイントピンクだったが、遠くから響いてくる声にハッと顔をあげ、慌てて振り向いた。

「ヤバっ！ 警察来ちゃう。とつとと逃げるわよ、リヴ!!」

「えっ？ 瑠奈、この人はっ?!」

リヴの視線の先にいる、椅子に縛られ怯えた目でこちらを見ている女性をチラリと見て、セイントピンクは僅かに表情を曇らせた。

「大丈夫、警察に任せましょ」

「で、でも……」

「瑠奈たちがすることは魔晶を封印することですよ！ ほらっ、ぐずぐずしてると置いてくよ!!」

「あつ！ ま、待つてよ」

ヒラリと窓から飛び降りた瑠奈を、リヴは慌てて追いかける。

「宝石、確かに頂きました」

そう書かれたカードをその場に残し、聖晶怪盗は夜の闇に消えた。

\*

「う……。おはよ、リヴ……」

覇気のない声でリヴの扉を開けたのは、ピンクのコスチュームを身に纏った怪盗セイントピンクだ。だが、その姿はテレビや新聞で見るとはずいぶん違う。ムチムチの身体にぴっちりとした食い込んでいるはずのコスチュームはなぜかぶかぶかで、ニーソックスも膝頭までずり落ち、二の腕まである白いロンググロブは皺だらけだ。

レオタードやスカートの鮮やかなピンク色も心なしかくすんで見え、胸元の聖晶の輝きも弱い。

「やつと起きた？ おはよう、瑠奈。ほら、早く変身解除しないと……変身しつぱなしでエナジー減ってるよ」

「わかっている……。でもなんだか最近、身体が重くなって……」

いつもの生意気さはどこにいったのか、セイントピンク姿の瑠奈は気意そうにいつて、ブーツを履いたままりピンクを横切り、椅子に座る。

昨夜、魔晶を盗み終わった瑠奈は、窓から自分の部屋に戻るやいなや、変身したままベッドに倒れ込み、ぐっすり眠ってしまったのだった。

「そりや、魔晶を何個も聖晶に取り込んでるんだもの、疲れもするわよ。でも、聖晶に選ばれただけあるわね。普通だったら、もう大変なことになってるんだから」

「ふえ……？ 大変なことって？」

「ま、大変なことよ……」

テーブルに顎を乗せ、だらける瑠奈に、どこか含みを持たせた声色でつぶやくリヴ。瑠奈はそんな相棒の様子をまったく気につけて、深く息を吐いた。

「でも、気をつけてよ？ 聖晶のエナジー減っちゃったり、意思が弱まると、そんな風にコスチュームも脱げ始めちゃうし、せつかく取り込んだ魔晶だって勝手に外に出ちゃうから」

「わかってるってばあ……。変身、解除……ふうう……」

瑠奈がつぶやくと、セイントピンクのコスチュームが光となって聖晶に消え、変身が解かれた。

「んっ……くうううううっ！ つはあつっ！ あと、一個だよな」

大きく伸びをした瑠奈は、ふわふわと漂う精霊に聞く。その顔にはいつもの生意気な笑顔が戻っており、魔晶を大量に取り込んだことによる身体の変調をまったく感じさせない。

「うん。場所もわかっている。でも、急いだがいいかも。最後の魔晶——魔晶イヴイルは、悪魔が眠る水晶だから」

「ふうっ。それじゃ、これでラストだし……とつとと終わらせるよっ」

瑠奈は声を張り上げると、小悪魔的な笑みを浮かべて席を立つ。

「えっ、ちよつと休んだ方が……」

「ふんっ、リヴにそんなこといわれたら、もつといきたくなくなっちゃった！ 今日、テレビに瑠奈の可愛い姿をたっぷり映してやるんだからっつ!! シャワー浴びたら、セイントピンク、華麗に参上っ!!」

そういう放つと、瑠奈は鼻歌を歌いながらバスルームに消えていく。リヴはそれを、無表情で見つめていた――。

\*

「その部屋だよ」

警官を出し抜き、ビルに潜入した怪盗セイントピンクは、リヴの指差した先の扉に近づき、ス……と、薄く開けた。部屋は広く、銀色に冷たく光る壁に囲まれており、その真ん中にぼつんと展示ケースが置かれている。装飾のされていない部屋はダクトも丸見えで、天井に設置されたそれから僅かに風が入り込んでいるようだった。

「これが魔晶イヴイル……。ふんっ、あつけなかつたな」

セイントピンクは鼻を鳴らし、グロブに浄化の光を灯らせる。

「魔晶イヴイル……封印っ!! ……っ、あれ？」

エナジーを集中させた瑠奈だったが、魔晶にはなんの変化もない。一瞬呆然とした、その隙が致命的だった。

カチッ。

「えっ?! きゃあああつっ!!」

ビリ、ビリビライイイイ!!

突然、目の前の水晶が発光したかと思うと、無防備のセイントピンクを電撃が襲った。怪盗ヒロインは悲鳴をあげ、意思とは関係なく背中が仰け反る。ブーツの踵が浮き上がり、レオタード状のコスチュームにびつちりと包み込まれたDカップの巨乳がたぶんだぶんと揺れ動いた。そして、電撃が止んだ途端に展示ケースを巻き込んで尻餅をつき、そのまま動けなくなってしまう。

「か、は……な、なんなの……? ふに、し、痺れて、立てないよ……」

小刻みに痙攣する、ニーソックスが食い込んだ太ももを開いたまま閉じることもできず、身体を支配する痺れに苦しげな表情を見せるセイントピンク。その指先に、ケースから転がり出た宝石が触れた。



「びゅ……くちゅ……。少しでも動けば静かなダクト内に卑猥な音が響き、性経験のない初心なセイントピンクの頬を赤らめさせる。」

「ふにゅつ、はひい……。瑠奈のあそこ、どうしちやつたの？ くちゅくちゅ濡れて、コスチュームにべつちやり張り付いてくる……。気持ち悪いよお」

「触ってもいないのに濡れてくる秘部は、乳首以上にジンジン疼いて触って欲しいと訴えてくるが、セイントピンクはそれを懸命に我慢し、発情する身体を抑えながら一刻も早く脱出しようと身体を動かす。しかし、そんな健全な怪盗ヒロインを更なる罠が襲った。」

「ああっ!? そんなつ、穴があいて……きやああああああっ!!」

突然ダクトの床が抜け、エッチな気分を抑えるのに集中していた瑠奈は、為す術なくダクトから転落した。

「い、いたつ……くない?」

無様な尻餅状態で落下したセイントピンクは、お尻やブーツの底、グロブから伝わってくる感触がぶによぶによしていることに気の抜けた声をあげた。しかし、すぐに闇の中から声が聞こえてきて、その表情を引き締める。

「セイントピンク、みつけた」

「そ、その声っ、イヴィル!? くっ、これ、あなたが仕組んだ……ッ!? なによこれ! ねばねばが……っ!!」

を向けたセイントピンクの口から、驚愕と嫌悪の悲鳴が漏れた。そこに広がっていたのは透き通った色をしたネバネバの粘液で、それはピンクのブーツの靴底とお尻にべつたりと絡み付き、動きを封じていたのだ。

「ふあああ……。これ、ぜんぜん動けない……ねばねばしすぎだよお……。気持ち悪い!」

両手を床につけ脚に力を込め、粘液から逃れようとするセイントピンクだったが、凄まじい粘性でブーツとお尻にべつとりへばりついたそれは、変身し強化された瑠奈の力をもつても引きはがすことができない。額に汗を浮かべ、何度もお尻をあげてはその強力な粘性によって引き戻される様は、あの華麗で生意気な怪盗セイントピンクとは思えない無様なものだった。更に、ネバネバから逃れるためについた手までもが粘液に捕われ、持ち上げられなくなってしまう。

「やだやだやだあつ!! セイントピンクのコスチュームが汚れちゃうっ! ふにゅっ、イヴィルうう……!!」

「わあっ、恐い恐い。でも、コスチュームなんてもう汚れてるじゃない。いままさでしょ? それに、セイントピンクを捕らえるには、まずそのスピードを封じなくちゃ」

「ぐちゅ……にちやああ……。自慢のスピードで、イヴィルに飛びかかろうとするが、コスチュームに絡み付き粘着液のせいでそれも叶わない。セイ

ントピンクは歯を食いしばり、なんとか抜け出そうと無駄な努力を続ける。

「(あうっ、ブーツにネバネバへばり……。ほんとに動けない……。このままじゃ好き放題にされちゃう……。ううっ、弱気になっちゃうだめえ!)」

「イ、イヴィル……このネバネバをとりなさいよっ! こんな卑怯なこと許さないんだからあ……っ!!」

「いくら強がったって、そこからは脱けられないわよ。それより、これを見なさい……あなたの大好きなものよ」

大きなツリ目を潤ませながらイヴィルを睨みつけるセイントピンクを、黒衣の魔女は鼻で笑い、パチンと指を鳴らす。すると、どこからともなくカメラが現れ、緑のランプを点灯させながらセイントピンクを撮り始めた。

「カ、カメラっ!? なによそれ……それで、なにをするの……?」

「なにって? セイントピンクの可愛い姿を撮るに決まってるじゃない。あなた、カメラ大好きだし」

さも当然というように澄まし顔をしたりイヴィルが、魔力でカメラを操り瑠奈の勃起した乳首、ネバネバに捕われたお尻やブーツを撮影していく。

「や、やめてっ! こんなところ撮られるのなんてイヤだよおっ!! こんのおっ……! はがれるお!! むにいっ!! くうううっ!!」

敵に捕らえられ、粘液で自慢のコスチュームを汚されているというだけでも恥ずかしいのに、更に乳首まで勃起

させている。こんな姿を録画したものが誰かに見られでもしたらと思うと、瑠奈は平静ではいられない。顔を真っ赤にして歯を食いしばり、ネバネバの床から逃げ出そうとグロブやブーツをばたつかせるが、ただ手首や足首まで粘着範囲を拡大させる結果しか生まれない。手足に力を込めてお尻をあげるも、聖晶の加護を受けた素肌と、レオタードにべつたりと付着した粘液から逃れることはできなかった。

「ムダムダ。それ、魔法のトリモチだもの。じゃあ、とつとと始めましょ」

先ほどと同じように、しなやかな指を鳴らすイヴィル。

「な、なにを……っ!!」

とダメなのに、身体じんじんして……)

ギョルルルル!! セイントピンクが必死にあがく間にも、イヴィルに操られたアームは動きを止めることはない。その先端には金属の車輪がついており、それが高速回転しながら身動きのとれない怪盗ヒロインに向かってゆっくりと近づいてきた。

「ふにいつつ! 近づくなあつ! ああつ!」

アームが狙う先を理解したセイントピンクは、恐怖に声を引きつらせた。スカートがめくれ、丸見えになっている乙女の大事な場所。そこに向かってじりじりと、セイントピンクの恐怖心を煽るように伸びていく金属車輪。

「アハハ、やっぱり魔品の発情効果は抜群ね。ピンクのコスチューム、すごい染み……。あらあら、お豆ちゃんもおつきくしちゃって、雌のニオイがぶぶん漂ってくるわ」

「あうつ、そんなこと……ないもんつ。でたらめいなあつ!! ああつ! その車輪もだめえ……あつ、ああつ! あ、当たっちゃうら」

ギユイイイイイ……! もがき続けるセイントピンクに、どんどん近づいていくアーム。そしてついにその先端がレオタードに浮かび上がる肉突起に触れた。

「あひいいいつつ!? くつ、ふにいいい……。こ、こんなの、なんともないんだからあつ! あああんつつ!!」

……ツツ!! が、がまんしないと……ふくうううう……!

くちゅちゅちゅちゅ……!! 高速回転する車輪に敏感なクリトリスを齧られ、溢れ出る愛液がレオタードを濡らす。べつちよりと本気汁を溢れさせる秘部と車輪がぶつかって響き渡る卑猥な音が、尻餅をついたまま動けないセイントピンクを責めたてた。キュツと引き締まったウエストは、大事なところへの強烈な攻撃でカクカク動き、ツンと張った双乳がたぶたと揺れる。小悪魔怪盗は唇をキュツと結び、必死に声を漏らすまいとするが、あまりの快感にセイントピンクの身体は自分の意志で動かすことができない。

「あつ、くふううつ……! う、あ、あつ。ぜ、ぜんぜん……平気、だもんつ! セイントピンクは、負けないんだもん……ツツ!!」

ピンクの瞳に涙を滲ませ、喘ぎ声を殺す瑠奈。しかし、唇の端からは涎が垂れ、豊満な胸に濃い染みを作る。

「へえ。じゃ、このお汁はなに?」

イヴィルの言葉とともに、セイントピンクの股間に寄ってくるカメラ。冷酷なレンズが、アームに責められ、ピンクのコスチュームを押し上げるクリトリスや、濡れすぎて色が濃くなった股間を撮影する。

「そ、それは……その汚いトリモチだもん……つ! くひいつつ! こ、こんなこと無駄なんだから、もう、やめなさいよ……!」

あくまでも感じていないと強がり、肩を寄せながらツラそうにしゃべるセイントピンク。そんな怪盗ヒロインに、イヴィルの最悪な言葉が突き刺さる。「そう? でも、無駄ついていわれても止められないわ。……だつてこれ、ネット配信してるもの。『セイントピンクの大活躍、生放送』つてね!」

「ひっ!」

サーッと、セイントピンクの顔から血の気が引き、あれだけ生意気だった瑠奈の顔がくしやりと崩れた。

「ああつ! やだああつ!! 撮らないで! やめてよおつ! こんな可愛くないとこ見られちゃつたら、わたしもうつ、うきゆううんツツ!!」

トリモチの罠に捕われ、股間を責められて乳首やクリトリス勃起してしまっている――。怪盗ヒロインにとつて、そんな姿をカメラに収められ、不特定多数に見られていることほど恥ずかしいことはない。セイントピンクは、涙を流して嫌がった。だが、その泣き顔や、感じるのを我慢する様は、セイントピンクのいつもの生意気さとの杜絶なギャップを生み出し、見る者を興奮させるといこうに瑠奈は気づかない。そして、そんな可愛らしい泣き顔を披露する変身ヒロインを更に感じさせるべく、金属の責め具は動き出す。

「つぶああああああんつ! 車輪、深すぎ……ツツツ!! 食い込んで……はああああ、ひいいいいいつつ」

アームはその位置をずらし、クリトリス責めから、直接秘部に食い込んできた。ちゅばば……と、溢れる愛液を車輪が巻き上げ、水車のごとく瑠奈の雌汁を撥ねあげる。身体を支えていた腕が肘をつき、肉感たっぷりの両脚が大きく開いて粘液の中に浸かる。ニソックスからブーツまで、すべてが粘液にへばりつかれ、少し浮かせるたびにねちゃねちゃと糸を引いた。

「アハハ、全世界に公開されてるっていつたら、急に感じ始めたわね!! いまのその格好、最高に無様だわ!! 大股開きでガクガクしちやつて、それでも怪盗セイントピンクのかしら?」

「ひああああ……! か、感じてなんかつ、ないもんつ!! あ、ああつ! 瑠奈のこんな姿……みんなに見られてる、なんてえつ……や、やだやだやだあつ!! いやなのに、ふ、ふにゆううううつつ!!」

(なんでつ?! みんなに見られてるっていわれたら、急にドキドキして……ツツ! 瑠奈、こんなエッチなところ見られて、興奮しちゃうのっ?! ううつ、違うもんつ! 怪盗セイントピンクは、そんな変態じゃないもんつ! あひいつつ! グローブもブーツもねばねばで、ぜんぜん動かさないよおつ!! 瑠奈のお股、閉じられないいい……! い、息つ……できないつつ)

レオタードの下で口をぱつくりと開いたピラピラを車輪に責められ、息をすることさえ困難なセイントピンク。気色悪い感触をブーツ越しに感じなが





# イセリア 英雄戦記

the legend of the Acerpa war

第22話 同じ空の下で

小説 NOVEL さかいひとし 酒井仁 挿絵 ILLUSTRATION ほたん 牡丹

ついに再会したセリーヌとフィオナ!  
しかし新たな戦いの始まりが、  
彼女たちの道を再び分かれさせる!  
セリーヌは魔物との激しい戦闘に、  
フィオナはレジスタンスの協力を乞い、  
**自らの女体を捧げる……!**

イセリア歴四二二年——かつて魔王と戦いこれを制した英雄王が建国したイセリア英雄公国。

勇敢な騎士と善良な人々が築き上げてきたイセリアの王都は、今や紅蓮の炎に包まれていた。

「グルオオオオオオオオオ！」

おぞましい獣の咆哮に人々は震え上がり、逃げ惑う。オークや獣人、無数の触手を持った異形の怪物たちがどこから現れたのか、正確に知る者はいなかった。

ただその瞬間、大気が打ち震え、巨大な光の柱が王宮を中心に天に立ち昇るのを、王都守備兵や領民たちが目撃している。

その後、王宮の周囲から無数の魔物たちが現れ、暴れ始めたのだ。

「くそおつ、何がどうなって……女王陛下までもが行方不明とはどういうことか！」

イセリアの女王アリオナが王宮地下に存在するメイズVIIに潜ったことは、一部の者しか知らない。

ましてやそこでアリオナと騎士エルスがどんな目に遭わされたかなど。

一般の兵はただ民を逃がし、魔物の侵攻を食い止めるので精いっぱい。だがメイズの奥から次々に現れる魔物の群れを前に、為す術はない。

「くっ、せめて民だけでも……」

もはやこれまで、と死を覚悟したその時、一陣の風が大気を切り裂いた。「インペリアルダイブッッッ！」

ズッガアアアアアンッッッ。

巨大な魔力の塊が物理的な破壊力そのものとなって、魔物の群れを文字通り押し潰し、薙ぎ払う。

「インペリアルダイブ……セツ、セリィ又隊長！」

爆風に靡くロイヤルブルーの長髪、女性らしさを残した銀の甲冑。

そのたおやかな腕に握られているのは、闇色の魔力を宿した魔剣クラウソラス。

そこに佇んでいたのは、英雄王の再来とも言われた、イセリア英雄公国騎士団第一騎士団長、セリィヌリアヴァリアレス。

その背後から、紫の疾風がひとつ、ふたつ。魔物の間を擦り抜けると同時に、魔物が鮮血を噴いて絶命する。

「あれは、リニア・ドライブ……紫電騎士団のイグナシオ隊長！」

「魔法中隊もいるぞ……た、助かった」

「お前らよく持ちこたえたな！ あとは俺らに任せな」

頬傷の勇士の頼もしい言葉に領いて、セリィヌは背後の騎士団に号令をかける。

「各騎士は部隊を展開ッ、密集陣形で魔物を取り囲め！ 民の逃走路を確保するのだ!!」

よく通る透き通った声に、騎士団が一個の生き物のように激みなく動く。

ひとりひとりの力は魔物に比すべくもないが、指揮系統を持たない魔物の群れは、たちまち総崩れになる。

「うおおおつ、一気に盛り返せえつ」

援軍の到着で優勢になる騎士団だが、セリィヌの顔はすぐれない。

この魔物の大群が王宮地下のメイズVIIの封印が解かれたことによるものと知っているからだ。

（メイズの再封印も重要だが、おそろくルシィフとフィオナでなければ無理だろう……それまで、ひとりでも多くの民を逃がさねば！）

「セリィヌ隊長、よくぞご無事で！ ですが、フィオナ殿下はご一緒ではないのですか」

ヒーラーの手当てを受けている守備隊の兵士はそのことを知らない。セリィヌは曖昧に言葉を濁した。

「フィオナ殿下には殿下にしかできない重大な使命があるのです。今は……殿下を信じて、自分たちにできることをするのです」

「イエス、ママム！」

再び魔物の群れに斬り込もうとクラウソラスに魔力を溜めつつ、女騎士はちらと視線を空に向ける。

同じ空の下で戦い続ける限り、今は傍にいないとも、いつかきつとフィオナと再び巡りあえる。

そう信じて……。

時は、二日前に遡る。

元イセリア領最北端の街オーダイに、フィオナたちはいた。

「フィオナ姫、我にかけられた封印を今こそ解くにゃ！」

猫耳幼女の言葉に、イセリア皇女フ

イオナは頷く。

ミーシャの額に髷した手が仄青く光り、小柄な体躯を包み込んでいく。幻影のように美しい光景がオーダイの人々の目を奪う。

「——これで、ミーシャの封印は解けました。ですが、貴女の強大な力を完全解放するには、まだ今しばらく時間がかかるでしょう」

「しよがらないにゃ、真打ちはそう簡単に参上しないのにゃ」

「今後についてだが、フィオナ」

スレアの策謀によって、アリオナ・エルス・ドローラは拉致されてしまった。しかもメイズVIIの封印は解かれ、イセリア王都に深刻な危機が迫っている。

（だが、女王様救出にしろ、王都の民を守るにせよ、現状では戦力が圧倒的に足りない）

だからこそ猫耳幼女——大騎士団長ミーシャは自らの封印を解くように進言したのである。

だがそれでも十分な戦力とは言いがたいとセリィヌは気づいていた。

（王都にはある程度の戦力はあるし、各地に騎士団もいるはず。まずは彼らとの合流を考えるか）

「セリィヌ。わたくしはオラリオオ向かうわ」

「オラリオ……『自由の剣』か?！」

イセリアの北西に位置するバインドベルグの属領オラリオ連盟。「自由の剣」とは帝国の支配に抵抗しているレジスタンス組織である。

以前、フィオナがクアール湖に向かった際、オラリオ海戦師団に襲われたフィオナたちを救ってくれたのが「自由の剣」だった。

「ええ。彼らはイセリアと同じく帝国の脅威に抵抗しているわ。大丈夫、彼らの協力を取りつけたら、すぐに私も王都に戻ります」

「セリーヌたちにはイセリア王都を救いに行つて欲しいにや。オラリオにはフィオナ様と我が行くにや」

「ボ、ボクもだよ」

羽根の生えた小さな精霊ルシィフが懸命に主張する。

「ああ——じゃあ私とイーバもそろらについて行ってあげてもよくてよ」

と、やおら話に割り込んできたのはメイベルローゼである。

帝国の皇女のほとんど命令とも聞かざる言葉に、猫耳幼女はあからさまに不満げな表情を浮かべる。

「勘違いしないでね、ここ帝国に占領されてる街だし、そも私にはイセリアを救う義理もないんだし。魔物だらけのイセリアに行くわけないでしょ」

「そ、それはそうかもしれないけど、可愛げのない娘だにや」

ふん、とそっぽを向く女主人の傍らで、女重装兵は無言で頭を下げる。

セリーヌは騎士を指揮してイセリア王都に。フィオナはミーシャとともに「自由の剣」に助力を求めに。

そう話がまとまりかけた時、成り行きを見守っていたオーダイの街の人々

が声をあげ始めた。

「おい、俺たちはこれからどうなっちゃうんだよ！」

「街を滅茶苦茶にしておいて、そりゃねえだろ！」

確かに、オーダイの街はギユスターヴ率いるミノタウロスと帝国軍の襲撃を受け、さらにサーシャに操られたセリーヌの猛攻によつて、街はひどい有様である。

「そもそも、てめえらがこの街に来なけりゃこんなことにならなかつたんだ、この淫乱皇女が！」

衆人環視の中で、ミノタウロスに憑依したギユスターヴに犯されたフィオナと、操られていたとはいえ実際に街を破壊したセリーヌは、返す言葉もないうなだれる。

「そんなに……悪いのは帝国だにや。みんなだつてわかつてはるはずにや」

「ふん、平民なんてこんなもんだよ。王族や騎士が守つてやらないと何もできない臆病者……さあ、帝国軍がまたやつてこないとも限らないわ。早く行きましょう」

「待つてくさい、メイベルローゼ」

元帝国の姫を押し留めたのは、フィオナ。その凛とした眼差しに、殺気立つていた街の人々の罵声がやむ。

「皆さん——わたくしはつい先日まで帝国に囚われ、数々の辱めを受けていました」

「フィオナ——」

突然の告白にセリーヌは青ざめるが、

フィオナは言葉を続ける。

「度重なる辱めの中で、わたくしは何度も打ちのめされました。今ギユスターヴ王の手から逃れ得たのも数々の幸運、そして仲間がいたからこそです」

ですが、と金髪の皇女は力強い意志を込めた瞳で、住人ひとりひとりの顔を見詰める。

「わたくしはイセリアを、この世界を守りたい……王都の民も、この街の皆さんも、誰ひとり見捨てたくはないのです。そのためならば、わたくしはこれから先、幾度辱められようと、決して諦めない、諦めたくない……！」

フィオナは傍らにいた女騎士の腰にある短剣を、やおら抜き放ち、切っ先を己の胸に向けた。人々も、セリーヌもミーシャも、突然の行動に息を飲んで動けない。

「もし、わたくしが民を見捨て、諦める時が来るとすれば、わたくしは真つ先にこの命を見捨てましょう——イセリア英雄公国第一皇女として、わたくしはここに誓います！」

その気高き姿は、獣人に陵辱され、憎き敵王の子を孕まされた哀れな姫と同じ人物とはとも思えない。

たとえその肉体は汚され、幾度も心を折られようと絶対には穢されぬ宝石の魂を抱いた者——血筋でも家柄でもなく、真に人を導く王族の誇りは、フィオナを口汚く罵っていた人々に羞恥の念を抱かせるに十分だった。

その夜。

オーダイの市民は騎士と協力してある程度瓦礫を撤去し、街を修復したが、それでも住人の半数近くは帝国の再襲撃を恐れ、イセリア王都の西、クアール大同盟への避難を選んだ。

「王都の民たちが心配です。私と騎士は明朝早くに王都に向け出発します。フィオナ殿下も道中お気をつけて」

「フィオナ姫様にはミーニャンがついてるにや。さあ、セリーヌと姫様はもう休むといいにや」

猫耳の大騎士長の勧めで、どうにか無事だった宿屋に床を整えてもらう。騎士団の多くは簡易テントで明日の立に備えている。

「セリーヌ……床は冷たいわ、一緒に寝ましょう」

「は、はい」

蒼髪の騎士団長は少し躊躇つてから、甲冑を外し、皇女の隣に身を滑り込ませた。

（こうして同じベッドで眠るのは何年ぶりのことだろう……気を緩めるべき時ではないが、やはりフィオナの傍らは落ち着く）

思えば、幼馴染みでもある皇女と離れ離れになって、随分と回り道をさせられてきた。

バードベルグに囚われていた時のことは詳しくは聞いていない。だが、フィオナがギユスターヴの子を宿していると聞かされれば、どんな目に遭っていたかくらいは想像がつく。

（私自身、ひどい目にも遭わされたが、

「……やはり危惧していた通りでしたね、セリーヌ隊長」

予想はしていたが、何も知らない王都の民が災禍に巻き込まれているとわかると、焦らずにいられない。そこに先発していた斥候が明らかに別部隊の騎士とともに戻ってくる。

「よお、セリーヌ隊長、久しぶりだな」

「あなたは——イグナシオ殿！」

それは、魔力によって稲妻のように大地を滑空する神速の部隊。イグナシオIIグレストウフ率いる第二騎士団——「紫電騎士団」だ。

「帝国の先遣隊とアヴァルスの国境でやりあってたんだが、セリーヌ殿と再会できるとは、俺も運がいい」

「その様子では、無事に帝国は撃退したようだな」

頬傷をいくつも残す歴戦の勇士の笑みに、セリーヌも思わず破顔しかけるが、一転きりりと顔を引き締める。

「イグナシオ殿、状況はおいおい説明する。今は一刻も早く王都に向かいたい」

「……その顔を見るに、相当深刻なようだな。だが、王都の前にスタキア砦と同行しちやくれないか」

スタキア砦はここよりさらに王都に近い、伝令兵がいる程度の小さな砦だ。そう回り道にはならないだろう。

「……そこに、友軍が立て籠もっている？」

「聡いな。詳しい状況はわからんのだが、アイネから魔法鳩が届いた。五十人ほどの一般人と籠城中、魔物に取り

「……やほは危惧していた通りでしたね、セリーヌ隊長」

予想はしていたが、何も知らない王都の民が災禍に巻き込まれているとわかると、焦らずにいられない。そこに先発していた斥候が明らかに別部隊の騎士とともに戻ってくる。

「よお、セリーヌ隊長、久しぶりだな」

「あなたは——イグナシオ殿！」

それは、魔力によって稲妻のように大地を滑空する神速の部隊。イグナシオIIグレストウフ率いる第二騎士団——「紫電騎士団」だ。

「帝国の先遣隊とアヴァルスの国境でやりあってたんだが、セリーヌ殿と再会できるとは、俺も運がいい」

「その様子では、無事に帝国は撃退したようだな」

頬傷をいくつも残す歴戦の勇士の笑みに、セリーヌも思わず破顔しかけるが、一転きりりと顔を引き締める。

「イグナシオ殿、状況はおいおい説明する。今は一刻も早く王都に向かいたい」

「……その顔を見るに、相当深刻なようだな。だが、王都の前にスタキア砦と同行しちやくれないか」

スタキア砦はここよりさらに王都に近い、伝令兵がいる程度の小さな砦だ。そう回り道にはならないだろう。

「……そこに、友軍が立て籠もっている？」

「聡いな。詳しい状況はわからんのだが、アイネから魔法鳩が届いた。五十人ほどの一般人と籠城中、魔物に取り

「……やほは危惧していた通りでしたね、セリーヌ隊長」

予想はしていたが、何も知らない王都の民が災禍に巻き込まれているとわかると、焦らずにいられない。そこに先発していた斥候が明らかに別部隊の騎士とともに戻ってくる。

「よお、セリーヌ隊長、久しぶりだな」

「あなたは——イグナシオ殿！」

それは、魔力によって稲妻のように大地を滑空する神速の部隊。イグナシオIIグレストウフ率いる第二騎士団——「紫電騎士団」だ。

「帝国の先遣隊とアヴァルスの国境でやりあってたんだが、セリーヌ殿と再会できるとは、俺も運がいい」

「その様子では、無事に帝国は撃退したようだな」

頬傷をいくつも残す歴戦の勇士の笑みに、セリーヌも思わず破顔しかけるが、一転きりりと顔を引き締める。

「イグナシオ殿、状況はおいおい説明する。今は一刻も早く王都に向かいたい」

「……その顔を見るに、相当深刻なようだな。だが、王都の前にスタキア砦と同行しちやくれないか」

スタキア砦はここよりさらに王都に近い、伝令兵がいる程度の小さな砦だ。そう回り道にはならないだろう。

「……そこに、友軍が立て籠もっている？」

「聡いな。詳しい状況はわからんのだが、アイネから魔法鳩が届いた。五十人ほどの一般人と籠城中、魔物に取り

その深淵を覗き込んだ時、自分は自分ではいられなくなるかもしれない。

「頼りにしてるぜ、英雄王の再来さんよう！」

リニア・ドライブで先行するイグナシオの軽口に、セリーヌは硬い笑みで返すことしかできなかった。

時を同じくして。

セリーヌたちと別れ、「自由の剣」との合流を急ぐフィオナ、ミーシャ、ルシィフ、そしてメイベルローゼとその忠臣である女騎士イーバは、盗賊の群れに囲まれていた。

否——囲まれていたのはほんの一時のこと。ミーシャとイーバの連携攻撃、そしてフィオナの聖魔法によって、あつという間に形勢は逆転していた。

「うわあああつ、何だこいつら、何て強さだ！」

「女ばつかのカモが来たと思つたら、こいつら化けもんだ……」

「だくれが化けもんにやあつ！」

怒りの咆哮とともに細身の二刀が空を裂き、盗賊どもの蛮刀を叩き伏せる。サーシャに操られた黒セリーヌによって、愛用の大包丁を砕き折られたミーシャだが、今はツインシルバリングを変化させた二本の細身の剣を振るっている。

「誰がどう見てもあんたのことでしょ、化け猫」

「うるさいにやっ、戦えない奴は下がってるにや！」

猫耳幼女の言葉に、メイベルローゼはふんと鼻を鳴らしてそっぽを向く。ミーシャに言われるまでもなく、今のメイベルローゼは魔眼が使えない。サーシャの施した忌錮エネカラに封じられているのだ。

「くそつ、あのあばずれ、とんだ置き土産を……私の手でぶち殺せなかつたのが心残りだわ」

「に、逃げろおおつ」

「あつ、待つにや……って、わざわざ追うまでもにやいか……ッ？」

這う這うの体で背を向けて逃げ惑う盗賊たちを、魔力の炎が包み込んだ次の瞬間大爆発が起こり、盗賊たちは粉々の肉片と化す。

強力な魔力攻撃……もちろんそれを放ったのはフィオナでもメイベルローゼでもない。

「魔術部隊と重装兵……オラリオ軍に、帝国軍だと！」

帝国の兵だったイーバが見紛うはずもない。数こそ少ないが、重装兵の甲冑は確かにバードベルグのもの。

そして魔術部隊と一〇〇人は下らないう歩兵は、帝国の属領とも擲擧されるオラリオ連盟の兵士だった。

「くつくつく……これはこれは、メイベルローゼ元姫殿下に、イセリアの肉便器皇女ではありませんか」  
「どうして私たちがオラリオに向かっていることを……」

言いかけたフィオナの顔が、苦悩に歪む。おそらく、オーダイの人間が帝

国に通報したのだろう。

重装兵は幅広の剣を抜き放ち、じりじりとミーシャとイーバを囲むように距離を縮めてくる。その背後では術師部隊が次の魔法の準備をしている。

「チビオナ！ 抗魔法呪文の準備にや、イーバは我と連携、こいつらをひとりも通すにやッ」

「応ッ！ グランソード・フレイムツ」  
魔法剣士でもあるイーバが呪文を唱えるや、剣が炎を纏う。

だがフィオナは魔法しか使えないし、メイベルローゼの魔眼も使えない。数で押されればフィオナたちの劣勢は明らかだ。

「この裏切り者めが！ 大人しく投降するなら、その裏切り姫ともども、我が部隊の性欲処理係として雇ってやつてもいいぞ、イーバ？」

「断る！ 我が主はメイベルローゼ様ただ御ひとりで！」

「いいだろう、後悔するな！ 歩兵隊前に！ 魔術部隊攻撃せよ！」

だが、攻撃開始の号令をかけたはずの重装兵が、突如動きを止める。ぐらりとよくれたその背中には、矢が深々と突き立っていた。

「奇襲——ッ！ 背後より奇襲——ッツツ！」

「な、何だと、どこの部隊だ……」  
後方から魔法攻撃を仕掛けようとしていた魔術部隊に大量の矢が降り注ぎ、隊列が崩れる。

「ブラッディ・カーニバルツツ！」

裂帛の気合とともに双剣の剣士が竜巻のように回転乱舞しながら斬り込んでくる。襲いくる刃の乱舞に歩兵隊が一瞬で蹴散らされる。

「あ、あれは……あの技は！」  
小柄な体躯と紫のツインテールに、見覚えがあった。

イセリア英雄公国第三騎士団の副団長に抜擢されながら、常に努力を怠らぬ生真面目な少女の名を、フィオナは叫んでいた。

「レーシア……レーシアリスカール！」

「イエス、ママ！」  
レーシアに続き、燃えるような赤毛の美女が高々と剣を掲げ、帝国軍に怒りの目を向けて朗々と叫ぶ。

「悪辣なる帝国とその従僕ども！ 我ら『自由の剣』が、貴様らの横暴を止めてみせるツツ」

「うおおおおおおお」  
「帝国とオラリオの奴らをぶつ倒せええええツツ」

赤毛の美女の背後から、数十名の戦士たちが雄叫びをあげて歩兵に襲いかかる。

帝国軍とオラリオ軍は、奇襲に総崩れ。紫の髪の少女はフィオナに駆け寄り、恭しく膝を折った。

「フィオナ様、私は、私はクアール湖で姫様を守りきれず……ううッ」

「いいのよ、いいのレーシア。貴女こそよく無事で……それで、あの赤毛の方は……」

「イセリア英雄公国皇女、フィオナ様ですね。あたしは反帝国組織『自由の剣』の戦闘隊長シェリルIIソンプランです。お見知り置きを」

「こちらこそ、レーシアを保護してくださってありがとうございます。わたしは……」

と、フィオナが名乗りかけた時、シェリルたちの背後から帝国兵が斬りかかる。

「ふんっつ」やあつ」  
危ないとフィオナが叫ぶより早く、シェリルの大剣とレーシアの双剣が帝国兵を斬り伏せる。

「お話はいいつらを片付けてからにしましょう。行くよ、レーシア」

「ハイ！ はああああ、ブラッディ・トルネードツツ！」

「ライトニング・クラッシュツツ！」  
紫の竜巻と化したレーシアが帝国兵の間を駆け抜けて血の雨を降らせると、すかさずシェリルが剣に稲妻の力を乗せ、大上段から一気に振り抜ける。

雷撃を伴った凄まじい衝撃波が重装兵を紙人形のように吹き飛ばし、帝国・オラリオ連合軍は見る影もなく敗走を始める。

半刻と経たぬうち、帝国軍は全滅、オラリオ軍も無傷で逃げのびた兵はただのひとりもいなかった。

反帝国レジスタンス「自由の剣」は勝ち鬨をあげ、フィオナたちはシェリルの案内で、「自由の剣」の代表者ミリーメイソンとの会談に臨むこと

となつたのだつた。

フィオナがレーシアとの再会を喜んでいた頃。

イセリア東に位置するスタキア砦では、蒼龍魔法中隊がイセリアの民とともに魔物の群れを逃れ、籠城していた。「ティファちゃん！ こっちは駄目だよお、石壁が崩されちゃう〜！」

北側を守っていたワーウルフの少女の声に、金髪のワーウルフの少女が歯噛みをする。

優秀な魔法軍師であるティファアナ「ミルヴァンレージといえど、砦の脆さはいかんともしがたい。

「ちゃんづけはやめなさい！ アル、そちらは放棄よ。ユーリの援護に回つてちょうだい！」

アルと呼ばれた獣耳の少女は、わおんと一声吼えてから、器用に岩壁を駆け昇っていく。元奴隷のワーウルフ少女は、近接戦では頼りになる。

「ティファアナ、雷撃は撃てそうか」砦最上部から声をかけたのは蒼龍魔法中隊の部隊長のひとりのラルカ。ワーウルフは悔しそうに首を振る。

「魔力回復までもう少しね。アイネ、崩された北側に幻惑魔法をかけて！」

「承知した。だが魔物相手では効果は期待できないぞ？」

聡明な魔法軍師はそんなことは百も承知だろう。だが、魔物の侵入を許すわけにはいかない。アイネは魔法をかけたが、イグナシオに向けて放つた

魔法鳩のことを思う。

（術師の疲労も限界にきている。第二騎士団が来てくれれば……）

王宮地下からの魔物の出現騒ぎで、とにかくできるだけ多くの民を避難させるのが精いっぱいだった。いよいよとなれば、魔法中隊全員で魔物と刺し違えてでも民を逃がさねばならない。その時だった。

ずつがああああ……んつつ。凄まじい地響きとともに、砦全体が大きく揺さ振られる。ついに侵入され

たか、と飛び出したアイネの眼前で、奇跡が起こっていた。

「ミノタウロスの群れが全滅……？ それに、あれはイグナシオ隊長！」

「よおつ、待たせちまったようだな」疾風のように魔物の間を駆け抜け、オークを次々に斬り伏せていく「紫電騎士団」。だがその背後から、別のミノタウロスの群れが迫る。

「危ないッ、後ろ……」

「インペリアルダイブッ！」漆黒の魔剣を構えた美剣士が、醜悪な魔物の群れに突撃すると同時に、強烈な衝撃波と魔力がケダモノたちを薙ぎ払う。

「あ、あれは……騎士セリーヌ殿！」イセリア英雄公国第一騎士団長にして、英雄王の再来とも呼ばれた奇跡の女騎士が、愛剣クラウソラスを構え、魔物たちと対峙する。

「……我が魔剣の鎧となりたき者は、かかつてこいつ!!」

「ぐるおおおんつつつ」

血に飢えたケダモノたちに、彼我の実力差などわかるはずもない。

アイネたち魔法中隊の援護射撃のもと、イグナシオとセリーヌ、そして集結した騎士団はその場にいた魔物を一匹残らず殲滅したのだつた。

「ありがとうございます。ですが、まだ王都には避難し遅れた民が……」セリーヌを出迎えたアイネに、美騎士は力強く頷く。

「ああ、もちろんだ。我ら騎士団の力を結集し、魔物を駆逐し、王都を奪還するぞ！」

「はいッ！」

その時、アイネは言い忘れたのだが、王都に取り残されたのは、イセリアの民だけではなかった。

王宮の地下に造られた牢獄——敵国の捕虜などを収容する場所にも、逃げ遅れた、とうるか逃げることもできない人々がいたのだ。

「んもおっつ、いったい全体何がどうなってるのかしら〜？」

牢獄にしては多少ましな部屋に押し込まれているのは、脂ぎった団子鼻のでっぷりと太った男。金髪のロン毛はべつとりと生白い肌に張りついて、なぜか女のような言葉遣いをしている。

「この華麗で高貴なわたしを、こんなクソしょぼい牢屋に繋いでおくこと自体が不敬罪に値するって言うのに、今日は何なのよ、食事も支給されないじゃないのッ！」

彼の名はゴルヴァーナールオーギユスタン。かつてノイル砦での戦いにおいて捕らえられた帝国の第二皇子である。

幸か不幸か、牢獄はメイズと離れた場所であり、イセリア王都で今何が起ころうとしているのか、彼には知る由もなかった。

「ふむん……けど、見張りまでいなくなつたって言うのはさすがに変ねえ。はっ！ まさか高貴なわたしを救出するために、お父さまがイセリアに攻め込んでくれたのかしらん？」

きらりと狡猾そうに目を輝かせると、肥満男はやおら自らの口を突っ込み、何やらおげおげとやり始めた。

「ごり、ぼりと言う異音とともに分厚いたら唇から取り出したのは巨大なさし歯。そして小さいながらも宝玉。

「く〜く〜く〜、これは『万が一の時のために』お父さまから与えられたとっておき……何だか周囲の魔力が上がつているようだし、イセリアの小娘どもに仕返しよおっつ」

おほほほほ、という甲高い不気味な笑い声が、牢獄に響き渡っていた。

フィオナが「自由の剣」代表者、ミレイメイスンと会見する前、ちよつとした一問着があった。

「き、貴様はフィオナ様を攫ったパードベルグのメイベルローゼとその手下！ 貴様らは、どの面下げて姫様に同行してるんだあつ！」

「ふんっ、確かに攫ったのは私だけど、  
フィオナを帝国から連れ出したのも私  
なんですからね、感謝して欲しいくら  
いだわ」

「なんだとおお〜っ」  
「……やれやれにや……」

「皆さん——我らの代表がお見えに  
なりました」

赤毛の女剣士シエルの言葉に、レ  
ーシアは渋々黙る。勇ましい女剣士と  
ともに現れた「代表者」は、レジスタ  
ンス組織の長にはとても見えなかった。  
（神官の衣装……あの紋章はシエリル  
さんの武具にも刻まれている）

「ようこそ、フィオナ殿下。我ら『自  
由の剣』は貴女を歓迎します」

「ありがとうございます」

ミリーの穏やかな声音と物腰に、フ  
ィオナは背筋を伸ばして会釈する。

「では早速、今後について話しあいま  
しょう」

ミリーとの会見は、あつけないほど  
スムーズに進んだ。

元よりも帝国の暴虐に抵抗して  
いた者同士、共感するところもあり、  
何よりもミリーの柔らかな雰囲気、  
これまでに幾多の苦難を強いられてきた  
フィオナたちの心を優しく受け止めた  
のだった。

「帝国は力によって民を、自然を、そ  
して世の摂理をねじ曲げようとしてい  
ます。わたくしは神の真意に背くその  
行いを看過することはできないのです。  
イセリアの皇女である貴女に助力する

ことは、わたくしの、いいえ神の御意  
志に他ならないでしょう」

「ありがとうございます、ミリー様」

会見の場を何より和ませているのは、  
ミリー本人の人徳によるものだろう。

立場柄、フィオナも神官と呼ばれる  
人間と交流する機会はあるが、彼らに  
ありがちな権威主義というか、ある種  
居丈高な態度がミリーには欠片も存在  
しなかった。

「ふむむ、にやんだか春の陽だまり  
みたいなあつたかい人でよかつたにや、  
チビオナ？」

「え、ええ。本当にそうですわ……」  
そう言いつつ、フィオナの胸中には  
拭いきれぬ涙のようなものが残されて  
いる。

ミリーに対してではない。  
彼女の穢れを知らぬ純粹な眼差しに  
見られれば見られるほど、自分がどれ  
ほど穢れているのか、それが気になっ  
て萎縮してしまうのだ。

もちろん、それはフィオナの責任で  
はない。すべては帝国との争いの中、  
ギユスターヴの飽くなき欲望に晒され  
た結果というだけだ。

しかしその反面、フィオナ自身が与  
えられる愉悅に酔いしれ、あまつさえ  
皇女の立場すら捨てて憎きギユスター  
ヴに隷属しようとしていたという心の  
弱さを露呈したという現実も、確かに  
存在するのだ。

「……チビオナ？」  
「え、ええ。何でもなくてよミーシャ。

何でも無い、わ……」

会見は滞りなく進み、フィオナたち  
と「自由の剣」はともに協力して帝国  
の侵略行為に立ち向かっていくこと  
——さしあたっては魔物の脅威に晒  
されているイセリア王都奪還に協力し  
てもらうことを確約した。

まだ日が落ちてそう経ってないのに  
就寝時間だというミリーと別れ、フィ  
オナたちはシエリルの設けた歓迎の宴  
に参加することとなった。

「宴といつてもあたしらは軍隊じゃな  
い。ましてやお貴族様でもねえ。ごく  
ごくフランクな酒盛りだ、遠慮なくく  
つろいでくれ」

「こういうのは実にミーニャン向けに  
や、飲むにや飲むにや！」

「貴女……子供のくせに大丈夫なの？」  
「ミーニャンは子供じゃないにや！  
一番強い酒持ってこいにや！」

「あつははは、まあ飲もうや戦友！  
これから大戦が控えてるんだ」

「自由の剣」はレジスタンス部隊とい  
うだけあって、年齢も性別もばらばら  
で、誰が騎士かそうでないかという明  
確な区別もないようだ。

だが意外と女性メンバーは多く、酒  
盛りが盛り上がるにつれ、一部では何  
やら妖しげに絡みあう男女もちらほら  
と散見されるようになってくる。

「メ、メイベルローゼ様……そろそろ  
お休みになられたほうが」

「私まで子供扱いするつもり、イー  
バ！ あ、あんなの別に、大したこと

じゃないわよ」

「にゅふふ、さつきからノンアルコール  
しか飲んでないお子さまの言うこと  
かにや？」

「うるさい、バカ猫！」

「あ、確かにこんな品のない場にお  
姫様たちをいつまでも置いておくわけ  
にもいかないわね。レーシア、お姫様た  
ちをあたしの部屋にお連れしよう」

シエリルの言葉に従いシエリルとレ  
ーシア、フィオナ、ミーシャ、メイベ  
ルローゼとイーバは別室に案内される。

そこはシエリルの私室であるらしく、  
異国風の香が焚かれ、内装も簡素なが  
ら女性らしい雰囲気である。

「ここいらはイセリアと違って湿度が  
高くて過ごしにくいだろう。お姫様  
こいつに着替えてくるといい」

確かに宴の熱気にあてられていささ  
か汗ばんでいたフィオナは、シエリル  
の勧めに従った。だが、用意されてい  
た替えの服を見て、動揺せずにはいら  
れなかった。

「あ、あの、シエリル様、この服は……」

「おお、思った通りよく似合ってるぜ  
お姫様」

それは肌が透けて見えるほどの薄布  
のドレス。甘やかなピンク色、しかも  
裾が異様に短いので、どうかすると太  
腿の付け根まで丸見えになってしま  
うのだ。

「ち、チビオナが……せつくしいに  
や……」

「あ、あまり見ないでください……」  
「女の子しかいないんだから、恥ずかしがることもないでしょ……って、あ、あんたら何してんのよ!」  
メイベルローゼが驚くも道理、いつの間にかシエリルとレーシアが左右からフィオナにしなだれかかって、飲み物を注いでいるのだ。  
「まあまあ、こういうのはともに戦う仲間同士の無礼講って奴だ。さつきも見たろ、あたしたちはこうやってお互いの絆を深めるんだ」  
（絆を深めるため……そ、それならむげにお断りしては心証を害してしまいますね）  
肩を抱き寄せるシエリルの手のひらの熱さに緊張しつつ、フィオナは注がれた甘酸っぱい果実酒を啜る。  
「それにね——」  
と、シエリルはフィオナの形のいい耳朶に唇を寄せると、ささやくようにとんでもないことを言い出す。  
「お姫さん、あなた……生娘じゃないね。見た目の初心さとは裏腹に、その綺麗な身体は相当開発されてる」  
「な……」  
「あたしもそれなりに男を知ってるからね、仕草や素振りでもわかるのさ。けど、それは決してあなたが望んだことじゃない。そうせざるを得なかった状況に追い込まれた結果だ」  
シエリルの柘榴色の瞳は、フィオナの受けてきた激しい陵辱のすべてを見透かしているようだった。

「そうそう、うちの大將さあ、どうしようもない堅物だろ? ミリイの永遠の恋人は神様の教えで、心も身体も一切汚れたことのないおぼこなさ。そして、そんなミリイを見るあなたの目つきは、羨望に溢れていた」  
「わた、くしは……」  
今にも泣き崩れそうになるフィオナを、女戦士は優しく抱きとめる。  
「あなたを責めてるわけじゃない。でも、あまり自分を卑下するのはよくないよ。大丈夫、あなたは強い子だ。どんな辛い状況に流されたって、自分を見失わなければ、あなたの経験はきつとあなたのためになる」  
「そう……でしょうか……」  
「ああ。あたしがそれを教えてやるよ」  
言うや否や、女戦士の大きな手がそつと皇女の顔を扶む。驚きに半開きになった唇に、己の唇を重ねてきた。  
「いや、にやんですとおろろろっつ」  
「シエ、シエリル様!? あの、いくらなんでも姫様にそんな……っ」  
「舌と舌とが絡みあい、甘い果実酒味のシエリルの唾液が流れ込んでくる。これまでできてきた辱めのカスではない愛情たつぷりの接吻に、フィオナは頬が熱くなるのを感じた。  
（すごい……舌で舌を愛撫されているみたい……恥ずかしいけど、気持ちいいです）  
同じ女同士、快感を感じるところがわかっているかのような舌の動きに、

思わず身を委ねてしまう。  
「ふあ……ん、んう……っ」  
たつぷり二十秒以上も舌を絡める濃厚なキスをしてから、ようやく顔を離す。フィオナも、そしてシエリルの顔も興奮に火照っている。  
「ふう……ご馳走様。無礼講だって言つたろ、レーシア。ほれ、お前もこっち来いって」  
「え、や、あの……んむうううっ」  
強引に抱き寄せられ、唇を奪われるレーシア。赤毛の女戦士は両手に花と言わんばかりにレーシアの唇と、さらにフィオナの乳房を薄布の上からぐいぐいと揉みしだく。  
「あつ、あふ……シエ、シエリルさん……もつと、優しく……あんっ」  
それでも振り解けないのは、強引な愛撫がなぜか心地よいからだ。  
一見乱暴に見えるが、そうではない。緩急のリズムをつけて肉球を弄ぶ絶妙の力加減に、揉まれていないほうのニップルも硬く痼り始め、薄布と擦れてじわりと快感が広がる。  
「ひ、姫様があんな色っぽい声をお出しに……あつ、あ、シエリル様あ」  
赤毛の女戦士はレーシアの首筋に舌を這わせながら、腰に回した手を怪しく蠢かし、尻から太腿のラインを何度も愛撫する。  
他愛なく喘ぎ始めるツインテールの少女もまた、シエリルの手で相当に開発されているのは明白だ。  
「くくっ、いつもより反応がいいじゃ

ないか、レーシア。愛しのお姫様と再会できたのが余程嬉しいんだね」  
「う、嬉しいというか、恥ずかしいというか……きゃふうんっ」  
フィオナやレーシアの目がとろりと虚ろになっているのは、シエリルの愛撫の効果だけではない。ミーシャの嗅覚は、焚かれている薬香に媚薬効果があることを感じ取っていた。  
ただ、目の前の淫らな絡みあいを止めるつもりはない。  
シエリルに悪意がないのは明白だし、陵辱ではない形での悦楽を知るのは、緊張を強いられてきたフィオナにとつて悪いことでもないと思ったからだ。  
「ふふふ、お姫様と美少女が絡んでる光景は美しいねえ」  
シエリルの視線の先では、レーシアがフィオナにすがりつくように、ちゅちゅちゅと啄ばむようなキスを浴びせている。  
「姫様……私は本当に、姫様の御身を案じておりましたのですよ……」  
「んっ、レーシア……クアール湖で離れ離れになってから、心配をかけたわね。でも、あの、ちよつと」  
「私のはあの後『自由の剣』の皆さんに保護されて……シエリル様とも、その、十分仲よくしていただいて」  
「そ、そのようね……あふんっ」  
小動物のようにじゃれついでくるレーシアにフィオナは困惑する。これまで幾度となく陵辱に遭ってきた乙女の柔肌の緊張を、しかし少女の愛撫が



徐々にほぐしていく。

「フィオナ様……あの悪辣な帝国に囚われ、どんなひどい目に遭わされたことか……私に、その忌まわしい記憶を上書きさせてください」

ほとんど素肌に触られてるも同然の薄布のドレスの上から乳房を揉み上げながら、首筋に舌を這わせてくる。

小柄ながらよく鍛え引き締まった肢体を擦り寄せ、片手をフィオナの下肢の付け根に潜らせてくる。

「あ、うんっ。そこは……っ」

小柄で痩せ型のレーシアと違い、フィオナの肢体はむっちりとした肉がついてどこもかしこも柔らかな曲線でできている。

薄布から伸びた太腿の内側を揉むように手を差し入れると、指先は容易く乙女の大切な部分に到達する。

「フィオナ様……ここ……濡れてらっしゃいます」

「は、恥ずかしいわ、レーシア……」

最初は緊張気味だったフィオナも熱い眼差しを絡ませる。若い恋人のようなベレーゼを交わしながら、お互いの身体をまさぐりあう。

「ふふふ、ふたりとも興が乗ってきたようだねえ……どれ」

「ひゃっ、シエ、シエリル様？」

ふたりの美少女を独り占めするように抱きかかえ、赤毛の美女は背中をすうっと撫で下ろしていく。

フィオナは裸身が透けて見える薄布の衣装、そしてレーシアは両肩と腹部

が露出した軽装。フィオナの柔らかな肌と、健康的なレーシアの腰まわりをじっくりと堪能しながら、ふたり交互に口づけをする。

「甘くていいにおいだねえ、お姫様は。唇もぶにぶにだ」

「ふあっ、シエリルさん、そこは」

気がつけばシエリルの手が薄布の内側に潜り込み、ヒップや太腿を撫でさすっている。

しかもレーシアがとろんと蕩けた眼差しでフィオナを見詰めながら、おもむろに薄布の上からニツプルに吸いついてくる。

ほとんど直に舐められているような感触に、フィオナの背筋にびりりと快感が走り抜ける。胸に気を取られていると、するりとシエリルの手が内股の奥に潜り込んで、下着の上から乙女の秘奥をさわさわとさする。

（だめ……あそこが濡れているのわかってやう！）

もちろん、シエリルはフィオナが感じていられることを承知でさらに巧妙に愛撫の手を強める。

恥ずかしいと思っても、フィオナは女戦士の手管に股間が熱く濡れるのを抑えられない。

「いいんだよ、抑えなくて……ほら、レーシアだってあんたをうんと気持ちよくさせようとしているんだ」

「んっ、ちゅっ、フィオナ、さまあー」

幼子のように乳房に吸いつき、懸命に抱きついてくる小柄な少女の髪を優

しく撫でると、信じられないほど優しい快感に包まれる。

（わたくしは……彼女たちに身を委ねてもいいの？ だって、シエリルさんもレーシアもこんなに温かい……）

今まで悪意の陵辱者に弄ばれ、開発された自分の身体。

強制的に感じさせられ、自分がどうしようもない牝である何度も思い知らされた。快楽に打ち震える度、それと同じくらい自己嫌悪に苛まれてきた。

「フィオナ、様……レーシアは嬉しいです。姫様が無事で、こうしてお傍にいられるのですから」

「レーシア……レーシアッ」

レーシアは幼子のようにフィオナにしがみついて、その柔らかな肢体を抱きしめる。されるがままに口づけされ、肌を火照らせる皇女が愛おしい。

レーシアだけではない。シエリルの指先が下着の内側に入り込み、くちゅくちゅとフィオナの肉唇をリズムカルにかき回してくる。

「んう、はあ……んっ！ そんなにかき回されたら……あひいんっ」

「いい感度だ、何度でもイカせてあげるよ、お姫様。そらそらっ」

くちゅくちゅくちゅつ、にちゅ、にちゅつ。ペニスほどの太さはないが、シエリルは膣内で自在に指を曲げ、ある一部分を執拗に刺激してくる。

蜜液のぬめりが加わると、指の動きはますます激しく、容赦なくフィオナ

を愉悦に叩き込んでくる。

（だめ……わたくしの一番弱いところ、知られちゃつてるうう！ 指先でこりこりされたら、おまんこびりびり痺れちゃううっ）

「フィオナ様っ、んちゅつ、れるる、むちゅうんっ」

シエリルの指愛撫とレーシアの舌を絡めるディーブキス。上と下からの同時攻撃にフィオナは抵抗することもできず、ただ快楽に手足を痙攣させる。

「姫様っ、姫様あっ」

「あつ、あ、ふううんっ！ わ、わたくし、もう……もう……っ」

絶頂寸前のフィオナに優しく微笑みかけると、シエリルは手首のスナップを利かせ、姫穴を激しく掘削する。

指先は的確にGスポットを捉え、しなやかな膣壁を摩擦し、美姫の咽から悦楽の声を引き出し続け――。

「ふあああ、イク、イッてしましますううっ！ あひいひいひいっっ」

ぶしゃあああつ、ぶしゃつ。

強烈な光が目の裏で瞬々と同時に、フィオナは絶頂の潮を迸らせていた。

痙攣する肢体をレーシアが抱きしめ、乳の谷間に熱い吐息を吹きかける。

「あつ、まだわたくしイッて……ひいんっ」

なお続く愛撫に、フィオナは再び快感に飲み込まれるのだった……。

その様子の一部始終を見ていたメイベルローゼは、もちろん中に入っていない。ききたいなどとは考えていない。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**